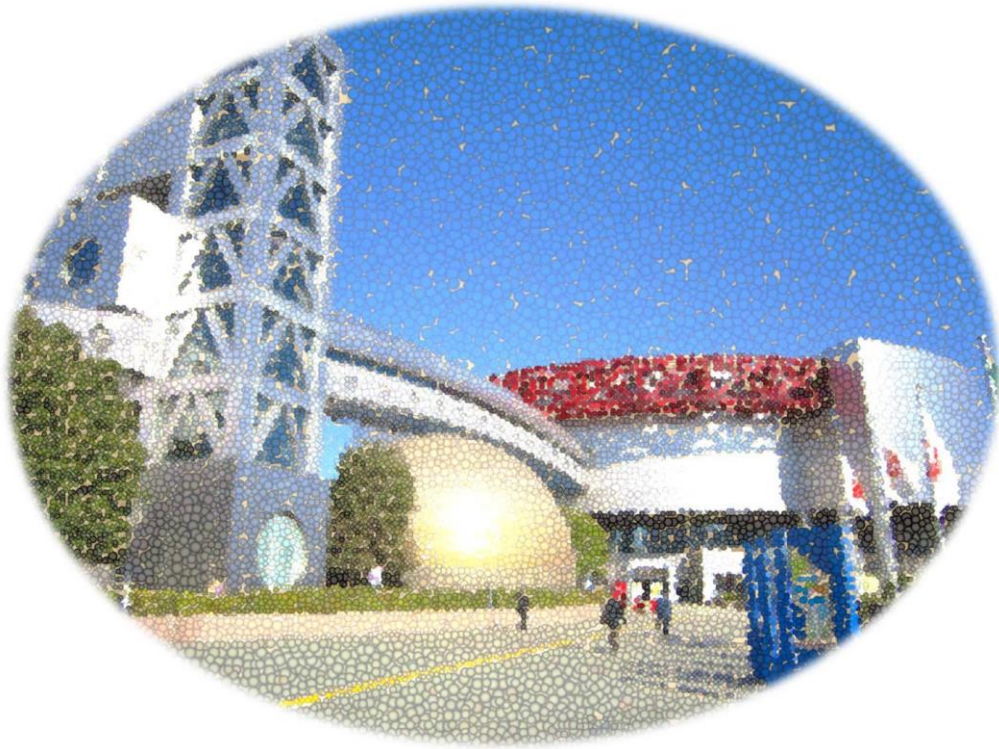


平成27年度

英語教育アドヴァンスト研修

授業改善プロジェクト 報告書

—アクション・リサーチによる高等学校英語授業の実践—



神奈川県立国際言語文化アカデミア

はじめに

神奈川県立国際言語文化アカデミア 所長
三國 隆志

外国語を生徒たちが勉強することが周囲からの強制ではなくて自発的なものであることを願うのは教員としては当然なことだ。しかしこれほど難しい作業はない。生徒の自発性をどのように引き出すか。職業上の技能だけでは成功しない。個人的な話を許してもらおうと、入学試験に落ちて予備校に通い始めた日、北海道大学を退職した白い髭を生やした老先生が、ゴム長靴についた雪を（外は雪が降りしきっていた）とんとんと床に打ちつけて落としつつ悠々と教壇に上がってきた。英語の文章をいかにも楽しそうに朗読し、いかにも楽しそうに解釈し、いかにも楽しそうに微細にわたって統語法と文法を説明し文学的コメントまでつけて淡々と授業を進めていく。何だか受験勉強をしているというより、受験英語を超えた大きなものを教えられている気がした。ゴム長の老先生から溢れる教養のオーラは、さすがに無知な予備校生のわれわれにも伝わり、いままで経験したことがない印象が刻まれた。考えると、高校時代は黒い僧服をまとったフィリピン人やカナダ人の修道士が、英語で数学を教えたり英文法を教えたりしてくれたのだが、当時の私にとっては、猫に小判ともいえようか、なにか釈然としないものがあつた。もし神学や宗教学を教えることができたならブラザーたちもあれほど無味乾燥な授業はしなかったろう。だが、それは高校では教えることは許されていなかった。週に1度、小柄なフランス人の司祭が訛りのある日本語で使徒行伝の一節を読み上げてわれわれに書き取らせる授業があつた。退屈して居眠りすると司祭は顔を真っ赤にして、体を震わせて怒るのであつた。その怒り方があまりに嘘がなかつたので、これもわれわれにある種の感銘を残した。自分が伝えようとすることは人間である限り最も大切なものであるという気魄が伝わってきたからである。予備校のゴム長の老先生もまた一生を費やして英語と英文学で養われた自分のこころの歓びを予備校生にすら伝えようとした。ミルトンやシェイクスピアの一言半句を覚えたのは雪の降りしきる北国の街にある予備校の寒い教室においてであり、機動隊が常駐し催涙ガスが構内を流れていた大学の教室ではなかつたのだ。ゴム長靴の老先生から受けた感銘というものはそこにはなかつた。教員と医者と宗教者は、所詮は人間に不可能なことを試みる人たちと言われている。生徒を救い、患者を救い、悩める者を救うという凡そ人間には不可能と思える作業をしようとする動機とはどんなものか？人間を教える、助ける、救済するという行為は正しい、美しい、喜ばしいものであるからにちがいない。そうであれば、これは召命のようなもので、教員になったのは天職なのであり半端な気持ちではできない。教員は力の限り自分を切磋琢磨して教員自身が持つ教養のオーラを生徒に感じさせる義務がある。ゴム長靴の老先生は *per ardua ad astra* というラテン語を教えてくれた。苦勞すればいまを突破して美しい世界に出られるという若者たちへの激励でもあつたろう。生徒に学ぶ喜びを与え、人間的魅力のある教員になることが何よりも大切だ。

目 次

「英語教育アドヴァンスト研修」とは	1
「教師が変わり、生徒が変わる授業」を目指してー授業改善プロジェクト	3
「聞くこと」にかかわる指導	
達成感とスキルの向上を目指した日々のリスニング指導	5
「話すこと」にかかわる指導	
オーラルサマリーによるスピーキングスキルの育成	9
コミュニケーションへの積極性を育てる英語授業	13
4コマ漫画を用いたスピーキング指導	17
「伝える」ことを意識したスピーキングの指導	21
英語による「受け答え」のスキルを育てる指導	25
話すことへの積極性と自信を高める指導	29
スピーキング・フレームを活用したスピーチ指導	33
自信を高めるスピーキング指導	37
生徒の活気を取り戻す「話す力」重視の授業	41
「読むこと」にかかわる指導	
初見の英文を用いた主体的リーディング活動	45
英語が苦手な生徒のためのリーディングスキルの育成	49
トップダウン・リーディングを中心とした統合的言語活動	53
クリティカル・リーディングのスキルを育てる読解指導	57
日本語訳に依存しないリーディングの指導	61
予習に基づく訳読授業からのパラダイムシフト	65
主体的な読解を促すリーディング指導	69
生徒主体の質疑応答を通じた英文理解	73
英語で進める Pre-While-Post のリーディング授業	77
自立した読み手を育てる英語授業	81
Pre-While-Post の読解活動による主体的な読み手の育成	85
「書くこと」にかかわる指導	
読む力と書く力を育むサマリーライティングの指導	89
協同学習を使った効果的ライティング指導	93
読み手に伝わるパラグラフライティングの指導	97
生徒の日常を表現させるライティング指導	101

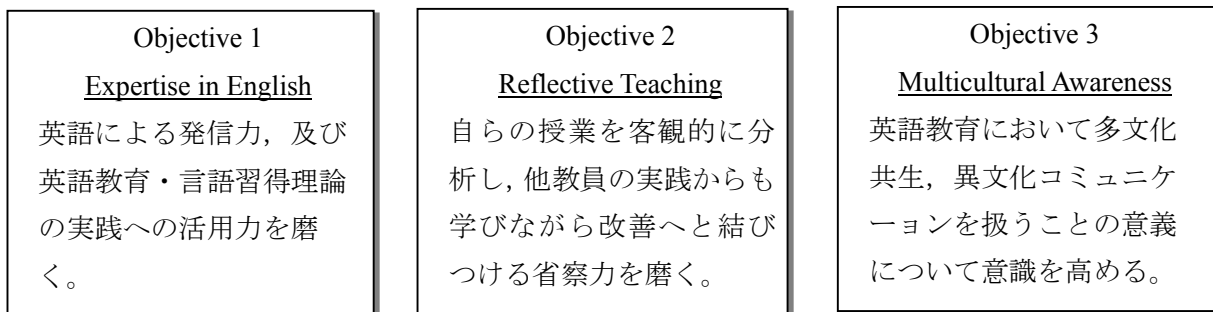
*それぞれの実践レポートの内容については、言語活動の呼称などに関し、厳密な用語の統一はしていません。

英語教育アドヴァンスト研修とは

○ 英語教育アドヴァンスト研修のねらい

英語教育アドヴァンスト研修は、神奈川県で中核的役割を担う高等学校英語科の先生方に専門性の高い研修の機会を提供することを目的とし、県教育委員会との連携のもと、国際言語文化アカデミアで平成23年度から開講されました。

集合研修9日（前期2日，夏季4日，後期3日），勤務校での授業研究1日（前期・後期各半日，研修スタッフ訪問）から構成される合計10日間のプログラムは、「英語教師の専門知識，英語による発信力」「授業研究，授業改善」「多文化共生，異文化コミュニケーション」を3つの大きな柱としています。

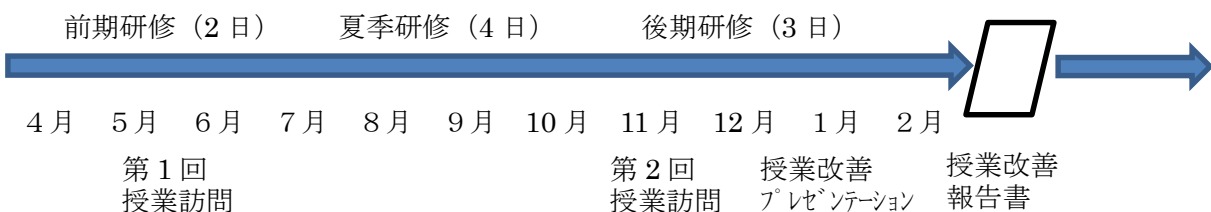


平成27年度までの5年間で、計97名の参加者が、高度な言語知識・技能及びそれらを基盤とした指導力を身につけ、仲間の教員との共同による英語教育推進に貢献すべく県内の各学校で活躍しています。

毎年プログラム内容に修正を加えながら、英語運用能力向上の試みをはじめ、省察による授業実践力向上、多文化共生・異文化コミュニケーションへの意識高揚など、研修内容の改善と充実に取り組んできました。

○ 研修成果を活かす場としての授業改善プロジェクト

研修内容は教室でのよりよい授業実践，生徒の英語力向上へと結びつかなければなりません。しかし、教師であれば授業改善の複雑さ・難しさは身をもって経験しています。そこでアドヴァンスト研修では、集合研修において多文化共生への意識，英語力，英語教育に関する専門知識を高めながら，勤務校では継続的に授業改善に取り組むことができるように授業改善プロジェクトを取り入れています。



○ 振り返ることの意義

「なぜ今日の授業でこの言語活動をしたのだろうか」とあらためて自問すると、その理由を必ずしも明確に答えられないことがあります。「本当はコミュニカティブに教えたいが、受験があるので文法演習をしている」という場合もあるでしょう。省察的実践の意義は、(1) 教師としての信念や英語教育の目的を再確認し、(2) 授業目標を達成するのに理に適った実践をしているか否かを見極め、(3) 実践の効果についての客観的なデータを分析することにより、恒常的な授業改善につなげることにあります。

報告書の「改善のための手だて」からは、こうした振り返りを通して、研修参加者が授業の重要な要素であるところえた活動を読み取ることができます。

- 英語の音やリズムに慣れ、教材や教師の話す英語を聴いて理解する活動
- 日常的な話題について自分の気持や考えを話したり書いたりする自己表現活動
- トピックについての予備知識を確認したり、英文の書かれた目的や意図を考えたり、図を使ったり、話し合ったり、要約したり、自分のことばで説明したりする活動
- 重要な語彙・文法項目を学び直し、しっかり定着させるための言語活動
- 考えを整理したり、活動の結果を振り返ったりする活動

日々の授業での生徒の学習状況の観察をはじめ、多様な振り返りの手法を身につけ、恒常的に省察的実践を続けることが、よりよい授業実践につながります

○ 報告書作成の目的

本報告書の目的は 3 つあります。第一に、研修参加者が自らの授業改善の軌跡を記述しお互いの情報を共有することで今後の授業改善のための共同体づくりに役立てること。第二に、報告書の内容を他の英語科教員と共有することで、授業改善に関するアイデア創出に資すること。第三に、高等学校英語教育の課題やそれに対する現場の取組状況を公表することで、英語教育や教師教育にかかわる研究者の今後の研究に資することです。

お読みになる際は、以下の本報告書作成・編集方針をご理解いただけるようお願いいたします。

授業改善プロジェクト報告書作成・編集方針

1. 授業に参加している生徒の個性や尊厳を尊重し、生徒はみなそれぞれの可能性を持っているとの認識に立つ。
2. 学校や生徒の状況について、読者に参考となる情報を個人情報の保護に留意して記述する。
3. 実践報告については、理想論にとらわれず、現状認識に根ざした課題解決の軌跡を記述する。
4. 授業改善のプロセスやストーリーが読者にわかるように記述する。
5. データ処理や分析については、統計処理を含め言語教育研究で用いられる手法を積極的に取り入れる努力をする。

本研修の実施及び本報告書の作成にあたっては、過去の文献や研究成果、私たち研修担当者自身がお世話になった諸先生方から多くの知見をいただいていることを申し添えます。

「教師が変わり、生徒が変わる授業」を目指して－授業改善プロジェクト

○ 授業改善プロジェクトの流れ

授業改善プロジェクトは次のような手順で進められます。

1. 自分の授業スタイルの振り返り

授業で行っている個々の活動の目的と効果、活動のつながりをあらためて考えることで、英語教師としての思いと実際の指導方法の整合性を確認します。これにより、自分の授業を客観的に分析するという体験をします。

2. 授業における課題の発見

現在担当している科目の一つについて、どのような課題・問題があるか、教師の思いと授業の実情にどのような食い違いがあるかなどを、思いつく限り挙げてみます。

(例) 英文読解に終始してしまい生徒に自己表現をさせていない。

音読をしっかりとさせたいが声も小さくなかなか盛り上がらない。

3. 改善すべき課題の確定

上で挙げた課題のうち、改善可能で優先順位の高いものを一つまたは二つ選びます。

4. 生徒の現状把握

確定した課題に関連する生徒の学習態度や英語力・技能などを、質的・数量的に調査します。

(質的データの例) 生徒の英語学習に関するコメント、教師による学習観察記録

(数量的データの例) 標準テストの得点、推定語彙サイズ、発話語数

5. 改善目標の設定

授業改善の目的とゴールを、「リサーチ・クエスチョン」および「改善の目安(数値目標)」として明確に言語化します。

6. 目標達成のための手だての決定

目標を達成するために、授業でどのような指導を行うかを決めます。その際、それぞれの指導事項や言語活動にどのような目的や効果があるのかを明らかにしておきます。

(例) 新出語彙の導入に画像や映像を活用すれば、記憶の助けになり語彙の定着がしやすくなるだろう。

7. 生徒の変化の検証と教師自身の振り返り

原則的に事前の現状把握で用いたものと同じ手法で、生徒の変化・向上を検証し、改善目標が達成されたかどうかを調べます。また同時に、この一連の取組を通して「生徒の見方」「授業のデザイン」「教材の扱い方」などについて、教師自身がどのように変化したかを省察します。

8. 報告

同様の課題を抱える教師仲間との情報交換、勤務校や地区での情報提供に役立てるために、レポートを作成します。ここで再度、今回の授業改善の内容・手法を振り返るとともに、今後の課題について考察します(研修最終日に英語による口頭発表も行います)。

○ “Teacher as a Researcher” の意識とスキル

「自分が教わったように教える」「目の前の教材をあるがままにこなす」「はやりの言語活動を切り貼りする」というやり方では、うまくいかないことがよくあります。教師の直観や伝統的なやり方にもよさがありますが、生徒の質的・数量的ニーズを調べ、その客観的データに基づいて、生徒とゴールを共有しながら（変化をとまなう）意思決定をしていくという意識やスキルは、プロである教師の成長に不可欠であると考えます。この授業改善プロジェクトに取り組んだ先生方が、仲間を増やしながら、よりよい授業を追求するプロ集団をつくり上げていくことを期待しています。

○ これまでの5年間のテーマ分類

この5年間で受講者の先生方が取り組んできた授業改善のテーマを分類すると、次の表のようになります。26年度までは、「動機づけ・学習意欲」やスキルを支える言語知識である「語彙・文法」もテーマとして挙がっていますが、27年度は、『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標に基づいたスキルの習得を目指す授業実践の必要性を重視し、4技能のいずれかをテーマ（＝授業のゴール）として選択することとしています。

	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
聞くこと	0	1	0	0	1
話すこと	2	1	2	7	9
読むこと	5	4	*1 [4	*1 [6	11
書くこと	4	4	3	3	4
動機づけ・学習意欲	6	3	1	5	—
語彙・文法	3	1	2	3	—
計	20	14	13	25	25

*1：「技能統合型」

達成感とスキルの向上を目指した日々のリスニング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は2年生2クラス，計55名（男子31：女子24）の生徒である。クラスの雰囲気はともに落ち着いており，作業時は黙々とやり，コミュニケーション活動などには活発に取り組む。一方のクラスは授業や英語への関心も高く，大学進学を目指している生徒が多い。もう一方のクラスは，英語に対する関心が高い生徒もいるが，苦手意識がある，基礎学力がそれほど高くないという生徒が多い。進路では，上級学校（大学，短大，専門学校）を希望している生徒が9割を占めているが，そのうちの9割は推薦入試による進学を考えている。

解決すべき課題

「英語を話せるようになりたい」，「外国に行って英語でコミュニケーションしてみたい」という生徒が非常に多く，授業にも積極的に参加する生徒が多い一方，相手の話したことを理解したり，まとまった量の英語を聞いて概要を理解したりするのが苦手な生徒が多い。生徒が外国にいったことを想定すると，英語を話す力よりも先に，英語を聞く力を身につけさせることが必要であるとつねづね感じていた。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第1回英検3級テストの結果（7月実施：受験者数55）

中学校レベルの聞く力がどれくらい身についているかを調べるために，英検3級のリスニング問題20題を出題した。1問1点とした平均点は11.7点で，3級合格点とされる60%以上の正答率（12問正解）に達している生徒は全体の56.4%であった。

受験者数	平均点	最高点	最低点	標準偏差	合格者数(%)
55	11.7	20	0	4.64	31 (56.4%)

・英語学習に関するアンケート（7月：回答者数54）

1. あなたは英語の学習が好きですか

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
15人 (27.8%)	20人 (37.0%)	13人 (24.1%)	6人 (11.1%)

2. 英語を話す力は必要だと思いますか

必要	どちらかといえば必要	どちらかといえば不要	必要ない
41人 (75.9%)	11人 (20.4%)	2人 (3.7%)	0人 (0.0%)

3. 英語を聞く力は必要だと思いますか

必要	どちらかといえば必要	どちらかといえば不要	必要ない
42人 (77.8%)	9人 (16.7%)	3人 (5.6%)	0人 (0.0%)

4. 授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか (3つまで回答可)

聞く力	話す力	読む力	書く力
33人 (61.1%)	36人 (66.7%)	20人 (37.0%)	28人 (51.9%)
語彙の知識	文法の知識		
14人 (25.9%)	15人 (27.8%)		

話す力について、「必要」「どちらかといえば必要」という生徒の割合は 96.3%、聞く力については 94.5%と、ほとんどすべての生徒が、英語を話したり聞いたりすることの必要性を感じていることがわかった。また、その2つは、授業でもっとも伸ばしたい技能であることもわかった。

リサーチ・クエスチョン

英語を聞いて理解できることを実感させ、情報を的確に聞き取る力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

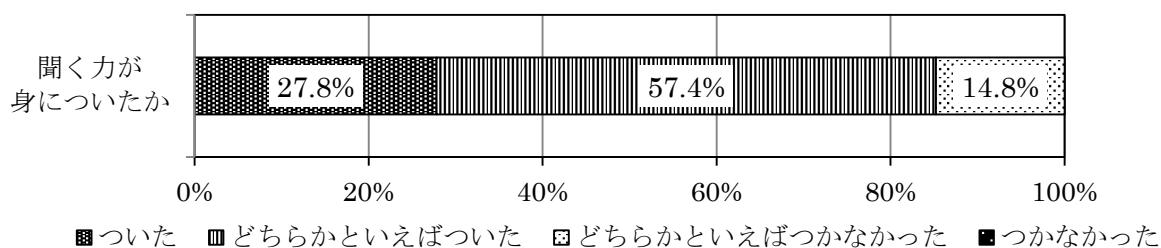
- 改善の目安：・英検3級のリスニング問題（第1部、第2部）で、6割以上正解できる生徒が全体の7割以上になる
 ・アンケートで「英語を聞く力が伸びた」と回答する生徒が7割以上になる。

改善のための手だて

- 教科書英文のプレリーディング活動として、全体の概要やパラグラフの要旨を聞き取らせれば、目的を持ったリスニングをさせられるだろう。
 - ・無理なく聞くことに集中させ、的確な理解を確認するために、日本語で解答させる。
- 難易度を徐々に上げながら、帯活動としてリスニング活動に取り組みせれば、英語を聞き取ることに慣れ、力の伸びを実感させられるだろう。
 - ・プレリーディングとしてのリスニング活動とリスニング専用教材のタスクを併用し、毎回の授業でリスニングに取り組めるようにする。
- 音素レベルの明示的なリスニング指導を行えば、リスニングの基礎力を高めることができるだろう。
 - ・個々の音や音のつながりなどについて説明し、リピーティングやシャドーイングによって練習させる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- アンケート調査－聞く力の向上について（1月実施：回答者数 54名）



聞く力が「身についた」「どちらかといえば身についた」という生徒の割合は 85.2%と、うれしい結果になった。ボトムアップ的指導を交えながら、目的や効果を理解させて、段階的・継続的にリスニング活動に取り組ませたことが、生徒の達成感につながったといえるかもしれない。生徒の自由記述にも「やればできるようになるとわかった」「習った発音が次に出てきたときに聞き取れた」など、前向きなものが多く見られた。

- 英検 3 級テストの結果比較（第 2 回－12 月実施：受験者 54）

	受験者数	平均点	最高点	最低点	標準偏差	合格者数(%)
第 1 回	55	11.7	20	0	4.64	31 (56.4%)
第 2 回	54	12.7	20	5	3.24	37 (68.5%)

平均点はわずかに向上し、6割以上の得点者も10%以上増加したが、「6割以上正解する生徒が全体の7割以上になる」という目標をあと少しのところまで達成できなかった。それぞれのクラスの正答率を見ると、一つのクラスでは50.9%から58.7%の上昇にとどまり、もう一方のクラスでは、72.3%から71.5%に減少してしまっていた。この要因としては、生徒の語彙・文法知識の不足も否めないが、未知語や細部にとらわれずに、重要情報を聞き取るための、リスニングストラテジーの指導まで系統立てて行えなかったことや、家庭学習課題としてリスニングタスクを与えるまでに至らなかったことなどが挙げられるだろう。

教師の変化

- 目標に準拠した指導計画

今までも専門書を読んで指導法を研究することはあったが、新しいものを取り入れすぎて効果的に授業を行えていないと感じていた。今回の取組を通して、目標を設定し、それに対してどのようにアプローチしていくかをシンプルに考え、活動を設定するようになった。また、専門書から得た理論などを生徒に伝え、それぞれの活動の前に、その意義を理解させるようになった。

・言語活動の厳選

生徒の反応がよさそうな活動を投げ込むのではなく、指導目標を達成するための効果を吟味しながら、活動を精選するようになった。そのことで生徒の取組状況を観察する余裕も生まれた。

今後の課題（次の改善点など）

生徒が、自立的学習者（autonomous learner）としてリスニングスキルを伸ばしていけるように、音声 CD がついた副教材など、適切な家庭学習課題を与えたい。また、3年次になると読む英文の量も増えるので、リーディングスキルの指導と合わせて、総合的にリスニングの力を伸ばしていきたい。

まとめ・感想

この研修に参加させていただき、英語教師としての自信を身につけることができた。今回の授業改善では目標を達成することはできなかったものの、生徒に達成感を与える指導ができ、テストやアンケートなどの結果から現状を分析して次の指導に生かしていく方法を学べた。リスニングに限らず、他技能の指導やティーチャートークに至るまで、英語教師に必要な知識・技術を学んだ研修機会をいただいたことに、ただ感謝の気持ちでいっぱいである。これからもプロの英語教師としての力を伸ばしていけるよう努力を継続していくとともに、学んだことを同僚の先生方と共有して、学校全体としてよりよい英語教育が行える環境づくりに挑戦していきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

木村松雄. (2011). 『新版英語科教育法』 学文社

金谷憲. (2005). 『Listening Pilot Level1』 東京書籍

オーラルサマリーによるスピーキングスキルの育成

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は2学年1クラス39名（男子21名，女子18名）である。基礎学力があり，学習意欲が高い。音読や内容の要約作成に積極的に取り組んでいるが，人前で発表する場面では消極的になる生徒が多い。約9割の生徒が4年制大学への進学を希望している。

解決すべき課題

- ・読んだ英文を理解できているが，その内容を自分の英語で伝えることができない。
- ・多くの生徒が人前で英語を話すことに苦手意識を持っている。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・授業観察

教科書本文の内容に関連する写真とキーワードを抜き出したワークシートを準備し，口頭で英文要約をさせようとしたが，黙りこんでしまう生徒が多かった。

・事前アンケート調査（6月：回答者数39）

1. 英語を話す力は必要だと思いますか。

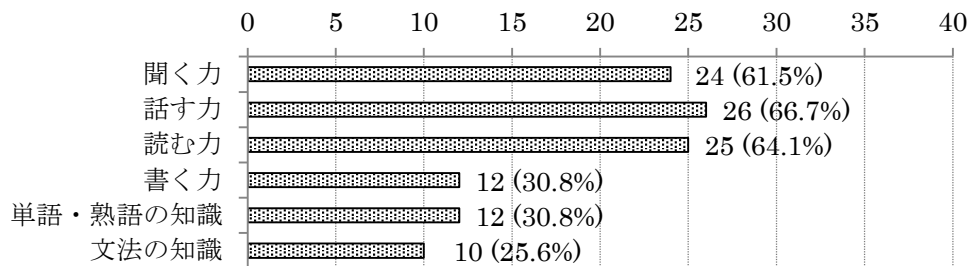
そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
30人(76.9%)	9人(23.1%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)

2. スピーチの発表を今後もやりたいですか。

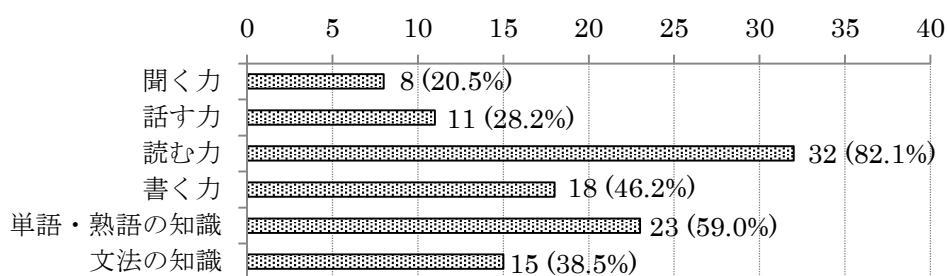
そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
2人(5.1%)	14人(35.9%)	12人(30.8%)	10人(25.6%)

*無回答：1人

3. この授業でどのような知識や力をのばしたいと思いますか。（3つまで選択可）



4. この授業でどのような知識や力がついたと思いますか。（3つまで選択可）



・ライティングテスト（4月実施：受験者数 39）

トピック：「将来就きたい職業」（理由を述べながら 4 文以上で）

5 文以上書けていて、文章の構成がよいもの	9 人(23.1%)
5 文以上書けているが、文章の構成がよくないもの	1 人(2.6%)
4 文書いてあり、文章の構成がよいもの	27 人(69.2%)
4 文書いてあるが、文章の構成がよくないもの	0 人(0.0%)
3 文以下しか書けていないもの	1 人(2.6%)
無解答	1 人(2.6%)

多くの生徒は英語を話す力の必要性を感じ、それを伸ばしたいという希望を持っているが、半数以上はスピーチなど人前で話すことには消極的で、話す力が身についていると感じている生徒は少ないことがわかった。まとまった内容を英語で書くことについてはほぼできているので、あとは他のスキルとの統合を図りながら、話す練習を重ねれば、話すことへの積極性や達成感を高めることができるだろうと考えた。

リサーチ・クエスチョン

読んだ英文の内容を、意見や感想を述べながら、自分のことばで自信を持って口頭で要約できるようにするにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：・「話す力を伸ばすことができた」と思う生徒が全体の 7 割以上になる。

・スピーキングテストの評価ルーブリックのすべての項目で 3 段階中 B 以上をとる生徒が 7 割以上になる。

改善のための手だて

- 英文の内容を自分の力で図示して整理させれば、要点や構成が明確になり、要約に役立つだろう。
 - ・英文読解後に、絵とキーワードからなるグラフィックオーガナイザーを作らせ、内容をわかりやすく整理させる。
 - ・自作のグラフィックオーガナイザーを使って口頭で要約させる。
- 段階を踏んで、他者の前で話す練習をさせれば、英語を話すことに慣れ、自信を持って発表できるようになるだろう。
 - ・ペアワーク、グループワーク、クラス発表の順で練習させる。
 - ・発表を通して他者のよかった点、表現を見つけさせる。
- 読んだ英文についての感想、意見をたずねる質問を与えれば、自分の意見、考えを持ち、英語で表現することに慣れるだろう。
 - ・随時ワークシートを点検することで、積極的に取り組ませる。

・ペア，グループ活動等で感想や意見を発表する機会を設定する。

○スピーキングの評価ルーブリックを提示すれば，目標が明確になり，生徒はより意欲的に活動に取り組むことができるだろう。

・事前にスピーキングテストの評価ルーブリックを示し，日常の口頭練習の意義を理解させ，学習動機を高める。

<評価基準>

	Delivery	Content	Opinion
A	聞き手が十分に理解できる声量と英語で話し，理解を促す*工夫をしている	必要な内容をすべてカバーしている	自分の意見を，例，理由などを挙げながら述べている
B	聞き手が概ね理解できる声量と英語で話している	必要な内容を概ねカバーしている	自分の意見を述べている
C	聞き手が理解できる声量と英語で話していない	必要な内容をカバーしていない	自分の意見を述べていない

*工夫= (ジェスチャー，くり返し，強調，アイコンタクト，Visual aids の使用など)

生徒の変化 (途中経過，事後の検証結果など)

・スピーキングテストの結果 (12月:受験者数 39)

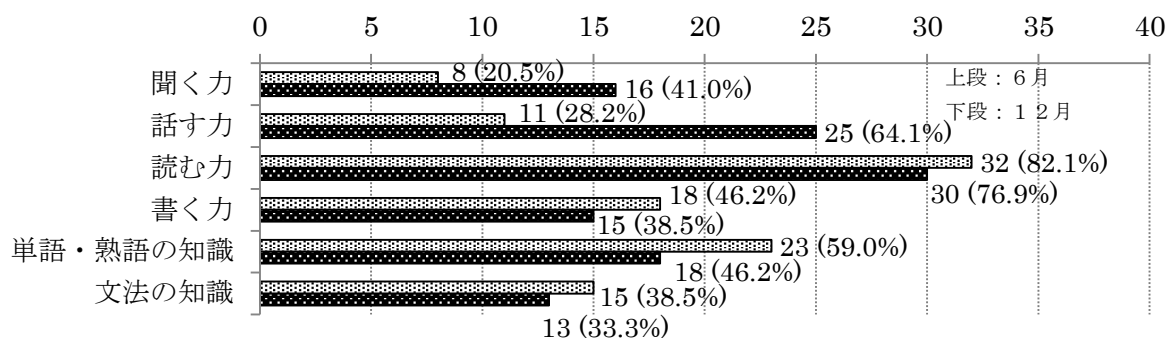
10月までは口頭での内容要約と自分の意見，考えを表現させる活動を別々に行ってきたが，それらを統合させて練習させ，12月にルーブリックをもとにスピーキングテストを実施した。

	Delivery	Content	Opinion
A	12人(30.8%)	19人(48.7%)	27人(69.2%)
B	20人(51.3%)	13人(33.3%)	5人(12.8%)
C	7人(17.9%)	7人(17.9%)	7人(17.9%)

Content では生徒自身が描いた絵 (グラフィックオーガナイザー) が，自分の英語で話すうえで大いに有効だったことがうかがえる。Opinion については，日頃の練習の成果か，難なく自分の考え，意見を述べる事ができる生徒が多かった。Delivery ではAよりもBの生徒が多く，聞き手を意識した発話の工夫について，今後さらに指導していきたいと思う。評価基準を示すことで，生徒自身が目標を立て，達成のため事前準備を十分し，練習を重ねたうえでテストに臨むようになった。各観点でBまたはAをとった生徒の合計がそれぞれ，改善の目標値である7割を超えることができた。

・事後アンケート調査 (12月:回答者数 39)

1. この授業でどのような知識や力がついたと思いますか。(3つまで選択可)



英語を話す力を選んだ生徒が6月の11人(28%)から，25人(64%)に増えた。改善の目標の7割には達しなかったが，話す力がついたと感じる生徒が2倍以上になったことは，大きな成果である。

<自由記述より> *絵を描くと、内容が理解しやすい/自分の理解が確認できる

*自分のことばで文を作る練習が役に立った

*内容を自分の力で整理しながら考えて話す力がついたと思う

*もとの英文を簡潔でわかりやすく言い換えることが力になった

英文内容を図示させたことが、話す力だけでなく、読む力の向上にも効果があったことがうかがえる。

2. スピーチの発表を今後もやりたいですか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
3人(7.6%)	8人(20.5%)	18人(46.1%)	10人(25.6%)

どちらかといえばやりたくない、もうやりたくないと答えた生徒が6月の56.4%から12月は72.7%に増えた。その理由としては、「入試勉強に集中したい」「読む・書くのほうが入試には重要」「人前で話すのが恥ずかしい」などがあつた。3学年への進級を控えた時期であり、入試に直接役立つか否かで英語学習の価値判断をしていることが推察される。今後、生徒の話す力を継続して伸ばしていくために、どのように動機づけをしていくかが課題である。

教師の変化

- ・研修で学んだ活動を授業に取り入れたことで、生徒の自己表現の機会を増やす方法にバリエーションをもたせられるようになった。
- ・生徒の学習意欲向上にルーブリックが有効であることを理解し、指導に活用できるようになった。
- ・ワークシートのなかに英文のテーマに関連した生徒の意見、感想をたずねる質問を組み込むなど、自分のことばで考え、表現させる活動のつくり方を身につけた。

今後の課題（次の改善点など）

- ・話す活動に時間を割いたため、書く活動を以前より削減した。そのせいか、「書く力が身についた」という生徒の割合が減ってしまったので、スピーキングや他のスキルと統合させながらライティングの力を伸ばしていきたい。
- ・生徒は話す力が身につけてきたと感じているが、今後は大学入試に向けた学習中心に取り組みたいと考えている。4技能を伸ばしながら入試にも対応できる授業のあり方を検討していきたい。

まとめ・感想

リプロダクションなどをやらせてもうまくいかず、生徒に積極的に話させる方法を模索していたときに、この研修に参加する機会をいただいた。アクション・リサーチをスタートさせ、生徒にアンケートを行うことで、生徒の率直な気持ちを受け止め、授業の課題を明確にすることができた。研修で得たアカデミアの先生方のアイデア、手法を実践していくなかで、生徒が楽しみながら生き生きと自己表現活動に取り組んでいる姿を見られるようになったときは、大きな手ごたえを感じられ心底うれしかった。研修中は、生徒の立場で楽しみながらも大きな刺激を受け、早く自分もこのような授業を実践したいと強く感じることの連続であった。今後新たな課題解決に向けてアクション・リサーチを継続し、指導力に磨きをかけていきたい。最後に本研修の参加機会を与えていただいたこと、アカデミアの先生方の温かいご指導、ご支援に感謝申し上げたい。

コミュニケーションへの積極性を育てる英語授業

科目名	コミュニケーション英語 I	学年	1	形態	HR・習熟度・小集団
-----	---------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は1学年2クラス46名（男子14名，女子32名）である。入試得点および定期考査の結果をもとに，習熟度別に編成された基礎レベルのクラスである。定期考査の結果を受け，途中でクラス替えが行われたため，入れ替えのあった生徒は調査対象から外している。英語学習については中学校段階からの理解が不十分なために苦手意識を持つ生徒が多いが，物事への好奇心は強く，興味のあるトピックについてはある程度積極的に取り組む姿勢を見せる。

解決すべき課題

英語または日本語で生徒とやり取りをしながら授業を進めようとしているが，特に英語では一部の生徒としかやり取りが成立しないため，すべての生徒が積極的に授業に参加しているとはいえず，結果として教師中心になりがちである。また生徒同士でのペア・グループワークも他者と話すことに抵抗感を強く感じる生徒が多いためか，活発な活動になりづらくなっている。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

事前調査として，対象生徒に対し，次の3つの調査を行った（6月：46名）。

- ① 英語学習に関するアンケート
- ② インタビューテスト（ALTと1対1の形式）
- ③ インタビューテスト後の自己評価

①のアンケート結果から，英語でのペア活動について「嫌い」「どちらかといえば嫌い」という生徒は40.0%と多く，授業内でのスピーキング活動にネガティブな印象を持っている生徒がかなりいることがわかった。

②のインタビューテストは，準備してきた内容と即興性のある内容について2～3分でやり取りするもので，(1) 正確さ，(2) 流暢さ，(3) 話し方・態度の3つを各5点満点でALTが評価した。それぞれの観点の平均値は，(1) 3.57，(2) 3.68，(3) 4.01と，「正確さ」が3つのなかでもっとも低かった。試験官のALTも，受け答えの際のコミュニケーションに支障をきたす文法エラーや頻繁な日本語使用に言及しており，やはり正確さに問題があると感じた。

③の自己評価では，英語を話すことに対し「とても抵抗がある」「少し抵抗がある」という生徒が40.9%いることがわかり，多くの生徒が英語を話すことを負担に感じていることが明らかになった。

リサーチ・クエスチョン

生徒が心理的な負担を感じることなく，ペアまたはグループである程度正確な英語を話せるようになるにはどのような指導をすればよいか。

- 改善の目安：・英語を話すことに対して「抵抗がない」と感じる生徒が全体の6割以上になる。
 ・ペア活動が「好き/どちらかといえば好き」と感じる生徒が全体の7割以上になる。
 ・インタビューテストの「正確さ」の評価平均が4.0以上になる。

改善のための手だて

- ペアまたはグループで英語を話す練習を断続的に与えれば、英語で会話することに慣れ、話すことへの抵抗感が低くなるだろう。
 - ・週に2回以上ペアまたはグループでのスピーキング活動を行う。
 - ・会話を促進させるため conversation frame を使用する。はじめは挨拶や反応が決められた型を使用して英語を話すことに慣れさせ、徐々に自由度の高いものへと移行する。
 - ・さまざまな組合せで活動ができるようにペアやグループの作り方を工夫し、生徒の心理的な不安を軽減させる。
- 活動前に特定の文法に関する指導をすれば、文法への注意が促され、より正確な英語で発話できるようになるだろう。
 - ・「主語+動詞」の形での発話を目標に、スピーキング活動以外の場面でも指導を徹底する。
 - ・ワークシートにチェック欄を設け、スピーキング活動後に自分の発話の振り返りをさせる。

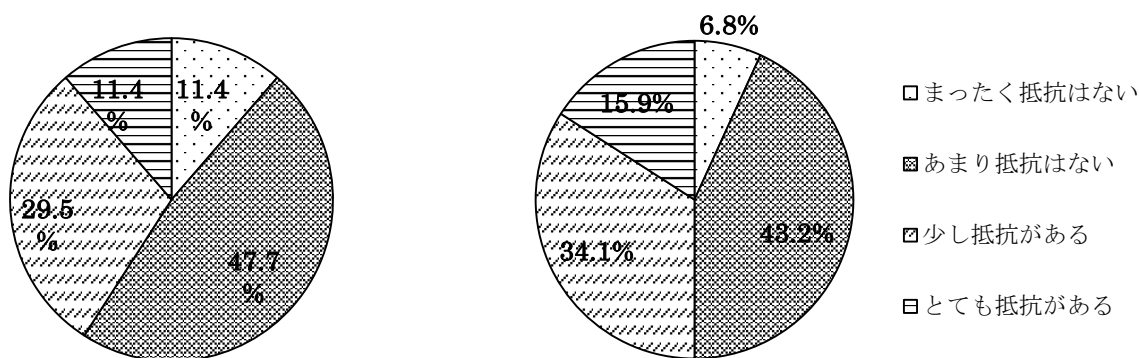
生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

① 英語を話すことへの抵抗感

6月および12月にそれぞれ英語を話すことへの抵抗感をたずねたところ、英語を話すことに「まったく抵抗はない」「あまり抵抗はない」と答える生徒は6月には59.1%であったが、12月には50.0%まで割合が下がった。しかし、ノンパラメトリック検定（Wilcoxonの符号付き順位検定）にかけてみると、有意差は認められなかった。

6月 (N=46)

12月 (N=46)



② ペアワーク・グループワークへの態度

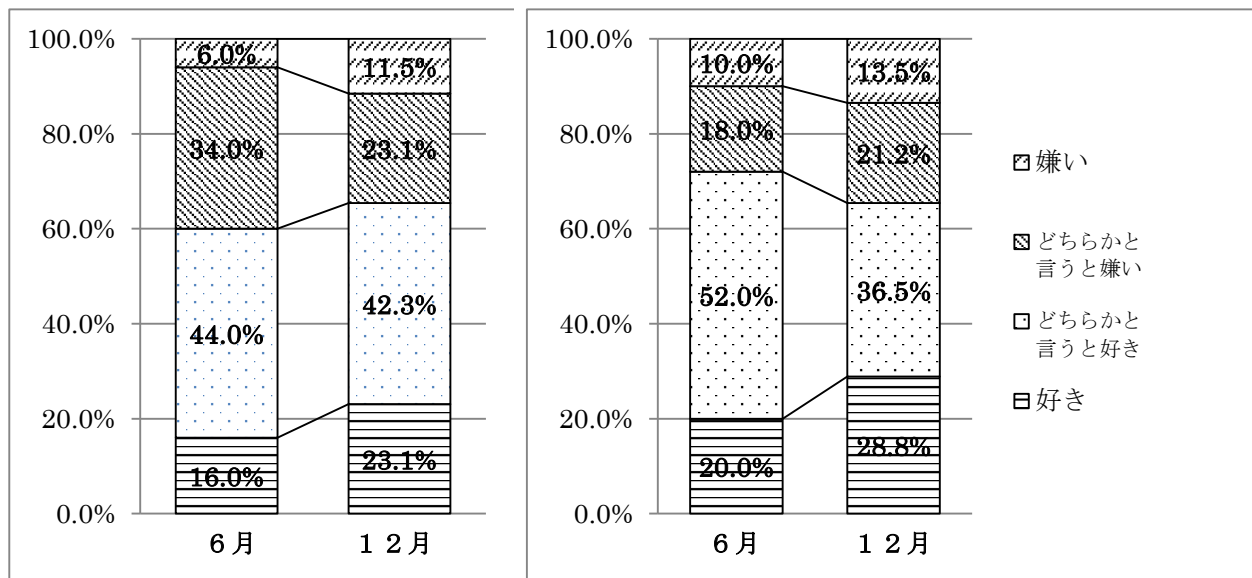
授業内でのスピーキング活動についてのアンケートでは、ペアワークを「好き」「どちらかといえば好き」と答える生徒の割合は60.0%から65.4%と増加した。一方で、グループワークについては「好き」「どちらかといえば好き」と答える生徒の割合は72.0%から65.3%と低下した。

この理由について書かせたアンケートの自由記述欄には次のような意見が多く見られた。

- ・好きなグループでできるならよい。
- ・1人ひとりのやる気がかみ合わない。
- ・あまり仲よくない人と話すのは苦手。
- ・活動が難しいから。

ペアワークについて (N=46)

グループワークについて (N=46)



つまり、生徒は英語を話すこと自体が苦手であるというよりも、グループ内での人間関係や活動の取り組みにくさからグループ活動に対してネガティブな意見を持っているということがわかった。これを逆に考えれば、教師がグループ活動を行う際にグループの組合せや活動内容の明確化、タスクの難易度の調整等を注意して行えば、生徒は今後スピーキング活動に負担を感じることなく取り組める可能性があるということになるだろう。

③ スピーキングテストの結果

インタビューテストでは正確さ、流暢さ、話し方・態度のどの観点についても pre-test よりも post-test の平均値の方が低い結果となった。それぞれの平均の差について t 検定を行ったところ、「流暢さ」については統計的な有意差が見られた。これにはさまざまな要因があるが、もっとも大きな要因はタスクの難易度と考えられる。Pre-test と post-test では異なるタスクを課しており、タスクの要求、使用する文法事項ともに post-test の方がより高度な英語力を必要としていたからである。インタビューをした ALT もこの点について、生徒のスピーキング力自体は pre-test 時よりも明らかに向上しており、コミュニケーションを取ろうとする態度もよくなっているが、タスクの難しさから誤りが増え、ポーズの時間も増えているように思えたと話している。

	Pre-test				Post-test			
	平均	最大値	最小値	標準偏差	平均	最大値	最小値	標準偏差
正確さ	3.57	4.5	2.0	0.47	3.42	4.5	2.0	0.64
流暢さ	3.68	4.0	2.0	0.45	3.46	4.5	2.0	0.55
話し方・態度	4.01	5.0	2.0	0.53	3.86	5.0	3.0	0.67

(N=46)

しかし、より深く分析するために結果を上位・中位・下位の3つのレベルに分けたところ、上位の平均値は pre-test と post-test で下降が見られるものの、中位と下位の平均値はほとんど変わらない、または多少の向上が見られた。このことから、今回の指導はすべてのレベルの生徒に効果的だったとはいえないが、下位および中位の生徒にはある程度効果があったかもしれない。

	上位生徒		中位生徒		下位生徒	
	Pre-test	Post-test	Pre-test	Post-test	Pre-test	Post-test
正確さ	4.03	3.69	3.50	3.35	2.91	△3.09
流暢さ	4.00	3.56	3.50	△3.59	2.88	△2.94
話し方・態度	4.68	4.09	4.00	3.98	3.30	3.30

△：向上が見られたもの

教師の変化

授業にペア・グループワークを取り入れることで、授業スタイルをこれまでの「教師中心のコントロールされた授業」から「生徒中心の授業」へと大きく変えることができたと思う。それと同時に、ただ一方的に知識を提示したり説明したりするのではなく、生徒の取組状況を観察しながら、生徒主体の活動を促しサポートするファシリテーターとしての技量が求められるようになった。具体的には、タスク遂行に必要な言語知識の計画的な指導、わかりやすい指示の与えかた、段階を踏んだタスクの実施など、これまでよりも丁寧で綿密な指導を心がけるようになった。また、アンケートや振り返りシートからだけでなく、これまでよりも生徒個人から各活動について意見や感想が多く寄せられるようになったことで、生徒一人ひとりの声により意識を向けるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

- ・生徒のスピーキング力は少しずつ向上している一方、生徒自身の自己評価が低く、話すことへの姿勢がネガティブになってしまいがちである。そのため、教師として生徒の自己肯定感を上げ、自信を持たせられるようなフィードバックを心がける必要がある。
- ・生徒が心理的負担をなるべく感じずにスピーキング活動に取り組めるようなペア・グループづくりの工夫、また適切な難易度のタスク設定をさらに追及しなければならない。
- ・今回の成果は、中位、下位レベルの生徒の若干の向上にとどまり、改善の目安を達成することはできなかった。今後は可能な限りさまざまな英語力レベルに応じた効果的な指導方法を模索していきたい。

まとめ・感想

今回の研修に参加し、あらためてこれまでの自身の授業を振り返り、その問題点を見つめ直すことができた。これまでの授業スタイルから脱却し少しでも改善に向かうことができただけでなく、授業と真剣に向き合うことの大切さや、そうすることによって得られる教師としての新たな役割、生徒との人間関係構築の大切さなどを実感することができた実りの多い1年間だった。今回学んだことをこれからの自分の指導につなげていけるよう、今度も自己研さんに取り組んでいきたい。

4 コマ漫画を用いたスピーキング指導

科目名	コミュニケーション英語 I	学年	1	形態	HR ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	---------------	----	---	----	----------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は7クラス，合計279名（男子112名，女子167名）である。ほとんどの生徒が4年制大学への進学を希望しており，難関大学の合格を目指している生徒も多い。そのため，英語に対する興味・関心が非常に高く，積極的に勉強に取り組んでいる。また，将来留学や英語を使う仕事をしてみたいと考えている生徒も多く，スピーキング力を高めることに強い意欲がある。

解決すべき課題

教科書英文のストーリーリテリングをくり返し練習してきた結果，既読英文のトピックに関しては，絵を見ながら話を伝えられるようになった。真のスピーキング力を高めるには，初めて与えられたトピックに関して，自分の使える英語を用いて説明できる力を身につけさせる必要がある。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・事前アンケート（6月：回答者数147）

ストーリーリテリングに対する生徒の手ごたえを知るため，教科書で学んだレッスンの内容を2分以内に英語で説明するという活動を行い，直後にアンケート調査を行った（表1）。

表1 ストーリーリテリングに関するアンケート調査

	あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
概要をまとめて話すのが難しかった	119 (81%)	22 (15%)	5 (3%)	1 (1%)
英語で話すのに適切な単語が思いつかなかった	72 (49%)	48 (33%)	23 (16%)	4 (3%)
英語で話すのに適切な英文が作れなかった	81 (55%)	48 (33%)	14 (10%)	4 (3%)
伝えるべき内容が思いつかなかった	13 (9%)	19 (13%)	80 (54%)	35 (24%)

生徒の多くが伝えるべき内容のイメージを持っているものの，英単語や英文法を用いてそれを伝えることができなかつたと感じていた。ここから，生徒は教科書の内容を理解しているが，英語との結びつきが弱く，自分の使える英語を用いて内容を説明できていないことが推察される。

・4コマ漫画を用いたスピーキングテスト（プレテストー10月：受験者数274）

自分の使える英語を用いて話の展開を明確に伝える力を測るため，4コマ漫画を用いたスピーキングテストを実施した。4コマ漫画は *The New Yorker* からセリフのないものを選んだ。

〈実施方法〉1対1のインタビュー形式

- 〈手順〉
1. 生徒は教師から渡された初見の4コマ漫画（全員同じもの）を30秒で読む。
 2. 漫画の内容を英語で説明する時間は90秒以内で，4コマすべてに言及する。
 3. 物語は過去の話とし，三人称の視点で話をする。

〈評価基準〉

内容	1 コマ単位の内容の伝達	
	A	S+Vの英文を使って、おおまかに絵の内容を伝えることができる。
	B	S+Vの英文を使って話すことができる。
	C	S+Vの英文を使って話すことができない。
流れ	4 コマを通じた順序・展開の明確さ	
	A	接続詞や時や順序を表す副詞(句)などを適切に複数用いて、話の順序・展開を明確に伝えることができる。
	B	接続詞や時や順序を表す副詞(句)などを適切に用いることができる。
	C	接続詞や時や順序を表す副詞(句)などを適切に用いることができない。

A=3点, B=2点, C=1点とし、「内容」は4コマそれぞれについて評価する(3点×4+3点=15点満点)。

〈結果と考察〉

全体の27%にあたる74人が満点評価で一番多く、以下低い点数ほど人数が減少しているが(図1)、全項目(274人×5項目)におけるABC評価の割合を見てみると、Aが61%を占める一方、Cも8%見られた(図2)。C評価の割合を減らし、A評価の割合をさらに高めることで、全体の点数を底上げしたいと考え、ポストテストで全員が14点(C評価は取らず、5項目のうち4項目以上でA評価を取ったときの点数)以上を取ることを目標に指導することにした。

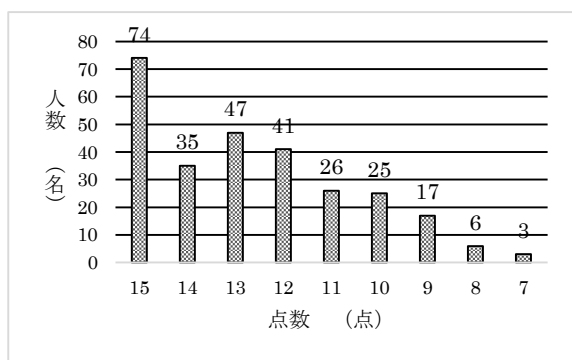


図1: プレテスト(10月)の合計点分布

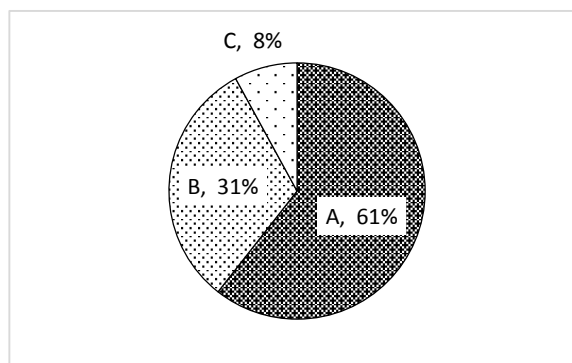


図2: プレテストの評価分布

リサーチ・クエスチョン

自分の使える英語を使って、相手に状況を簡潔に説明できる力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安: スピーキングテスト(ポストテスト)において全員が14点以上を取る(プレテスト:40%)。

改善のための手だて

- 口頭で状況描写をするタスクにくり返し取り組みませれば、流れが明確で、より正確かつ流暢な発話ができるようになるだろう。

〈4コマ漫画を用いたスピーキング指導(全5回)〉

授業の10分ほどを使って、4コマ漫画を簡潔に説明する練習をする。漫画は *The New Yorker* からセリフのないものを選び、毎回異なるものを使用する。テストで用いた漫画は使用しない。

1. (活動) 隣の生徒と二人一組となり、パートナーに漫画の内容を英語で伝える(準備:30秒, 発話:90秒)。パートナーは漫画を見ることができない。伝え終わった後は、どのくらい内容が伝わったのかを日本語で確認する。

2. (フィードバック) 指名された生徒は、どのような英語を使ったのかを発表する。教師は、生徒が使った単語や文法を取り上げ、より適切で汎用性の高い表現を教える。難しい単語や文法に頼らず、簡単な英語を使って内容を伝えるように指導する。
3. (記録) 生徒は活動を通して、うまく伝えられなかった表現や、今後役に立ちそうな表現を選び、記録用シート(「気づきシート」)に書き留める。

生徒の変化(途中経過、事後の検証結果など)

- ・4 コマ漫画を用いたスピーキングテスト(ポストテストー12月:受験者数274)

満点を取れた生徒は122人(45%)になり、プレテストの74人(27%)より増えた(図3)。14点以上取れた生徒は計196人(72%)で、改善の目安としていた100%には届かなかったが、ABC評価の割合を確認すると、Aの割合が82%(プレテスト61%)にまで増えたうえ、Cも1%(プレテスト8%)にまで減った(図4)。

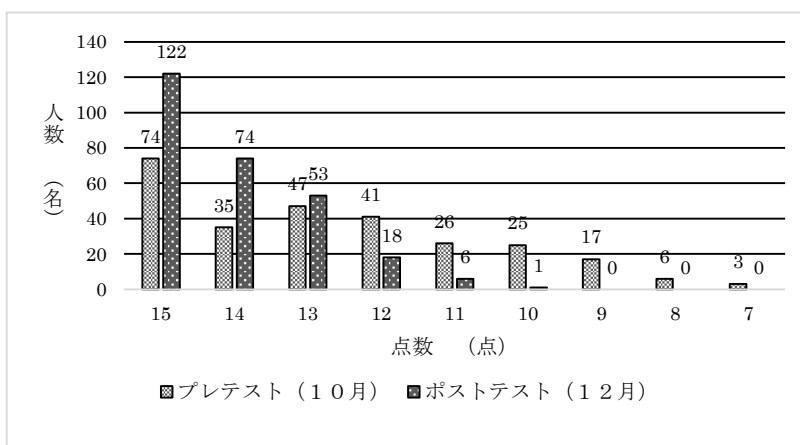


図3 プレテストとポストテストの合計点比較

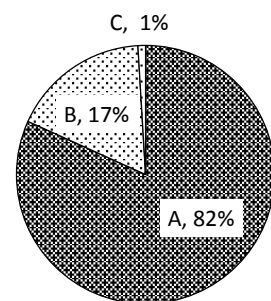


図4 ポストテストの評価分布

次に、個々の生徒の伸びを確認するためにt検定を行った結果、プレテストとポストテストの間には1%水準で有意な差が見られた。(表2)。

表2 プレテストとポストテスト間におけるt検定の結果

	最大	最小	平均	標準偏差	t値(df)
プレテスト	15	7	12.63	22.03	-11.02***(273)
ポストテスト	15	10	14.04	43.57	

*** p<0.01

- ・スピーキングテスト時の発話の質的变化(教師による観察)

《正確さについて》

動詞を適切に使える生徒が増えた。特に進行形でbe動詞が落ちる誤りが減った。(e.g. * An old man sitting on the bench. → An old man was sitting on the bench.) また、現在形と過去形が混在することが減り、時制を統一して話すようになった。途中で現在形を使って話しているのに気づき、即座に過去形に直す場面も多く見られた。

《流暢さについて》

ことばに詰まり、無言になる時間がほとんど見られなくなった。全体的に、話の流れを示す副詞句や接続詞の使用回数が増えた。

<考察>

スピーキングテストの点数や発話の質の向上から、この4コマ漫画を用いた活動には効果があったと
いってよいだろう。ペアワークをくり返すなかで、英語で適切に状況を伝えることに慣れ、フィードバック
を通して単語や文法の正しい「形式」を学び、記録することによって表現のレパートリーが増えたため、
テストにおいて正確さや流暢さが高まったと考える。

教師の変化

生徒の発話に対するフィードバック (corrective feedback) を工夫するようになった。最初は、指名され
た生徒が使用した不適切な単語や文法を黒板に書き出し、それらをどう直せばよいのかを解説してい
た。しかしその生徒からしてみれば、他の生徒の前で自分の誤りを直されるだけで、表現するよろこびは
感じにくい。そこで、まずよかった点をほめるように心がけ、同じ漫画でも生徒によって表現のしかたが
違うことに注目させるようにした。また、ただ模範となる答えを与えるのではなく、生徒が使った表現だ
とどのように伝わるのか、ほかにどのような表現があるのかなどについてペアで考えさせるようにした。
これらの工夫を通して、教室の雰囲気は以前よりずっと活性化した。

今後の課題（次の改善点など）

今回の授業改善では、4コマ漫画の難易度を同等にするために、プレテストとポストテストで同じ漫画
を用いた。そのため、ポストテスト実施時にプレテストの記憶が残っており、その結果成績が上がった可
能性もある。授業改善の効果を純粋に測るためには、難易度が同等であると判断できる2種類の資料を
事前に用意するなどの工夫が必要である。また今回は、説明のしやすさという観点で4コマ漫画を選んだ
が、漫画の説明に必要な表現が教科書で扱っている（扱ってきた）表現と一致するようなものを選べば、
学習により深みが出ると感じた。

まとめ・感想

本研修を受けるまで、「スピーキング力」ということばを包括的に考えていたが、研修を通して下位技
能(subskills)まで細かく分けて考えるようになった。例えば、教科書英文のリテリングなどによって語の
発音や文法項目など特定の言語形式の定着を目指すだけでなく、それを他の場面で使わせることで流暢
さの向上を図るなど、分析的かつ総合的にスピーキング力を高める必要があるということ再認識した。
4コマ漫画を用いたスピーキング活動は、生徒が学んできた単語や表現を実際に使用する絶好の機会で
ある。イメージをうまく伝えられたときや、知っている表現を必死に探しているときの生徒の表情には、
英語を使う楽しさやよろこびが表れていた。このような授業改善ができたのは、本研修における学びの賜
物である。アカデミアの先生方をはじめ、受講生の先生方、私がこの研修に参加することを支えてくださ
ったすべてのみなさまに感謝を申し上げたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

Ellis, R. (2009). Corrective feedback and teacher development. *L2 Journal*, 1, 3-18

Nation, I. S. P., & Newton, J. (2009). *Teaching EFL/ESL listening and speaking*. London: Routledge.

The New Yorker. "Daily Cartoon". <http://www.newyorker.com/cartoons>, (参照 2016-01-01)

「伝える」ことを意識したスピーキングの指導

科目名	コミュニケーション英語 I	学年	1	形態	HR・習熟度・ 小集団
-----	---------------	----	---	----	--------------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は1年生2クラス51名（男子26名，女子25名）である。HRクラス2つを出席番号で機械的に3つに分けた少人数クラスである。ほとんどの生徒が推薦入試での4年制大学，短期大学，専門学校への進学を考えており，課題や小テストへの取組等，授業に臨む姿勢はよい。

解決すべき課題

ほとんどの生徒が英語に対する苦手意識を持っているが，個々の生徒の能力には大きな差がある。全体での音読練習やペアでの会話練習では大きい声が出せていても，単独での音読やペアでの発表では声が小さく，さらには英語を正しく発音できていないことが多い。自信を持って大きい声で正しく発音し，相手に伝えられる能力を育む必要がある。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・事前アンケート調査①（6月）：英語・4技能の好き嫌い／得意不得意

英語が「（どちらかといえば）好き・得意」と答えた生徒は，全体の31%であった。また，英語の4技能のうち，スピーキングが「（どちらかといえば）好き・得意」と答えた生徒は，全体の8%であった。このことから，英語が好き・得意な生徒であっても，スピーキングが嫌い・苦手と感じている生徒が多いことがわかった。一方，「スピーキングを伸ばしたい」と答えた生徒が88%と，もっとも多いこともわかった。

- ・事前アンケート調査②（6月）：授業中のスピーキング活動に対する意識

授業中に英語を話すことに対して，「大きい声で話せる」と答えた生徒が42%，「恥ずかしくない」と答えた生徒が54%，「正しく発音できる」と答えた生徒が27%，「相手に正しく伝えられる」と答えた生徒が50%であった。このことから，英語を英語らしく話すことに対して自信がない生徒が多いことがわかった。

これまでの授業では，生徒による発表活動は各学期末等のタイミングでしか実施してこなかったため，話す力を試す機会を十分与えてこなかった。また，クラス全体・ペアで音読練習をさせてきたが，その際に発音やリズムに関する明示的な指導はしていなかった。さらに，ペアでの会話練習では相手に伝わったかどうかの確認はしてこなかったため，生徒は自分の英語がどれくらい理解可能なものになっているか確かめることができていなかった。

リサーチ・クエスチョン

より英語らしい発音で，聞き手の理解を意識しながら，自信を持って話せるようにするには，どのような指導をすればよいか。

- 改善の目安：・「自信を持って話す」（大きい声/恥ずかしさを感じない）「英語らしく話す」（正しい発音）「相手に伝わる」ことについて達成感を感じられる生徒が5割以上になる。
- ・スピーキングテストにおいて、「声の大きさ」「発音」「強弱」「区切り」を評価するルーブリックで、A～Cの3段階中Aの評価をとる生徒が5割以上になる。

改善のための手だて

- 段階的に他者の前で話す練習をさせれば、英語を話すことに慣れ、自信が身につくだろう。
 - ・グループ内スピーチを頻繁に行い、発表に対して場慣れさせる。
 - ・全体の前でのスピーチを随時行い、場慣れさせる。
- 発音やリズム（強弱）について明示的に指導すれば、場面に合った英語らしい話し方が身につくだろう。
 - ・各セクションのなかで特に読み方に注意させたい文を取り出し、明示的な音声指導をする。
 - ・ワークシート等を用いて、重要例文の読みをくり返し練習させる。
- 会話活動の後で相手の言ったことをレポートさせれば、お互いに相手が話している内容をよく聞くようになり、相手の理解度を意識して話せるようになるだろう。
 - ・ペアワーク等の会話活動で、相手と内容を正確に伝え合えるように意識づけを行う。
 - ・ペアワークでお互いに発表した後、別のペアやグループに相手のことについてレポートさせる。
- 事前にスピーキングテストの評価ルーブリックを提示すれば、目標が明確になり、生徒はより意欲的に活動に取り組むことができるだろう。
 - ・「声の大きさ」および、「正しい発音」を細分化した「語の発音」「強弱」「区切り」の各観点の評価基準を次のような3段階のルーブリックにまとめ、どのような発話が求められているのかをわかりやすく示す。

	声の大きさ	語の発音	強弱	区切り
A	教室中に聞こえる	すべての単語が正確	文中の重要語句を強く発音できる	チャンクで区切る
B	発表者のまわりにしか聞こえない	一部の語に誤り	文中に強弱がある	区切りがない
C	ほとんど聞こえない	読めない語がいくつかある	すべて同じ調子	不必要に止まる

- ・評価の後に、生徒一人ひとりに各項目の評価を伝え、アドバイスを与える。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・事後アンケート調査（12月）

グループ内スピーチ、取り出し音読、会話活動でのレポート活動等を続けた結果、英語が「(どちらかといえば)好き・得意」と答えた生徒が、6月時点の31%から45%に増えた。しかし、「スピーキングが(どちらかといえば)好き・得意」と答えた生徒が、6月の8%から12%へとわずかしか増えなかった。「スピーキング力が伸びた」と答えた生徒が73%いるものの、嫌い・苦手という意識は払拭し切れていないのが残念であった。

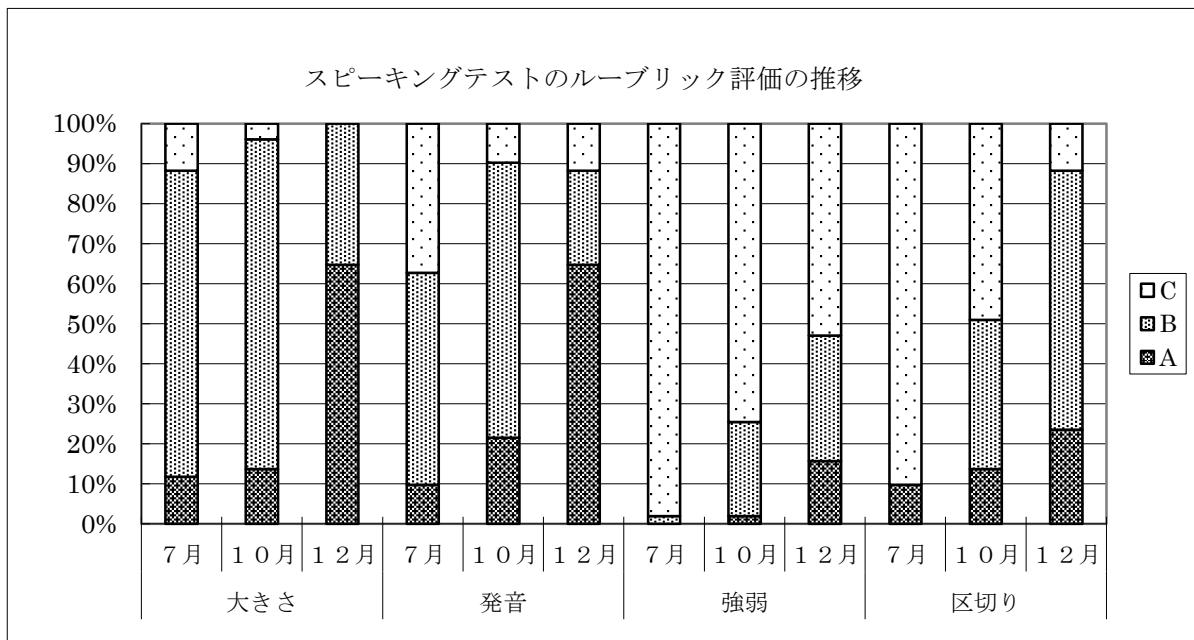
授業中に英語を話すことに対して、「大きい声で話せる」と答えた生徒が、6月の42%から67%へ、

「恥ずかしくない」と答えた生徒が、6月の54%から73%へ、「正しく発音できる」と答えた生徒が6月の27%から49%へ、「相手に正しく伝えられる」と答えた生徒が、6月の50%から59%へそれぞれ増加し、「自信を持って話すこと」「英語らしく話すこと」「相手に伝わること」に関する項目のうち、「英語らしく話すこと」（正しい発音）のみ、「半数以上の生徒が前向きな回答をする」という目標に達しなかったのが残念であった。

アンケート項目	人数	割合（51人中）
英語が（どちらかといえば）好き・得意	23	45%
スピーキングが（どちらかといえば）好き・得意	6	12%
スピーキング力が伸びた	37	73%
英語を大きい声で話せる	34	◎67%
英語を話すことが恥ずかしくない	37	◎73%
英語を正しく発音できる	25	△49%
英語で相手に正しく伝えられる	30	◎59%

・「声の大きさ」「発音」「強弱」「区切り」の評価の推移（7月～12月）

評価ルーブリックでA～Cの3段階中Aをとった生徒は、「声の大きさ」の項目では7月時点の12%から65%まで、「発音」の項目では10%から65%まで増え、目標である50%に達することができた。一方、「強弱」の項目では、7月時点の0%から16%まで、「区切り」の項目では10%から24%までしか増えず、目標まで達することができなかったが、評価Cをとった生徒がそれぞれ7月の時点では90%以上だったのが、12月では激減していることから、ほとんどの生徒が力を伸ばしたといえる。



<考察>

生徒の英語に対する意識、スピーキングテストの評価ともに、改善の目安に達した項目もあれば、達することができなかったものもあるが、目標値に至らなかった項目でも明らかな向上は見られるので、全体的に見て今回の授業改善の取組は成功したといえるだろう。夏休み前と後で、授業内容が大きく変わることに對して最初はとまどう生徒が多かったが、変更内容の意図や到達目標を示すことで、生徒は受け入

れたようであった。また、授業で使用するワークシートを活動内容に合わせて改善することで、生徒の取組状況に変化が見られた。しかしその一方で、もともと話すことがあまり好きでない生徒が、スピーキング活動の頻度が増えたことによって、かえって意欲をなくしてしまうことも見られたので、そのような生徒の個別の指導・支援がますます重要になってくる。

教師の変化

- ・この授業の独自のアンケートを行って生徒の意識を確認することで、生徒が何を考え、何を望んでいるのかを把握したうえで授業改善を行うことができた。
- ・ループリックを作成し到達目標を明確に示したことで、生徒にもう 1 つ上のレベルにスキルを向上させる意欲を持たせることができた。
- ・明示的な音声指導や会話活動でのレポート活動を取り入れたことで、今までなんとなく行ってきた音読練習やペアワークに具体的な目標を持たせて指導することができるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

- ・授業改善の取組は年度はじめから計画的に行い、毎年少しずつ改善していきたい。
- ・教師自身がより英語らしい発音を身につけ、生徒の模範となれるよう研さんしていきたい。
- ・学習内容の難易度が上がっても苦手な生徒が意欲を失わずにより前向きに取り組めるように、生徒状況を把握して、特に英語が苦手な生徒とコミュニケーションをとりながら授業改善を進めていきたい。

まとめ・感想

初任 1 年目、訳読中心の授業から脱却し、コミュニケーションな授業を目指して授業改善に取り組んだ。5 年目を迎える今年度まで 4 年間、訳読に要する時間を極力減らし、生徒が英語を話す時間を増やしてきた。今では 1 年目や講師の頃とは違うと思っていたが、訳読に変わる読解指導やそれに結びついた発信活動からなる授業のデザインのしかたがわからず、授業改善に壁を感じていた。音読や会話活動はさせてきたが、声を出させることに精一杯で、音声指導や聞き手を意識した話し方の指導まではしてこなかった。今回の取組で、生徒が考えていることや望んでいることを把握したうえで、教師の姿勢や具体的な到達目標を示せば、授業の進め方を変えたり、新しい活動をさせたりしても、生徒は快くついてきてくれることがわかった。また、教師自身の能力が向上しないと、生徒により質の高い指導ができないということを今まで以上に感じる 1 年であった。この研修をきっかけに、今後も自己研さんに努め、生徒の幅広いニーズに対して柔軟に対応できる英語教師になりたいと思う。

英語による「受け答え」のスキルを育てる指導

科目名	コミュニケーション英語 I	学年	1	形態	HR・習熟度・ 小集団
-----	---------------	----	---	----	--------------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象クラスは3クラス68名（男子33名・女子35名）で、それぞれのクラスで雰囲気が大きく異なる。積極的に発言をするクラスもあれば、消極的で反応が少ないクラスもある。生徒の多くはまだ進路について決めていないが、大学、専門学校、就職に大きく分かれる。進学希望者の9割以上は指定校などの推薦による受験のため、学力試験を受けずに進学することを目指している。

解決すべき課題

多くの生徒が中学校の入門期から英語学習につまずいており、苦手意識を持っている。英語での会話は、自己紹介で名前や住んでいる場所などを言うだけで終わってしまう。語彙力がないため、英文を音読しても途中で止まってしまう。書くことに関してはさらに壁が高く、語順や綴りを特に苦手とする。英語がつまらなく感じてしまう理由のほとんどが「やってもわからない」「難しい」である。しかし、「わかるようになりたい」と思っている生徒も少なくないことから、授業のなかで、英語を楽しんでいると感じながら活動し、少しでも自信と達成感を持ってほしいと考えた。

事前調査（アンケート，テストの結果，文献研究など）

- ・アンケート調査（7月実施：回答者数64）

英語学習に関する生徒の意識や希望を調査した。

1 英語について

	好き・得意	嫌い・苦手	どちらでもない
人数 (%)	21人 (33%)	36人 (56%)	7人 (11%)

半数以上が「苦手」「嫌い」と考える一方で、3割は英語学習を肯定的にとらえていることがわかった。これらの生徒たちをうまく活かしながら、否定的な意識を持っている生徒たちを巻き込んで、全体的に前向きな雰囲気を作ることが必要であると考えた。

2 英語でいちばん身につけたい（伸ばしたい）能力（複数回答可）

	リーディング	ライティング	リスニング	スピーキング
人数 (%)	18人 (28%)	17人 (27%)	8人 (13%)	29人 (45%)

4技能のなかでは、もっとも多くの生徒がスピーキングを身につけたいと思っていることがわかった。しかし自信がないため結果的に苦手と感じてしまっていると考えられる。

3 英語は将来、役に立つと思うか

	強く思う	やや思う	あまり思わない	まったく思わない
人数 (%)	28人 (44%)	30人 (47%)	6人 (9%)	0人 (0%)

驚くべきことに9割以上の生徒が英語は将来役立つと回答した。社会で英語は必要なものだと認

識していることがわかった。しかし、目標を掲げて英語の学習を続けている生徒は少なく、多くの生徒は将来使えるようにするための努力ができていないと感じられた。

4 英語の文法の学習は難しいと感じるか

	強く感じる	ある程度感じる	あまり感じない	まったく感じない
人数 (%)	29 人 (45%)	30 人 (47%)	4 人 (6%)	1 人 (2%)

5 英文法の説明を聞いて、練習問題をやりたいか

	毎回やりたい	ときどきやりたい	できればやりたくない	まったくやりたくない
人数 (%)	11 人 (17%)	30 人 (47%)	22 人 (34%)	1 人 (2%)

文法学習が難しいと感じるという生徒が 9 割以上いたことから、これが苦手意識の大きな要因になっている可能性があると思われた。文法の練習については 6 割以上の生徒が前向きな姿勢を示す一方、4 割近くは「やりたくない」としている。単純なドリル練習以外の活動で文法に注意を向けさせることが必要であると感じた。

6 事前に会話表現を学び、その表現を用いた会話練習をしたいか

	毎回やりたい	ときどきやりたい	できればやりたくない	まったくやりたくない
人数 (%)	6 人 (9%)	31 人 (48%)	24 人 (38%)	3 人 (5%)

半数以上の生徒が会話を練習したいと思っていることがわかった。ただ「毎回」と回答した生徒は 1 割に満たないため、毎回の会話練習は負担になる可能性があると考えられる。「スピーキング力を身につけたい」という生徒以上に会話練習を肯定的にとらえている生徒が多かったが、「やりたくない」とする生徒も 4 割以上いるため、より達成感を得られるような活動を考えなければならないと思った。

7 英語が楽しいと思ったのはどのようなときか（自由記述）

「わかった／できたとき」「外国の人と話せたとき・コミュニケーションが取れたとき」「グループワークをやっているとき」「英文が読めたとき」「テスト問題がすらすら解けたとき」「英文が書けたとき」がおもな回答だった。スピーキングに関する記述を含めて多くのことが挙げられていた。

リサーチ・クエスチョン

自分のことや身近な話題についての質問に、簡単な英語を使って答えられるようにするにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：「主語＋動詞」の文からなる簡単な英語を使って応答することができるようになったと感じる生徒が全体の 70%以上になる。

改善の手だて

- 質問に対する応答を準備して会話練習をさせれば、会話に慣れて、自信を持たせることができるだろう。
 - ・自分のことや実生活に関する身近な話題、または教科書の内容と関連したことを題材にする。
 - ・会話の枠組みを与え、練習の前に答えを記入させる。
 - ・できるだけ原稿を見ないで会話するよう指導する。
- 会話練習での応答について相互評価をさせれば、聞き手を意識することで、活動に対する意欲が高まるだろう。

- ・ペアワーク時に評価シートを配布し、相互評価をさせる。
- ・評価結果をもとに発話を改善させるために、ペアを変えて数回練習させる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・質問に対する応答の変化

9月には、ほとんどの生徒が自分の力で「主語＋動詞」の形で答えを準備できず、語句のみによる応答が多く見られた。そのため、活動のたびに、さまざまな疑問文に対する「主語＋動詞」の形での答え方を復習した。11月頃からは質問する内容の難易度を少し上げていったが、練習の成果か、質問の意味を理解するのが速くなってきたように感じた。12月には、質問により速く応答できる生徒も出始めた。

・生徒の取組状況の変化

生徒が実際に英語を使う活動をより多く授業に取り入れてから、ふだんは集中が長く続かない生徒たちも授業中に質問や発言をする姿が見られ、多くの生徒が授業に参加するようになった。なかには「今日やったことをまたやりたい」と言う生徒もいた。

・アンケート調査（12月実施：回答者数 59）

1 英語でいちばん身につけたい（伸ばしたい）能力は何か（複数回答可）

	リーディング	ライティング	リスニング	スピーキング
人数 (%)	20人 (34%) △6%	14人 (24%) ▼3%	21人 (36%) △23%	34人 (58%) △13%

スピーキングよりもリスニングに著しい増加が見られた。会話活動によって、相手の英語を聞き取る力の必要性をより感じるようになったのではないかと思われる。

2 英語が楽しいと感じたか

	はい	いいえ
人数 (%)	29人 (49%) ▼2%	30人 (51%) △2%

英語の授業が楽しいと感じた生徒は、わずかながら減少し、大幅な増加は見られなかった。会話活動を多く実施した結果、話すこと自体に消極的な生徒にとっては、それがやや負担になったのかもしれない。

3 事前に会話表現を学び、その表現を用いた会話練習をしたいか

	そう思う	やや思う	あまり思わない	まったく思わない
人数 (%)	7人 (12%) △3%	29人 (49%) △1%	19人 (32%) ▼6%	4人 (7%) △2%

生徒の会話練習への姿勢はあまり変わらなかった。どのような場面で役に立つかなど、活動の目的をより明確にして、生徒が練習の必要性を感じられるようにしていかなければならない。

4 答えられると感じる応答のパターン

	12月 (回答数 59)	7月 (回答数 64)	増減
主語＋動詞	12人 (20%)	17人 (27%)	▼7%
語句のみ	36人 (61%)	35人 (55%)	△6%
答えられない	11人 (19%)	12人 (19%)	—

5 答えるときに「主語＋動詞」を意識するようになった

	そう思う	やや思う	あまり思わない	まったく思わない
人数 (%)	3人 (5%)	16人 (27%)	33人 (56%)	7人 (12%)

「主語＋動詞」の形で答えられると感じた生徒は2割で、7月の事前調査よりも減少した。また、「主語＋動詞」を意識していると回答した生徒は3割程度にとどまった。決まった質問へのある程度整った形の応答を暗記させて会話させることが、「主語＋動詞」の構造の意識づけにはあまりつながらなかった。身近な話題をメインにした、より即興的な活動のなかで、「主語＋動詞」の形への意識を喚起したほうがよかったのかもしれない。

6 自由記述

「授業で楽しいと感じたのはどのようなときか」を自由に書かせたところ、記入した生徒の半数以上が「話しているとき」を挙げていた。「もっと話したい」など、話すことへの意欲を表す記述も多く、文法を苦手としながらも英語を話すことになお魅力を感じていることがわかった。

教師の変化

- ・生徒の活動を中心とした授業展開を考えるようになった。
- ・生徒の取組状況を観察し、活動の問題点を次の活動で修正するようになった。
- ・活動で扱う話題を生徒の身近なものにして、話しやすい環境をつくることを心がけた。
- ・説明が必要な文法項目を精選しながら授業の計画を立てるようになった。
- ・会話の枠組みを考えると、より自然な会話になるよう心がけた。
- ・制限時間を設定して活動させるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

- ・会話練習は続けながらも、単語の綴りなど、生徒が書いたものの正確さにも注意する必要がある。
- ・新出文法事項についてもできるだけ使わせながら定着させたい。
- ・徐々に枠組みを取って、自由な発話を増やしていきたい。
- ・読んだことについての感想や意見なども、考えて書かせたり話させたりする必要がある。
- ・4技能をバランスよく育成できるよう、時間配分を工夫する。
- ・会話活動時のヒントを与えるために、画像や板書をうまく活用する。

まとめ・感想

今回この研修に参加させていただいて、自分の授業を根本的に見直すことができた。今までの授業では日本語での説明が多く、説明して「教える」ことが「授業」だと思ってしまっていた。ときどき生徒を指名しながらも、文法解説を加えながら英文の日本語訳を確認して教科書を進めていくという、教師中心の授業をしていた。研修で学んでいくにつれ、指導法や活動を多く知ることができた。教師の話が長くなると、教師の自己満足で授業が終わってしまうこともある。それは「教えた」のではなく「押しつけた」に近いのではないかと考えるようになった。今まではスピーキング活動を授業に取り入れてこなかったが、今後も、生徒たちがコミュニケーションのなかで学習の必要性を実感し、学び合い助け合うことができるような、生徒中心の授業をしていきたいと強く感じるようになった。

話すことへの積極性と自信を高める指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は2クラス，合計80名（男子29名，女子51名）の生徒である。全体的におとなしく，活動にはしっかりと真面目に取り組むが，発言したりすることには積極的でない。特に英語を聞く・話す活動に対して消極的な生徒が多い。約5割が大学進学を希望している。

解決すべき課題

中学校から英語に対して苦手意識を抱えており，高校でもなかなか克服できずにいる生徒が多い。英語による簡単な質問を聞いて理解し，英語で答えるということには，ほとんどの生徒が消極的である。しかし，「将来的に英語を使えるようになりたい」と考えている生徒は多く，どのようにすれば，英語を英語のまま理解し，間違いを恐れずに少しでも自信を持って英語で発言できるようになるかが課題である。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・アンケート調査（9月：回答者数78）

①そう思う ②どちらかといえばそう思う ③どちらかといえばそう思わない ④そう思わない

*英語の授業は楽しいですか。

①33人（42.3%）②31人（39.7%）③12人（15.4%）④2人（2.6%）

*英語を話す力は必要だと思いますか？

①55人（70.5%）②20人（25.6%）③3人（3.8%）④0人（0.0%）

*ペアワーク，グループワークは好きですか。

①34人（43.6%）②29人（37.2%）③13人（16.7%）④2人（2.6%）

*英文を読む前に提示する画像や動画は，内容を理解するうえで役立っていますか。

①54人（69.2%）②21人（26.9%）③3人（3.8%）④0人（0.0%）

*英語での質問に対して，何とか英語で答えられると思いますか。

①0人（0.0%）②8人（10.3%）③41人（52.6%）④29人（37.2%）

*英語で何かを答えるときに誤りを恐れずに答えられますか。

①8人（10.3%）②17人（21.8%）③36人（46.2%）④16人（20.5%）

<考察>

ほとんどの生徒が授業の楽しさ、英語を話す力の必要性を感じているものの、授業中の英語での質問に英語で答えられないと感じており、誤りへの意識がその原因の一つであると推察された。ペア・グループの活動や ICT 教材については好意的にとらえているので、これらを効果的に活用しながら発話の自信を高めていくことを考えた。

リサーチ・クエスチョン

誤りを恐れずに、英語の質問に対して、口頭で自信を持って英語で答えられるようになるには、どのような指導をすればよいか。

- 改善の目安：
 - ・英語での質問に対して英語で答えることができると感じる生徒が 3 割を超える。
 - ・英語で答えるときに誤りを恐れずに答えられるという生徒が 5 割を超える。

改善のための手だて

- ICT を使った活動を取り入れれば、教科書本文の内容や教師の発話の理解が促され、関連する質問に対して英語で答えやすくなるだろう。
 - ・読解前のオーラルインタラクションや、読解後の内容確認の活動で、英文のトピックに関連する画像を用いて英語でやり取りする。
- グループ活動を活性化し発話を促す工夫をすれば、抵抗感なく積極的に話せるようになるだろう。
 - ・グループ内で発信した生徒の名前を付箋紙で貼っていく“Ganbatta-Ne Sheet”（がんばったねシート）を用いて発話の動機を促す。
 - ・生徒の応答は肯定的に受け止め、グループ内でもお互いの発話を尊重するよう指導し、発話しやすい環境を作る。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・アンケート調査（12月：回答者数 75）

事前のものと同様の項目で調査し、特に、4つの項目についてデータの比較を行った。

*事前・事後で回答者数が異なるため、割合（%）で比較している（△増加；▼減少）。

- ①そう思う ②どちらかといえばそう思う ③どちらかといえばそう思わない ④そう思わない
<ペア・グループワークは好きか> <画像は役に立っているか>

	事前 (%)	事後 (%)
①	43.6	60.0 △
②	37.2	29.3 ▼
③	16.7	8.0 ▼
④	2.6	2.7 △

	事前 (%)	事後 (%)
①	69.2	76.0 △
②	26.9	20.0 ▼
③	3.8	4.0 △
④	0.0	0.0 -

<質問に英語で答えられるか>

	事前 (%)	事後 (%)
①	0.0	0.0 -
②	10.3	17.3 △
③	52.6	57.3 △
④	37.2	25.3 ▼

<誤りを恐れず答えられるか>

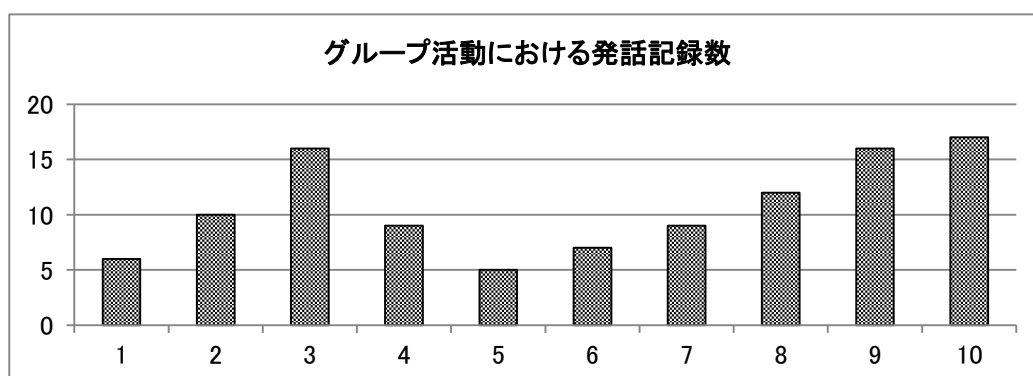
	事前 (%)	事後 (%)
①	10.3	10.7 △
②	21.8	30.7 △
③	46.2	40.0 ▼
④	20.5	18.7 ▼

「英語での質問に対して、何とか英語で答えることができる」という生徒は、目標の3割に届かなかったものの、10.3%から17.3%に増えた。グループでの発話やICTを活用したやり取りによって、英語で聞き、英語で何かを発言するという授業の雰囲気は少しずつ構築されたのではないかと考えている。

「英語で何かを答えるときに誤りを恐れずに答えられる」という生徒が約4割まで向上した。目標値には届かなかったが、手だての一つとして心がけた、協働的で発話しやすい学習環境づくりが影響したのではないかと考えている。どのような発言も、まず教師が受け入れ、また仲間が認めてくれるということが、生徒の英語を話すことへの抵抗感を軽減すると実感した。

ペア・グループ活動については、もともと80%以上の生徒の賛同を得ていたが、さらに約9%増えた。発話記録シートによるグループワークの活性化などにより、より多くの生徒が、貢献し助け合い学び合う学習スタイルに楽しさを感じてきたのかもしれない。ICTの効果については、変わらずほとんどの生徒が肯定的であった。

・ Ganbatta-Ne Sheet による発話数記録の推移—1グループ抽出（10月～12月：計10回）



横軸が授業数、縦軸が発言した回数である。最初の3回は、生徒にとって身近な話題を中心に質問をした結果、順調に発話回数が伸びた。しかし、4時間目以降は教科書内容を中心に質問をしたところ、発話回数は下がってしまった。そこで、教科書内容と身近な話題を織り交ぜながら活動を続けるようにしたことで、徐々に回数が増えてきた。また全体を通して、発言が多いときは授業の雰囲気もよかった。

教師の変化

ICT を活用することや、グループ活動を中心に授業を進めることで、これまでとは違った角度から授業改善に取り組むことができた。あらためてアンケートで生徒の思いを確認したり、反応を観察したりすることで、自分が進もうとしている授業改善の方向に少し自信を持つことができた。“You are on the right track.”というアカデミアの先生のことばが私を支えてくれた。教師は、Teacher ではなく Facilitator という視点から、これからも「生徒中心の授業づくり」をつねに意識して教材研究を進め、今後は「わかる授業」から「鍛える授業」への転換を図っていきたい。

今後の課題（次の改善点など）

今回の授業改善によって、英語が聞けるようになったという声も多く、より多くの生徒の英語での発話に対する自信を、ある程度高めることはできたが、割合としてはまだまだ少ない。文レベルで答えることに難しさを感じている生徒が多く、英語での質問に対して瞬時に文を作ることが困難な生徒がほとんどである。今後は、文の形で、より正確な応答ができるようにすることを目標に指導していきたい。

まとめ・感想

今年度で教壇に立つようになって 5 年になるが、その間でもっとも教材研究に時間をかけた 1 年間だった。これまでの私の授業は、生徒よりも、教師が活動する時間の方が長く、まさに“Teacher-Centered”になってしまっていた。今回の研修を通して、あらためて一から自分の授業を見直すことができ、つねに生徒の活動を中心とした授業展開を考えるようになった。「生徒が授業をつくる」という視点から教材研究をすることで、私自身今まで以上に授業を楽しく感じる事ができ、また今まで以上に生き生きと活動に取り組む生徒を見ることができるようになった。“A small change makes a big difference.”ということばが胸に響く。どう教えるかの“教授法”や教師の“英語力”も確かに重要であるが、それと同様に、授業を受ける“学習環境づくり”の重要性を考えさせられた。“Students-Centered”を肝に銘じ、これからも生徒たちと一緒によりよい学習環境づくりを心がけ、日々研さんを積んでいきたい。最後に、今回この研修に参加できたことで出会えたアカデミアの先生方や他校の先生方、そして私の授業改善に我慢強く協力し続けてくれた生徒たちに、心の底から感謝の気持ちを申し上げたい。

スピーキング・フレームを活用したスピーチ指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

【対 象】36名（男子18名，女子18名）

【雰囲気】良好な人間関係が構築されており，男女の仲もよい。音読活動や話し合いの活動にも積極的に取り組む。意欲はあるものの，基礎学力が低いため，できないことに直面すると意欲を失う生徒がいる。

【進 路】例年，学年の約70%がAO入試や推薦で進学している。

解決すべき課題

・身近な物事を英語で説明することができない。課題は以下の3つである。

課題1：【構成】どのような構成で話したらいいかわからない。

課題2：【文法】発話文に主語・動詞がないものが多い（文法の用法を理解していない）。

課題3：【強弱】話し方が一本調子で，抑揚がない。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・英語の学習に関するアンケート（5月実施）

4技能のうちスピーキング能力を高めたいと答えた生徒は82%であった。

・第1回スピーキングテスト（6月下旬～7月下旬実施）

（1）スピーキング課題 ※課題は事前には知らせず，即興で話させた。

留学生が2年2組にやってきました。この留学生に“Tell me about this school.”と
言われました。最大2分で，英語で学校紹介をしてください。おもしろい科目，学校
行事，クラブなど，自分がこの学校について気に入っている点をいくつか話すとよい
でしょう。1分間程度は話せるよう，がんばりましょう。まずは1分間，準備をして
ください。

(2) 評価方法

	構成	文法（主語＋動詞）	強弱
A (3点)	「導入＋詳細＋自分の考え」という構成で話すことができる。	ほぼ正確に「主語＋動詞」が使えている。	内容語・機能語に強弱をつけながら話すことができる。
B (2点)	「導入＋詳細」という構成で話すことができる。	内容伝達に支障のない正確さで「主語＋動詞」が使えている。	キーワードを強調しながら話すことができる。
C (1点)	発話に「導入＋詳細」の構成が確立していない。	「主語＋動詞」の内容伝達に支障がある。	発話に強弱がない。

(3) 結果

	構成	文法（主語＋動詞）	強弱
A	0 (0.0)	5 (13.9)	0 (0.0)
B	6 (16.7)	6 (16.7)	0 (0.0)
C	30 (83.3)	25 (69.4)	36 (100)

*人数(%)

リサーチ・クエスチョン

事物について、順序立てて、聞き手にわかりやすく口頭で紹介できるようにするには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：評価ルーブリックのそれぞれの項目で、B以上となる生徒が全体の6割を超える。

改善のための手だて

- スピーチのプランニング指導をしたうえで、練習をさせれば、適切な構成で発話できるようになるだろう。
 - ・「導入－詳細－感想」の枠組み（「雪だるまモデル」：図1）を使って準備させる。
 - ・さまざまなトピックを段階的に与え（描写，説明，問題解決），1分間スピーチをさせる（準備1分＋発話1分：計7回）。
 - ＜トピック＞「教室にあるもの」「家にあるもの」「起きてから今までの出来事」「夏休みの出来事」「週末の予定」「修学旅行」「神奈川のおすすめポイント」
- 「主語＋動詞」の構造を意識させて練習をくり返せば、聞き手の理解をさまたげない英語を話せるようになるだろう。
 - ・教科書英文の内容に関するQ&Aや1分間スピーチの際に、意味順シート（田地野，2011：図2）で文構造を確認させる。

- 文強勢を意識させた音読練習を行えば、聞き手にわかりやすく話すことができるようになるだろう。
 - ・まず、強く発音するキーワードをあらかじめ提示しておき、練習させる。
 - ・できるようになったら、強勢が置かれる語を自分で考えて練習させる。

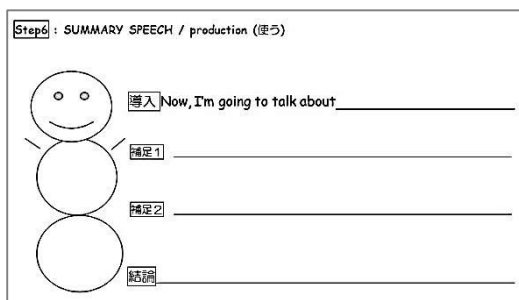


図1 雪だるまモデル

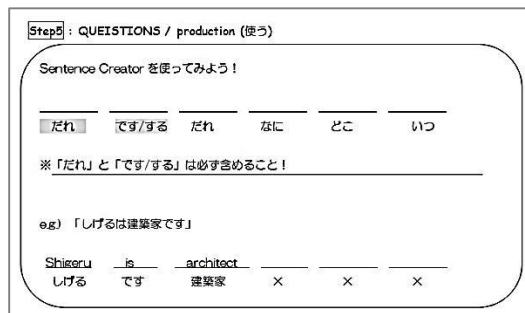


図2 意味順シート

* 1分間スピーチの評価ルーブリックを提示・説明し、活動の目的や到達目標を理解させる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第2回スピーキングテスト（12月下旬実施）
 - （1）スピーキング課題：第1回と同様の課題（即興）
 - （2）評価方法：ルーブリックを使用して評価
 - （3）結果

	構成		文法（主語＋動詞）		強弱	
	第1回	第2回	第1回	第2回	第1回	第2回
A	0 (0.0)	△ 7 (19.4)	5 (13.9)	△ 9 (25.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
B	6 (16.7)	△15 (41.7)	6 (16.7)	△11 (30.6)	0 (0.0)	0 (0.0)
C	30 (83.3)	▼14 (38.9)	25 (69.4)	▼16 (44.4)	36 (100)	36 (100)

* 人数(%)

- ・「構成」に関しては、B評価以上の割合が16.7%から61.1%まで増加した。
- ・「文法（主語＋動詞）」に関しては、B評価以上の割合が30.6%から55.6%まで増加した。
- ・「強弱」に関しては、第2回でも全員がC評価にとどまった。
- ・第1回、2回とも、まったく発話をしない生徒が4名いた。

<分析と考察>

「構成」については改善の目標値に達した。「始め方がわかった」「枠組みにしたがって話し続けなければと思った」という生徒の声からも「雪だるまシート」の効果がうかがえる。さらに、自分なりに工夫した導入も見られるようになった。「自分の感想」まで言える生徒は2割弱にとどまったが、さらに練習を重ねることで向上が期待できるだろう。

「主語＋動詞」に注意した発話についても、目標値にはわずかに届かなかったものの、向上が見られた。ライティングのテストにもその波及効果がうかがえたことから、「意味順シート」による意識づけは効果的であったといえるだろう。

一方、「強弱」については課題が残った。大きな原因として、内容・文法に注意を向けるのに精いっぱいであったことが考えられる。発話の前に「練習」の時間を設けるべきだったかもしれない。また、音読練習では、「キーワード」(＝内容的に重要な語)を自力で見つけることが困難であったことが推測される。内容理解と音読を結びつけながら統合的にスキルを伸ばしていく必要があるだろう。

教師の変化

これまで以上に、一人ひとりの生徒に対応することができるようになった。個人のデータを入念に分析したことで、生徒の到達度を覚えておくことができ、どのように対応すべきかを瞬時に判断することができた。同時に、生徒と英語の学習について話す機会も増え、個々の生徒に合った助言ができるようになった。自身の「授業準備・反省ノート」にも、改善前と比べて、生徒の個人名と対応についての記述が増えた。

今後の課題（次の改善点など）

発話することができなかった生徒4名はみな、テスト後のインタビューで「英語が嫌い、面倒くさい」と答えている。英語嫌いの生徒たちはみな「話せない」「できない」と感じており、今回のテストによって、「苦手」を再認識させてしまう結果となった。テスト以前に、英語の学習に取り組む意欲を育てる指導を再考する必要がある。また、生徒の発話からは既知の表現をつなぎ合わせなんとか言おうとしている様子が見られたが、その表現も初歩的なものが多く、生徒の産出語彙の少なさは否定できない。言いたいことはあっても使える語彙が少ないために言えることが限定された生徒もいたに違いない。自分の考えを表現できるだけの十分な語彙を増やすことも今後の課題である。

まとめ・感想

本研究では、順序立てて話せるよう、構成を指導することが成果につながった。特に、「雪だるまモデル」としてなじみやすくしたことが効果的であったと思われる。視覚教材の重要性を再認識するとともに、今後、難解な学習事項でも生徒が取り組んでみようと思えるような教材作成を心がけていきたい。

昨今の英語教育では、自己表現活動の重要性が高まっている。だが、本校のような基礎的・基本的な学習を重視する学校では、生徒の能力を過小評価するために、敬遠しがちであった。しかし、今回の授業改善で、教師の工夫次第で生徒はいかようにも伸びること、そして何より生徒は自己表現することが好きであることがわかった。これからも生徒の可能性を信じて、指導法や言語活動を工夫する姿勢を忘れないようにしたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

- 佐野 正之. (2000). 『アクション・リサーチのすすめ』 大修館書店
- 田地野 彰. (2011). 『意味順英語学習法』 ディスカヴァー・トゥエンティワン
- 教職高度化プログラム担当委員会. (2013). 『教職高度化プログラム研究成果報告書』 広島大学大学院教育学研究科
- Burns, A. (2010). *Doing Action Research in English Language Teaching: A Guide for Practitioners*. Routledge.

自信を高めるスピーキング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は2クラス，合計80名（男子25名，女子55名）の生徒である。比較的静かに授業を受けることができ，ペア音読やコーラスリーディングでは声が出ているが，質問に対して積極的に答える生徒は数名に限られている。また，他教科と比較して特に英語が苦手であるという生徒が多いようである。4年制大学への進学を希望する者が多く，2年生から文系，理系の選択をしているが，71名の生徒が文系選択をしている。

解決すべき課題

自分のことや身近な話題について，自分の意見や感想など自分自身のことばを使って自信を持って話せるようになってほしいが，教科書の内容にかかわる質問に英語で答えたりする活動しか与えていないため，生徒の自由な発話を促す時間が取れていない。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・「英語を話すこと」に関するアンケート調査（5月：回答者数80）

質問1 将来的に英語を話す力は必要だと思うか。

①不要 ②どちらかといえば不要 ③どちらかといえば必要 ④必要

質問2 英語を話すことに自信はあるか。

①ない ②どちらかといえばない ③どちらかといえばある ④ある

質問3 会話を続けるためのきまり文句がどれくらい身についているか。

①不十分 ②どちらかといえば不十分

③何とか意思を伝えるくらいには身についている ④まあまあ身についている

質問4 英語を話す機会はあるか。

①ほとんどない ②どちらかといえば十分でない ③ときどきある ④まあまあある

結果

	①	②	③	④
質問1	2(2.5)	13(16.3)	26(32.5)	39(48.8)
質問2	33(41.3)	40(50.0)	7(8.8)	0(0.0)
質問3	20(25.0)	36(45.0)	18(22.5)	6(7.5)
質問4	36(45.0)	27(33.8)	13(16.3)	4(5.0)

*人数 (%)

全体的な傾向として、英語を話す力が将来必要になると思っているが、話すことに自信を持っていないということがわかった。また、身につけているスピーキングのストラテジーや会話機会の不足を多くの生徒が自覚していることが明らかになった。

リサーチ・クエスチョン

自分の考えを、論理的に自信を持って話せるようにするにはどのような指導をすればよいか。
改善の目安：「自信を持って英語で話せる」という生徒が全体の 70%を超える。

改善のための手だて

- ペアワークで英語を話す機会を与えれば、英語を話すことに抵抗がなくなり、自信を持って話すことができるようになるだろう。
 - ・ 毎回の授業で自分の考えを述べるペアワークを実施する。
 - ・ 毎回異なる相手とペアを組ませ、積極的にコミュニケーションを図らせる。
 - ・ 初回と最終回にループリックを用いた相互評価、自己評価を実施する。
- 英文の内容について意見・感想を述べながら要約する機会を与えれば、自分の英語を使って論理的に表現することができるだろう。
 - ・ 教科書の各レッスンの各パートを読み終えた後、その内容を 5 文程度で要約させる。
 - ・ 英文の基本的な構造を正しく活用できるよう、例を示し、自分の英語を見直させる。
- 発音、アクセント、イントネーションに注意させながら音読する機会を与えれば、流暢さが高まり、英語を話すことに自信を持つようになるだろう。
 - ・ ひと通り教科書本文を音読させた後で、発音、アクセント、イントネーションで特に注意すべき文を選び、確認しながら練習させる。
 - ・ 音読する際には、内容を聞き手に伝えることを意識させる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・活動への取組状況

ペアワークでの活動を「コミュニケーションタイム」と名づけ、毎回の授業の始めに実施した。多くの生徒はこの活動に積極的に参加しており、英語で自分の考えを伝えることの難しさも感じていたが、相手に言いたいことが伝わったり、相手の言いたいことが理解できたりすることで、英語を介して情報を共有するよろこびを体験していたと思う。

英文の要約をする活動では、誤りを避けたいせいか、教科書の英文から必要な部分を抜き書きする生徒が多かった。言い換えの表現等も指導していたが、自分の英語で表現することができるまでにはいたらなかった。

音読については、注意すべき点を明確にしたあとで、個人、ペア、グループ等のいろいろな形態で活動したこともあり、生徒は飽きずに取り組むことができた。また、その都度発音上の疑問を解消しようと積極的に質問する姿勢も見られた。

・会話活動のルーブリック評価

「コミュニケーションタイム」の活動において、初回と最終回に次のようなルーブリックを用いた相互評価と自己評価を実施し、結果を比較した（評価対象：各 77 名）。

	声の大きさ・明瞭さ	英語らしい発音	情報量・わかりやすさ	自信（自己評価のみ）
A	大きな声ではっきりと話している。	英語らしい発音、アクセント、イントネーションで話している。	情報の量が十分であり、わかりやすくなるように工夫している。	自信を持って英語で話すことができた。
B	十分に聞き取れる声で話している。	英語らしい発音を意識して話している。	情報の量が十分である。	まあまあ自信を持って話せた。
C	声が小さい、不明瞭であるなど、聞き取れない部分がある。	英語らしい発音になっていない。	情報が不足していて内容が伝わらないところがある。	自信を持って話せなかった。

結果 上段：相互評価，下段：自己評価 *人数(%)

	声の大きさ・明瞭さ	英語らしい発音	情報量・わかりやすさ	自信（自己評価のみ）
A	55(71.4) → 60(77.9)	27(35.1) → 48(62.3)	33(42.9) → 46(59.7)	13(16.9) → 15(19.5)
	32(41.6) → 30(39.0)	9(11.7) → 8(10.4)	7(9.1) → 9(11.7)	
B	18(23.4) → 17(22.1)	44(57.1) → 27(35.1)	36(46.8) → 29(37.7)	44(57.1) → 48(62.3)
	37(48.1) → 44(57.1)	41(53.2) → 42(54.5)	42(54.5) → 41(53.2)	
C	4(5.2) → 0(0.0)	6(7.8) → 2(2.6)	8(10.4) → 2(2.6)	20(26.0) → 14(18.2)
	8(10.4) → 3(3.9)	27(35.1) → 27(35.1)	28(36.4) → 27(35.1)	

・「英語を話すこと」に関するアンケート調査（11月：回答者数 80）

質問2 英語を話すことに自信はあるか。

①ない ②どちらかといえばない ③どちらかといえばある ④ある

	①	②	③	④
質問2	31(38.8)	30(37.5)	19(23.8)	0(0.0)

*人数 (%)

ルーブリック評価では、客観的な評価ができるよう、事前に例を示していたものの、全体的に見て、相互評価は相手に対して甘く、自己評価は自分に対して厳しいという傾向が見られたが、「英語らしい発音」の自己評価が変わらなかったことを除いて、3つの観点の相互評価・自己評価でC評価の人数が減少した。また、「自信」についても向上が認められ、A、B合わせて81.8%の生徒が自信を持って話せたと自己評価している（初回は74.0%）。このことから、クラス内の友人と行う、「コミュニケーションタイム」のような特定の活動ではやり方もわかっており、英語を話すことに抵抗はなくなっていることがわかる。しかし、アンケートでは英語を話すことに自信があると答えた生徒は23.8%である。自分の実力としての自己評価が十分に高まっていないことを示している。

また、ルーブリック評価と同時にそのときに自分が話したことを書かせて、基本的な文構造を正しく

活用できているかを調査したが、事前、事後においてほとんど変化は見られなかった。

以上のことから、英語を話す機会を与え、発音等に注意を向けさせる指導にはある程度の効果が現れたが、改善の目安とした「自信を持って英語で話せるという生徒が全体の 70%を超える」という目標は達成できなかった。英文の要約の活動において誤りのない英文を書けるようにすること、音読の活動において流暢さを高めることに対する手だてが十分ではなかったことが原因として考えられる。特定のものだけでなく、さまざまな活動のなかで、文法的にも音声的にもある程度の正確さを持った発話ができるという達成感を持たせることができているならば、いろいろな場面で英語を話す際の自信にもつながっていたであろう。

教師の変化

目標をより具体化することで、それぞれの生徒がどの段階まで達しているか、何を必要としているのかを把握する意識が高まり、効果が期待できる活動をより適切な場面で導入できるよう、授業の構成を工夫するようになった。また、生徒が興味を持ってさまざまな活動に取り組み、それぞれで達成感を味わえることを念頭に置いて教材研究をするようになった。生徒一人ひとりの表情やクラス全体の雰囲気を観察し、生徒が積極的に取り組み、効果を上げられるような改善策を考えながら授業を振り返るようになった。そして、自分自身の発話のなかに生徒が自己表現で使えるような表現を自在に盛りこんだりすることができるよう、英語運用能力向上のための努力をいっそうするようになった。

今後の課題（次の改善点など）

毎回のペアワークでの自己表現活動については、クラス全体の取組状況は観察していたものの、事前にペアリングを決めていた利点を生かして、個別にフィードバックをすることが十分にできなかった。そのことが、「自信を持って英語を話せる」生徒が増えなかった要因の一つであると考えられる。今後は対象とする生徒数が多くても、評価方法等に工夫を凝らし、一人ひとりの生徒の課題やその達成の度合いをよりきめ細かに把握し、より効果的なフィードバックを与えることで、その後の学習意欲や関心を高められるような取組をしていきたい。

まとめ・感想

本研修を受講するまでも、自分の授業の課題を取り上げ、それを改善するための具体的な方策を考え、実行してきたつもりであったが、目標をより明確にすることで、その目標を達成するための道筋も具体的になるということを実際に体験できたのは貴重なことであった。今後も、課題を発見し、明確な目標を生徒や同僚と共有しながら、目標を達成するための努力を継続していきたい。本研修を通して、講師の方々や、他の受講者から大変実用的で参考になる多くの情報をいただけたことに感謝したい。

生徒の活気を取り戻す「話す力」重視の授業

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は2年生3クラス108名（男子43名、女子65名）である。学校全体の生徒の進路状況は大学進学3割、専門学校4割、就職3割である。

解決すべき課題

- ・勉強全般に自信がなく、授業への取組もあまり積極的とはいえない。ただし生徒の興味を引き出すような活動を行えば、高い集中力を授業に取り組める。
- ・一つひとつの活動が体系的につながっておらず、断片的になってしまう。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回アンケート（5月実施：回答数 87）

英語への苦手意識が非常に高い生徒が多いため、「授業参加をどのように促すか」に関する情報収集を目的として、授業活動に対する生徒の興味についてアンケート調査を行った。

質問：4技能のうち、どの力を伸ばしたいですか？（複数回答可）

聞く	読む	話す	書く
31人(36%)	10人(11%)	40人(46%)	16人(18%)

- ・第2回アンケート（6月実施：回答数 87）

生徒が「話す力」を伸ばすことに興味を示した点に注目し、さらに調査を行った。

1. あなたは英語の歌や英語の映画など、英語の文化は好きですか。

とても好き	好き	嫌い	とても嫌い	無回答
29人(33%)	49人(56%)	4人(5%)	4人(5%)	1人(1%)

2. あなたは英語の授業は好きですか

とても好き	好き	嫌い	とても嫌い	無回答
8人(9%)	37人(43%)	31人(36%)	11人(13%)	0人(0%)

3. あなたは英語を話すことに興味がありますか

とてもある	ある	ない	むしろ嫌だ	無回答
15人(17%)	40人(46%)	28人(32%)	3人(3%)	1人(1%)

4. あなたは将来、英語を話せるようになりたいと思いますか

とても思う	思う	思わない	むしろ なりたくない	無回答
28人(32%)	37人(43%)	18人(21%)	3人(3%)	1人(1%)

5. あなたは自信を持って英語を話せますか

話せる	どちらかといえは話せる	どちらかといえは話せない	まったく話せない	無回答
4人(5%)	10人(11%)	28人(32%)	43人(49%)	2人(2%)

6. あなたは英語を話せるようになるには何が必要だと思いますか（複数回答可）

発音がよいこと	自信を持つこと	声の大きさ	自分の意見を持つこと
30人(34%)	32人(37%)	8人(9%)	14人(16%)
なめらかさ	聞く力	英語の発想	コミュニケーション力（相互の関わり）
19人(22%)	36人(41%)	35人(40%)	48人(55%)

授業中の取組や態度からは消極的な印象を受けるのに対し、多くの生徒は、英語そのものには興味があり将来話せるようになりたいと考えていることが推察される。つまり授業での活動を充実させれば、積極的に活動に参加する潜在的意欲は十分にあるといえる。加えて生徒は「英語が話せない」と思う理由について自らを客観的に分析することができている。

ふだんの授業の雰囲気や今回の結果を総合的に考えて、生徒には3つの「不足」があると考えられる。

< 3つの不足 >

- ① コミュニケーション力の不足：英語以前の問題としてお互いに対話をすることが苦手である。
- ② 語彙の不足：言いたい表現が思いつかないため、声が出ない。
- ③ 自信不足：英語に対して自信がなく、すべての活動において消極的になりがちである。

リサーチ・クエスチョン

聞き手の理解を意識しながら、自信を持って英語で話せるようにするには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：「以前より自分の英語で伝えることができるようになった」と感じる生徒がクラスの7割以上になる。

改善のための手だて

- 授業で毎回英語での会話をさせれば、コミュニケーション力・語彙力・自信が強化できるだろう。
 - ・ 毎時間授業の冒頭で、隣の席の生徒と自分自身のことについてのお互いに質問をし合い、答え合う練習をさせる。
 - ・ 会話練習の後、2～3組がその会話をクラス全体に発表し、教師がフィードバックを与える。

< 活動の手順 >

- ① 簡単な英文の暗唱テストを大きな声でクラス全体に発表する（自信の増強）。
- ② 「自分の好きなもの」をテーマに沿って英文を作り、クラス全体に発表する。英文作成については空所補充の形式をとり、生徒はスピーチの基礎を覚える（語彙力の強化・自信の増強）。
- ③ 発表を聞く生徒はその内容のメモをとる（聞き取りの強化）。
- ④ 「自分の夢」をテーマにほぼ自力で英文を作り、隣の席の生徒に発表する。隣の席の生徒はその発表をメモしながら聞き取り、クラス全体に他己紹介という形で発表する（コミュニケーション力の強化）。発表を聞く生徒はその内容のメモをとる（聞き取りの強化）。

○ 「伝える」英語を主眼においたスピーキングテストを行えば、生徒は「話すこと」への自信がつくだろう。

- ・評価の観点は回を追うごとに細分化し、初歩の段階では意欲を中心に見取る。

<評価の観点>

①	声の大きさ 50%		その他（なめらかさ、抑揚など）50%		
②	声の大きさ 40%		なめらかさ 40%		抑揚・伝える工夫 20%
③	声の大きさ 20%	意味の区切り 20%	明瞭な発音 20%	抑揚 20%	伝える工夫 20%

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

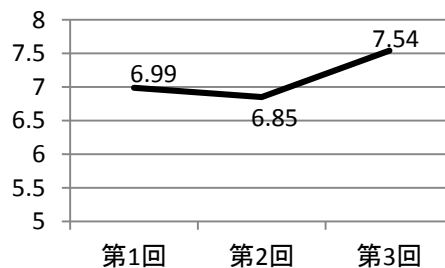
・取組状況

- *開始当時はスピーキング活動にとまどい、なかなか声が出ない生徒が多かったが、回が進むにつれ、全員が活動に参加するようになった。
- *会話練習を行ったことで、発言する姿勢のみならず聞き取る姿勢が改善された。
- *生徒のなかには、休み時間などにも英語で友人と会話するようになった者もいた。
アウトプットのためには、単語や文法などの知識が必要だと生徒に感じさせることで、授業内のインプットの場面でも質問を活発に行うなど、真剣に取り組む姿が見られるようになった。

・スピーキングテストの結果

第1回（暗唱テスト）は生徒にとって取り組みやすい課題で、観点も「声の大きさ・その他」の2観点であったが、第2回（英語による発表）ではタスクが複雑化し、観点も細密化したことから平均点が下降した。しかし第2回とほぼ同形式で行った第3回では平均点が向上し、生徒が英語を話すことに慣れ、話す力の向上傾向が推察される。

<全3回のスピーキングテストの平均点> 10点満点に換算



・第3回アンケート（12月実施：回答数 86）

「話す力」の育成を重視した授業に対する生徒の評価について調査した。

1. 英語の授業（特にスピーキング活動）は楽しかったですか

とても楽しかった	楽しかった	つまらなかった	とても嫌だった	無回答
9人(10%)	54人(63%)	8人(9%)	12人(14%)	3人(3%)

2. あなたは英語の授業は好きになりましたか

とても好きになった	まあまあ好きになった	嫌いになった	とても嫌いになった	無回答
10人(12%)	69人(80%)	5人(6%)	2人(2%)	0人(0%)

3. 以前より自分の英語で伝えることができるようになったと感じますか。【改善の目安：70%以上】

できた	まあまあできた	それほどできなかった	まったくできなかった	無回答
20人(23%)	52人(60%)	10人(12%)	0人(0%)	4人(5%)

4. あなたは英語の授業を通じてどんなことができるようになりましたか

	Yes	No	無回答
① 使える単語や表現が増えた	59人(69%)	13人(15%)	14人(16%)
② 会話やコミュニケーションができるようになった	43人(50%)	27人(31%)	16人(19%)
③ 英語に自信がいった	35人(41%)	35人(41%)	16人(19%)

(自由記述：生徒の感想)

少しだけ話せるようになった／嫌いだからがんばろうと思う／発表は緊張したけど聞くのが楽しかった／楽しかったが、緊張するし、聞き取れない人もいて大変／覚えてできればうれしいが、覚えるまでが大変で楽しくない／本当に英語が嫌いだから、何をやっているのかわからない

<考察>

「自分の英語で伝えることができるようになった」と感じた生徒が7割を超え、改善の目標に達した。スピーキング活動は生徒が能動的にならなくては成り立たないという性質から、生徒の参加意識が向上し、その過程で「できる」感覚が身につく、授業の高い満足感につながったと考える。しかし、「英語の授業(特にスピーキング活動)は楽しかったですか」の質問に対し、「つまらなかった・とても嫌だった」と答えた生徒もあり、生徒の感想から、英文の暗記がその原因の一つであることがわかった。英語に対する自信については生徒の意見は割れた。しかし、「話す力」の育成を重視した授業により生徒の授業に対する積極性は確実に向上してきており、今後さらなる生徒の成長に期待が持てると思われる。

教師の変化

- ・明確な到達目標を設定できるようになり、それに向けての指導計画ができるようになった。
- ・個々に対する指導が増えたことで、生徒が抱えている小さなつまづきにも気づくことができた。
- ・スピーキング活動の回を追うごとに意欲的になっていく生徒を見ることで、教師側も指導の成果に対するよろこびを感じ、それが授業のよい雰囲気につながるという好循環が生まれた。
- ・同僚との情報共有が活発に行われ、互いの指導の差異に気づくことによって、よりよい方法を採択でき、英語科全体の授業力向上につながった。
- ・生徒に英語を聞き取る積極的姿勢ができてきたので、教師が授業中英語を使用する機会が増えた。

今後の課題(次の改善点など)

スピーキング活動を楽しんだ生徒が多数いた半面、少数ではあるが、それを嫌だと思っている生徒もいる。彼らにも満足できるようなスピーキング活動を工夫するとともに、それだけにとどまらないさまざまな活動の工夫をすることで、生徒の英語に対する興味を維持・発展させていきたい。

まとめ・感想

研修参加者の高い motivation や、さまざまな興味深い講義に触れた。授業のなかで直面した困難を憂える前に、それをどう改善したらよいかを考えることの大切さを再確認した。同時に、具体的な手だてを学び、考え、それを実践するよい機会に恵まれたと思っている。

初見の英文を用いた主体的リーディング活動

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は2学年3クラス118名（男子39人、女子39人）である。落ち着いて学習活動に取り組み、ノートをきれいに作ることができる生徒が多い。将来、学びたいと思うものや、つきたい職業について明確な目標のある生徒は少ないが、ほぼ全員が大学や短大、専門学校への進学を希望している。

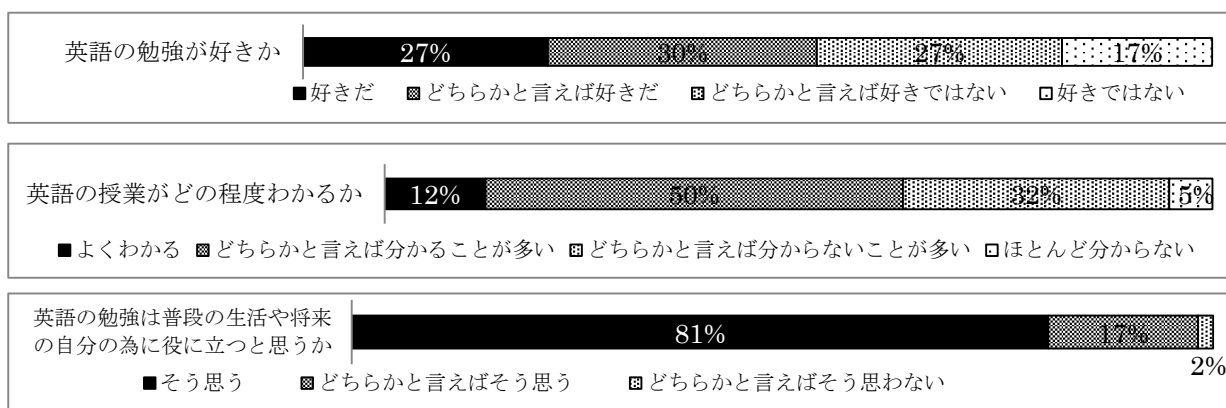
解決すべき課題

授業には真面目に取り組み、課題提出もしっかりできるが、なんとなくわかっているつもりで授業を受け、日本語訳に頼って英文を読み、英語を理解した気になりがちである。多くの生徒が、教科書の英語はわかるが初見の英文の大意を把握することは難しく、内容を正確かつ詳細に理解することが困難だと感じている。生徒の英語への苦手意識を軽減し、語彙や文法などの英語の基礎を定着させながら達成感をもたせるような授業を工夫する必要がある。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- 平成27年度神奈川県立高等学校等学習状況調査（6月）

2学年計346名を対象に実施された調査のうち該当クラスのデータ（回答者113名）を使用し、英語学習に対する生徒の態度を調べた。



- 第1回授業改善アンケート（7月）

学習状況調査の結果を踏まえてアンケートを作成し、生徒の英文の読み方について調査した。

英文読解に関する質問	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
英語を読んで理解する力を授業で身につけたい	73.7%	19.3%	3.5%	2.6%
内容をイメージしながら読んでいる	34.2%	50.9%	11.4%	3.5%
頭のなかで文字を音声化している	40.4%	34.2%	19.3%	6.1%
文構造を考えながら読んでいる	8.8%	36.0%	44.7%	10.5%
意味の切れ目を意識しながら読んでいる	16.7%	42.1%	32.5%	7.9%
英文は早く読むよりはじっくり読むほうだ	42.1%	38.6%	14.9%	4.4%
英文は正確に読むよりも早く読むことが重要だと思う	14.9%	29.8%	38.6%	16.7%

・読解力テスト（7月）

問	英検3級読解問題					英検準2級読解問題			
	1	2	3	4	5	1	2	3	4
正答率	88.4%	85.7%	86.6%	85.7%	73.2%	68.8%	50.9%	45.5%	42.0%
自信を持って 解答した 生徒の割合	41.2%	41.0%	25.9%	21.5%	15.2%	12.5%	9.0%	7.2%	3.6%

英検3級および準2級の読解問題を用い生徒の読解力を測るとともに、テスト直後に問題の「どこが難しかったか」を、自由記述アンケートにより生徒にたずねた。英検3級では、本文全体の内容を問う、問5“*What is this story about?*”の正答率が低く、自由記述回答でも、「問5の問題が難しかった」「全体の内容が掴めなかった」と答えた生徒が多かった。また、問5に対し8割以上の確率で正解だと自信を持って解答した生徒の割合は15.2%であった。すべての設問を通し、自信を持って解答した生徒の割合は、どれも正答率の半分以下であった。英検準2級では、「どこが難しかったか」という質問に対して、「わからない単語がたくさんあって、内容が理解できなかった」「全体の内容がよくわからなかった」「読んでいて長く感じた」などという記述が目立った。問1は68.8%の正答率だったが、自信を持って解答した生徒の割合は12.5%であった。これらの結果から、英文の内容を的確に読み取ることができないままに問題を解いている生徒が多いことが再確認できた。

リサーチ・クエスチョン

生徒が英語の読解力の向上を実感し、自力で初見の英文を読んで解釈できるようになるためには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：制限時間内に英文（英検3級・準2級）を読み、その内容を問う問題に自信を持って正答できる生徒が全体の5割を超える。

改善のための手だて

- グループやペアでの活動を多くし、生徒が主体的に取り組めるような活動を増やせば、授業に対する姿勢が受け身からより積極的なものになるだろう。
 - ・ 生徒の集中力を保つため、一つの活動に費やす時間を決める。
 - ・ 小テストの相互採点、音読や要約など声を出す活動には、積極的にペア活動を取り入れる。
- 予習を前提とせず、授業時間内に英語の内容がわかるような指導をすれば、英語での活動も苦ではなくなり、英語がわかるという自信を持つようになるだろう。
 - ・ 文法や単語・熟語を整理したワークシートを事前配布し、苦手な生徒の英文理解を支援する。
 - ・ ワークシートは、1レッスン表裏1枚にまとめ、授業の流れに沿って学習できるよう工夫する。
 - ・ ワークシートの指示は簡潔な英語にし、各活動は10分以内とする。
- 未知の単語や熟語があっても推測しながら読み進められるようになれば、能動的な読み方に慣れ、英語で読んで概要が理解できるようになるだろう。
 - ・ 各パラグラフのトピックセンテンスをたずねる質問を英文理解活動の最初に取り入れる。
 - ・ パラグラフや課の内容を日本語・英語の両方でまとめる練習を行う。
 - ・ 文構造に関する説明や日本語に翻訳して意味を確認する英文は1つか2つに絞る。
 - ・ 物語を読むレッスンでは、スラッシュリーディングの手法を使い速読を意識させる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・第2回授業改善アンケート（1月）

英文読解に関する質問	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
英語を読んで理解する力を授業で身につけたい	73.7%	21.1%	1.8%	0.9%
内容をイメージしながら読んでいる	32.5%	53.5%	8.8%	1.8%
頭のなかで文字を音声化している	34.2%	45.6%	11.4%	5.3%
文構造を考えながら読んでいる	14.9%	34.2%	36.0%	12.3%
意味の切れ目を意識しながら読んでいる	19.3%	44.7%	24.6%	9.6%
英文は早く読むよりはじっくり読むほうだ	28.1%	47.4%	14.0%	7.9%
英文は正確に読むよりも早く読むことが重要だと思う	10.5%	39.5%	30.7%	16.7%

3学期のはじめに、対象の3クラス118名（欠席者5名）に7月に行ったものと同じアンケートを実施した。アンケート結果から、① 英文を早く正確に読むことの重要性を意識する生徒、② 文構造を考えながら読むことの重要性を意識する生徒、の割合が増える傾向が見られた。教師の解説や和訳に依存した受け身の状態から、主体的に長文の意味を把握しようとする態度が育ちつつあるようだ。

・読解力テスト（12月）

問	英検3級読解問題					英検準2級読解問題			
	1	2	3	4	5	1	2	3	4
正答率	92.0%	94.6%	84.8%	98.2%	80.4%	75.0%	57.1%	58.9%	48.2%
自信を持って解答した生徒の割合	52.7%	52.7%	35.8%	33.0%	26.8%	22.1%	10.7%	7.2%	3.6%

英検3級は、全員が制限時間10分以内に問題を終えた。7月に比べ、ほとんどの生徒が30秒から1分、解答時間を短縮し、5名の生徒は約4分短縮した。問5について、8割以上の確率で正解だと自信を持って解答した生徒の割合は7月と比べ若干改善したものの26.8%と低かった。「どこが難しかったか」についての記述には、「最後の問題」「名前を変えるところ（歌手Ray Charlesの名前の由来）」「第4段落目」など具体的な内容が書かれており、7月にあったような「全部」「ほとんど」という記述は見られなかった。問3の正答率は86.6%から84.8%へと下がったが、原因として、この問題の英文には、複数の固有名詞が含まれていることが考えられる。アンケートの自由記述等からも、見慣れない固有名詞が内容把握を難しくしていることがうかがえる。誤答に関して分析すると、問3については同じ固有名詞を含む錯乱肢（誤りの選択肢）を選んだケース、問5については英文全体ではなく第1段落のみをまとめた錯乱肢を選んだケースが多かった。正解には至らなかったが、7月の時点よりも本文の内容について、自力で読む姿勢が身につけてきている可能性がある。

英検準2級については、解答に10分以上かかっていた生徒の数が42名（7月）から36名（12月）へと減少した。しかし、解答にかかる時間は短くなってきたものの、平均正答数は4問中2.3問と低く、自分の解答が正解だと8割以上の自信を持って解答した生徒の割合も低かった。正答率ももっとも低かった問4は、英検3級の問3と同様、固有名詞や代名詞が英文を難しくしていると思われる問題であった。「どこが難しかったか」に関する回答では、「文がどこで切れているかわからなかった」「文の構造がわかりにくい」「（ある単語が）意味することが複数あるように見えた」「全部」「1文が長いところ」「全体的に」などとあった。「単語がわからない」という記述も目立った。1文が長くなることで文構造がわからなくなり、単語や熟語を前後の内容から推測することが難しくなってしまう

うようだ。例えば、home-exchange vacation がわからなかったと答えた生徒は、前後の文脈からこの表現の意味する概念が想像できなかったと推察できる。一方、「1つの文章が長くて要約するのが大変だった」「途中からわからない単語が出てきてわからなくなってしまった」と答えながらも7月よりも誤答数が少なかった生徒もおり、こうした生徒は、未知の単語や熟語があっても文全体の大意をつかむことに慣れてきたことが考えられる。

教師の変化

表面的には授業を理解しているように見える生徒の理解度を、データ化し分析することで、何ができていて何ができていないのか、どのようなことにつまずいているのかが明確になり、ワークシートや授業展開の工夫に取り組めるようになった。また、データを通して生徒のニーズや成長を知ることの大切さに気づかされ、言語理解の基礎力となる語彙や文法などの指導の充実を図ることが重要であると再認識させられた。

今後の課題（次の改善点など）

授業の内容が難しくなるほど、生徒が自分の英語に自信をなくしていき、授業が楽しくないと思うようになってしまう傾向がある。受験のための英語指導にとらわれず、将来使える語学力となるよう授業を工夫していく必要があると感じる。生徒が主体的に学び、考え、調べて知識を身につけるための授業をすることを目指して今後も授業改善に取り組んでいきたい。

まとめ・感想

これまで、生徒の英語への苦手意識を払拭し、生徒に英語学習への意欲や達成感をもたせられるような学習の場を提供していきたいとさまざまな活動を試みてきたが、そのためにはまず生徒のニーズや能力を分析することが重要だと再認識した。また、自分の思いや知識、価値観にとらわれることなく、生徒が自ら考える機会を多くしていくことを意識しながら授業を組み立てるようになった。今回、改善の目安に設定した目標を達成することはできなかったが、アンケートや読解テストを分析することで、ふだんの授業では気づかないような意外な点が明らかになり、授業や活動の内容を振りかえるよい機会となった。最後に、今回の研修を通して、さまざまなアイデアや助言をいただいた国際言語文化アカデミアの先生方や一緒に参加した先生方に感謝申し上げたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

田中武夫・田中知聡.(2009).『英語教師のための発問テクニック』大修館書店
中嶋洋一.(2000).『学習集団をエンパワーする30の技』明治図書
さいたま市立教育研究所『実践事例』<http://www.saitama-city.ed.jp/>

英語が苦手な生徒のためのリーディングスキルの育成

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・ 習熟度 ・小集団
-----	--------------	----	---	----	---------------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は2学年2クラス40名（男子17人，女子23人）である。コミュニケーションへの関心はあるが，英語に対する苦手意識が強い。大学や専門学校への進学を目指す生徒と就職を目指す生徒が混在している。

解決すべき課題

自分の考えや身のまわりのことを，簡単な英語で書いたり話したりすることや，やり取りすることは好きだが，英文を読んで理解することが苦手な生徒が多い。「授業で行う活動は楽しいが，テストでは点数が取れないので英語が好きではない」という声もある。中学校のときから英語が苦手であり，高校入学後も苦手意識を持ち続けている傾向がある。しかし，「苦手な英語を克服したい」「英語を得意になりたい」という前向きな姿勢もあり，どのような指導をしたら生徒が英語を理解できるようになり，苦手意識を克服させられるかが課題である。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・第1回授業改善アンケート（7月実施：回答者数 33）

生徒の英語学習への意識，英語への興味をあらためてアンケートで調べてみた。

1. 英語の授業が好きか。

好き	まあまあ好き	あまり好きでない	好きでない
8人(23%)	12人(34%)	6人(17%)	7人(26%)

2. 英語を読むことに関して，得意だと思うか。

得意	まあまあ得意	あまり得意でない	苦手
3人(9%)	7人(21%)	15人(45%)	8人(24%)

3. 英語を読む力を伸ばしたいと思うか。

伸ばしたい	まあまあ伸ばしたい	あまり伸ばしたくない	伸ばしたくない
10人(31%)	15人(45%)	5人(15%)	3人(9%)

<分析と考察>

- *半数以上の生徒が英語の授業が好きである。
- *7割近くの生徒が英語を読むことに苦手意識を持っている。
- *7割以上の生徒が英語を読む力を伸ばしたいと考えている。

・第1回英検3級テスト（9月実施：受験者数40）

まとまった文章の概要・要旨を読み取る力がどれくらい身につけているかを調べるために、英検3級の読解問題で使われる長文を用いた問題10問を出題した。1問1点とした平均点は3.4点で、3級合格点とされる60%以上の正答率に達している生徒は3名（全体の7.5%）であった。合計点の標準偏差は1.56、最大値は7点、最小値は0点であった。

リサーチ・クエスチョン

まとまった英文の概要・要旨を読み取る力を身につけさせるには、どのような指導をすればよいか。
改善の目安：英検3級程度の文章を用いた概要・要旨を読み取る力を問う問題で、60%以上の正答率に達している生徒の割合が増える。

改善のための手だて

- 教科書本文の概要・要旨を考える明示的な指導をすれば、まとまった英文の概要・要旨を読み取ることができる生徒が増えるだろう。
 - ・ パッセージのテーマ、パラグラフのタイトルを考える活動や、筆者の主張、意見を考える活動を取り入れる。
 - ・ グラフィックオーガナイザーを用い、英文全体の概要や流れ、パラグラフの要旨を考える活動を取り入れる。
- 基礎的語彙の学習に取り組みせれば、単語の意味でつまづくことなく英文を読み進めることができるようになるだろう。
 - ・ 中学校までの既習単語を確認する学習（小テスト）を行う。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・第2回英検3級テスト（12月実施：受験者数:40）

	第1回	第2回
平均点	3.4点	3.8点
6割以上得点した生徒の割合（数）	7.5%（3名）	15.7%（6名）
合計点の標準偏差	1.56	1.58
合計点の最大値	7	8
合計点の最小値	0	1

平均点は、3.4 から 3.8 に上がっているが、この 2 回のデータについて t 検定を行ったところ有意差は見られなかった。 $(p = 0.17 > 0.05)$ 。

基準(10 点中 6 点) に達した生徒の割合は、第 1 回では 7.5% だったが、第 2 回には 15.7% になり、まだまだ少ないものの増加していた。2 クラスそれぞれのクラスを見ると、一つのクラスでは 10% から 15.7%、もう一つのクラスは 5% から 15.7% という向上が見られた。3 か月間の授業で教科書 2 レッスン分の読解活動に取り組んだことで、文章の主題や筆者の主張を読み取ることに慣れた生徒が増え、平均点・合格者の割合が上昇したのではないかと考えられる。

しかし、中学卒業程度とされている英検 3 級の文章を用いたテストであったにもかかわらず、6 割以上正解する生徒が全体の 15.7% という結果に留まった。よりよい結果を得ることができなかった一つの原因として、既習単語の小テストを 3 回しか実施することができず、基礎的語彙の定着ができなかったことが挙げられる。また、基礎的な文法知識が足りないことも考えられる。その結果、本文内で理解できないセンテンスが多くあり、授業中に与えられるようなサポート(グラフィックオーガナイザーの図や日本語によるヒントなど)なしで内容を理解することが難しかったのではないかと考えられる。

教師の変化

授業改善の前は、とにかく教科書をを進めることを考えており、英文読解の授業というのは単語・文法の指導、日本語訳を用いた解説をするものだという認識であった。しかし、今回の取組を通して、リーディングのどのような技能を伸ばすことを目標に指導をするのかということをも明確に考えるようになった。そしてその目標に基づいて、言語活動、ワークシートのタスク、指導の流れなどをデザインできるようになったと思う。また、それぞれの活動の目的や効果を生徒に伝えて理解させることで、生徒の取組状況がよくなり、学習意欲を高めることができた。とりわけ、リーディングのみならず、すべての技能の向上を目指して明確な目的を持った授業づくりをするという意識が身についたことが、もっとも大きな変化であると実感している。

今後の課題(次の改善点など)

・コミュニケーションな授業

今回の授業改善のなかでは長文を読んで考える時間が多く、生徒と教師、生徒同士のコミュニケーションが少なくなってしまった。英文読解のプロセスのなかでコミュニケーションをとることや、プレリーディング・ポストリーディングの活動として自分の経験や意見を話させるような工夫をすることが必要である。

・基礎的な英語力にかかわる指導

グラフィックオーガナイザーを用いて文章の概要・要旨を把握する練習や、文章の主題や筆者の主張を考える活動を行うことによって、生徒の読解力を高められることがわかったが、それと並行して語彙力を高めるために、中学校までに学習する語彙の指導を帯活動として継続実施していくことなどが必要である。1 年間の授業を通して、各技能の下支えとなる基礎的な英語力を高める支援を行いつつ、各技能を育てるような授業計画をすることが課題である。

まとめ・感想

今回の授業改善のなかで自分自身をもっとも変わったと思うのは、明確な目標・目的のある授業を作る意識ができたことである。「この單元ではこの力を伸ばしたい。そのためにこの授業でこの活動をやっている」という意識で授業を行うことができるようになったと感じている。今回はリーディングのなかの「概要・要旨を読み取る力」に焦点を当てて授業改善を行ったが、4技能の伸ばすべき下位能力は他にも数多く存在する。今後それらの技能を伸ばすような授業改善に積極的に取り組んでいき、生徒の能力を最大限に引き出せるような英語教師を目指したいと思う。

年間の研修を通してさまざまな理論や知識を学ぶことができた。今後は、学んだことを大いに生かしながら目の前の生徒の指導と英語科全体としての指導力向上に貢献していきたい。また、自分と同じように意欲的に授業改善に取り組む先生方と出会い、英語教師としてさらに成長したいという気持ちが高まった。今回出会ったアカデミアの先生方、研修参加者の先生方に心から感謝したい。

トップダウン・リーディングを中心とした統合的言語活動

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・ 小集団
-----	--------------	----	---	----	---

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3クラス、合計80名（男子34名、女子46名）である。授業中の雰囲気は全体的に明るく、活動への取組状況も良好である。進学希望者は9割（大学短大3割、専門学校6割）、就職希望者が1割である。進学の受験形態は、英語の試験を要さないAO入試や推薦入試（指定校・公募制）が主で、将来の英語の必要性や現在の学習の重要性について認識できていない生徒もあり、難しい語彙・文法事項の学習になると、意欲が落ちてしまう生徒も多い。

解決すべき課題

基礎的な語彙・文法の知識と必要な読解技能を身につけ、教科書やその他の英文を自力で読むことができるようになってほしいが、中学校レベルの語彙・文法の知識が定着しておらず、まとまった英文を読む技能も身につけていないため、自力で読むことが難しく、読むことに苦手意識を持っている。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・英語学習に関するアンケート調査（5月実施）※回答者73名、記名は任意

今後の授業活動について再考するため、次の3つを含む10項目のアンケートを実施した。

①ペアでする活動についてどう思うか

好き	17名(23%)
どちらかといえば好き	34名(47%)
どちらかといえば嫌い	17名(23%)
嫌い	5名(7%)

②現在の単語や熟語の勉強方法を続けたいか

そう思う	27名(37%)
どちらかといえばそう思う	35名(48%)
どちらかといえばそう思わない	11名(15%)
そう思わない	0名(0%)

③授業でどのような力を伸ばしたいか(複数回答可)

英語を話す力	47名(64%)	英語を読む力	30名(41%)
英語を聞く力	45名(62%)	単語や熟語の知識	21名(29%)
英語を書く力	36名(49%)	文法の知識	19名(26%)

現在の授業形態のうち、ペアでの活動や単語や熟語の学習については、それぞれ70%、85%の生徒が「好き」「続けたい」と答えている。言語活動のうちでも話したり聞いたりする力をおもに使うペア活動を単語や熟語の学習時に行っており、この授業形態は生徒の嗜好や伸ばしたいと考えている力とも一致している。

- ・読解力調査、読解に関するアンケート調査（6月実施）※回答者74名、記名は任意

現在の読解力を確認するため、英検3級8問と、準2級2問の長文読解テストを実施した。さらにテスト終了後、長文読解に際して何が不足していると思うかをたずねた（自由記述、複数回答可）。

(1)英検 3 級～準 2 級長文読解問題平均点

	総得点	英検 3 級	英検準 2 級
平均点	5.4 点/10 点	4.4 点/8 点	1.0 点/2 点

(2)長文読解に不足していると思う力

単語	文法	読解力
41 名(55%)	14 名(19%)	7 名(9%)

長文読解のテストにおいて、英検 3 級の問題の平均点は 6 割弱である。長文読解に必要な力で不足している力については、半数以上の生徒が「単語」と答え、その他で回答の多かった「文法」や「読解力」の 3～6 倍にのぼった。

・全体的な考察

今後は多くの生徒が関心を示している「話す」「聞く」活動と関連づけて、「読む力」を伸ばしていくのが効果的だと考えた。具体的には、Pre-reading として背景知識を呼び起こすためのリスニングやスピーキングの活動を、また Post-reading としてグラフィックオーガナイザーを活用したリテリング、内容確認のためのリスニングを行い、統合的に「読む力」を育成するような授業をデザインする必要性を感じた。生徒が好んで行えるペア活動のような「話す」「聞く」活動を、今後も単語の学習や文法の学習時に行うことで、生徒の嗜好や意欲を活かしながら、読む力を無理なく伸ばせると考えた。また、読解力調査後のアンケートでは、5 割以上の生徒が単語の知識の不足を感じていることがわかった。文法の知識の不足についても多くの生徒が言及していたことから、概要や要点を自分の力で読み取らせるために、既習の基礎的文法をしっかりと習得させながら、新出の文法事項についても着実な理解を目指して段階的に指導する必要がある。語彙については、語彙定着のためのペアでの音読活動などを継続する一方で、未知語に遭遇しても、前後から大体の意味を推測しながら読み進めることができるように指導していく必要があると考えた。「英文を読むことに慣れること」「自分の力で初見の英文の概要・要点を読み取れるようになること」という目標を生徒と共有し、定期的に読解力と生徒の達成感を確認しながら指導内容を調整していくことにした。

リサーチ・クエスチョン

生徒が、初見のまとまった英文の概要や要点を、自分の力で読み取ることができるようにするには、どのような指導をすればよいか。

- 改善の目安：・英検 3 級レベルの初見の英文読解問題を 6 割以上正解できる生徒が全体の 7 割以上になる。
- ・「読む力が身についた」と思う生徒の割合が全体の 7 割以上になる。

改善のための手だて

- 読解に最低限必要な言語知識だけを与え、くり返し読解に取り組みせれば、未知語の意味を類推して読み進めることで必要な情報を検索できるようになり、概要をつかめるようになるだろう。
 - ・意味を与える語彙を事前に選定し、ワークシートで提示する。
 - ・基礎文法項目や基礎的語彙を、ワークシートやペアワークのなかでくり返し練習させる。
 - ・初見の長文について、類推しながら概要を読み取れるか確認させる。
- 英文のパラグラフの構造や論理展開を明示的に指導し、練習させれば、自分の力で話の流れを把握することができるようになるだろう。
 - ・グラフィックオーガナイザーを使って、文章の構造や論理展開を整理させる。

○ Pre-reading や Post-reading の活動を充実させれば、読解の手がかりや目的が明確になり、積極的・主体的に読解に取り組めるようになるだろう。

- ・読解前に、トピックに関して聞いたり話したりする活動をさせ、読む目的として内容に関する質問を与える。
- ・読解後に、内容に関するリスニング問題を与えたり、例文や枠組みをヒントにしたリテリングをさせたりする。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・英検 3 級の長文読解テスト ※9～12 月で 8 回実施

授業中に 5 点満点(1 点×5 問)の長文問題に取り組ませ、各クラスの平均点、合格点(6 割以上)に達した生徒数の推移を調査した。

*データの見方：平均点/合格者数

試験回 受験者数	第 1 回 64 名	第 2 回 61 名	第 3 回 74 名	第 4 回 61 名	第 5 回 70 名	第 6 回 64 名	第 7 回 65 名	第 8 回 67 名
クラス A	3.3/15	2.7/10	2.7/11	2.7/10	3/17	2.7/14	2.2/ 6	3.3/17
クラス B	2.8/13	2.8/10	2.2/ 7	2.1/ 7	2.9/15	3.1/14	2.1/11	3.4/17
クラス C	3.1/15	3.1/14	2.6/11	2.9/10	2.7/13	3.2/16	2.5/10	3.1/13
3 クラスの 合格者割合	67%	56%	39%	44%	64%	69%	42%	70%

・アンケート調査 1 ※9～12 月で 8 回実施（初回、最終回のデータが揃っている 50 名の比較）

毎回の長文テスト後に、次の①～③を含むアンケートを実施し、生徒の意識の変化を調査した。

		1. とても		2. まあまあ		3. あまり		4. 全然	
		9 月	12 月	9 月	12 月	9 月	12 月	9 月	12 月
①	長文を読むことに慣れてきたか。	0 名 (0%)	3 名 (6%)	15 名 (30%)	25 名 (50%)	22 名 (44%)	20 名 (40%)	13 名 (26%)	2 名 (4%)
②	わからない単語があっても、読み進めていくうちにおおまかな内容を理解することができたか。	1 名 (2%)	1 名 (2%)	20 名 (40%)	26 名 (52%)	26 名 (52%)	22 名 (44%)	3 名 (6%)	1 名 (2%)
③	文の構造や文章の流れについてのヒントは、読むときに役に立ったか。	0 名 (0%)	3 名 (6%)	43 名 (86%)	36 名 (72%)	4 名 (8%)	10 名 (20%)	3 名 (6%)	1 名 (2%)

ノンパラメトリック検定 (Wilcoxon の符号付き順位検定) の結果、特に「1.長文を読むことに慣れた」の項目で有意な向上が認められた。

・アンケート調査 2

5 月に実施したアンケートと同じ項目を含む 4 項目のアンケートを 12 月に実施し、特に「今までの英語の授業で読む力は身についたと思いますか？」という項目の回答状況を比較した。

	5 月	12 月
身についた	7 名(10%)	11 名(18%)
どちらかといえば身についた	35 名(48%)	44 名(72%)
どちらかといえば身についていない	21 名(29%)	5 名(8%)
身についていない	10 名(14%)	1 名(2%)

・全体的な考察

英検3級の長文読解問題で6割以上正解できた生徒は、第8回で全クラスの7割を超えている。クラスによってはすでに何度かその目安に達していた一方で、全体的に合格者割合がかなり低い回(第3, 4, 7回)もあり、順調に向上しているとはいいがたい。英文のトピックが生徒になじみがあるかどうか、また知っている単語が多く使われているかどうか、これらの結果に影響を及ぼしていると考えられる。しかし、授業中の読解タスクへの取組状況を見ると、概要や要点を読み取るスキルは身につけてきていると感じられた。授業改善後のアンケートでは、「読む力が身についたと思う生徒」の割合が90%になったことから、この取組によってほとんどの生徒の達成感を高めることができたといえるだろう。また、継続的に初見の長文読解を実施していくことで、英文を読むことに対する抵抗感が軽減し、慣れることができたと思われる。

教師の変化

「生徒が何を感じているか」「英語学習で困っていることは何か」「現在どれくらいの力が身についているか」などについて、アンケートやデータ、生徒との会話を通して日常的に考え、授業に生かすようになった。生徒との信頼関係も築きやすくなり、結果的に「英語が好きになった」「英語の授業が楽しい」という声を多く聞くようになった。この変化は、教師にとっても大変うれしいもので、今後の教材研究や授業づくりの励みになった。

今後の課題（次の改善点など）

まず、基礎的な単語や文法事項のくり返し学習の実施は不可欠だと考える。基礎的な英語力が定着すれば、これまでの手だてがより効果を発揮するはずである。また、より深い読解を促し、発信力をより高めるためにも、Post-readingとしての「話す」「書く」活動をさらに充実させる必要がある。そのためのさらに効果的な指導や教材作成も今後の課題である。

まとめ・感想

研修当初は暗中模索の状態だったが、研修で学んだことを振り返り、教材研究をして授業を進めていくうちに、生徒の表情が豊かに変わっていくのが目に見えてわかり、とてもうれしく、研修に参加させていただいた意義を強く感じることができた。また、他の先生方とさまざまなことを話し合い共有できたことは心強く、授業改善に取り組む大きな励みになった。最後に、データ分析の手法や教材作成など、相談に乗ってくださり助言を下されたアカデミアの先生方には日々お世話になった。ここに厚くお礼を申し上げたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

田中武夫(編著). (2011). 『推論発問を取り入れた英語リーディング指導』 三省堂
横溝紳一郎(編著). (2010). 『生徒の心に火をつけるー英語教師田尻悟郎の挑戦』 教育出版
静 哲人. (1999). 『英語授業の大技・小技』 研究社出版

クリティカル・リーディングのスキルを育てる読解指導

科目名	コミュニケーション英語 I	学年	1	形態	HR・習熟度・小集団
-----	---------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は 40 名（女子 18 名・男子 22 名）の 1 クラスである。芸術科目で音楽を選択しているクラスであり、比較的反応がよい。音読などではよく声を出す。素直な生徒が多く、ペアワークなどの活動にも積極的に取り組む。

解決すべき課題

教科書英文の空所補充や文法のドリル演習などの客観問題には積極的に取り組むが、準備されていない英語の質問には即答できない。本文についての自分の感想や意見についてはほとんど言えていない。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第 1 回授業改善アンケート（6 月実施：回答者数 40）

生徒の英語学習への意識、英語への興味をあらためてアンケートで調べてみた。

1. あなたは英語の学習が好きですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
4 (10.0%)	20 (50.0%)	12 (30.0%)	4 (10.0%)

2. 英語で自分の考えを伝えることがどれくらいできていると思いますか（文法、語彙の正確さは問わないこととします）。

ほぼできている	何とかできている	あまりできていない	ほとんどできていない
1 (2.5%)	11 (27.5%)	22 (55.0%)	6 (15.0%)

3. 英語の質問を考える活動を英文の内容のより深い理解に役立っていると思いますか。

役立っている	どちらかといえば役立っている	どちらかといえば役立っていない	役立っていない
17 (42.5%)	18 (45.0%)	5 (12.5%)	0 (0.0%)

<分析と考察>

「英語で自分の考えを伝えることができていない」という生徒は 28 人(70.0%)であった。「できている」という生徒は 3 割いるが、全体的に「主語＋動詞」の形で答えられない生徒がほとんどであるように感じる。「英語の質問を考える活動が英文の内容のより深い理解に役立っている」という生徒は合計 35 人(87.5%)だった。そのおもな理由は「自分で考え、ゼロから作るから」「内容を深く理解してないと作れないから」「文構造を理解していないと質問できないから」であった。日本語訳で意味がわかっている、既習の文構造まで注意を払って意味をつかんでいるわけではないということがわかった。1 学期後半に始めた質問を考えさせる活動は、既習の文構造を考えながら意味をとるのに有効であると感じられたので、これをより効果的な形で継続できないかと考えた。

・英検準2級の長文問題テスト

現在の生徒の読解力を測定するために英検準2級の問題を使って読解テストを実施し、さらに内容について賛成・反対の意見を、理由をつけて書かせた。その結果、段落ごとの具体的な内容を読む力の正答率の平均は60.8%、文章の流れを追って結論を見抜く力は32.4%であった。意見文を書くタスクについては、適切に書けた生徒は27.5%にとどまり、残りはすべて無回答であった。

リサーチ・クエスチョン

英文のより深い読みができ、それについての自分の意見をやり取りできるようにするにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：英検読解テストの各タイプの問題の正答率が向上し、理由を述べながら、賛成・反対の意見を英語で書ける生徒が全体の60%以上になる。

改善のための手だて

- 生徒に本文に関しての質問を考えさせれば、内容をより正確に読もうとするようになり、本文のより深い読みが可能になるだろう。
 - ・本文の内容について独自の質問を作らせ、ペアでやり取りさせる。Yes/No-Question, Wh-Questionを2つ以上考えさせ、質問が重複しないようにする。
 - ・口頭でのやり取りだけでは、文法上の誤りがあってもそのままになってしまうので、活動後に、質問例と解答例を配布する。答えが単語一語だけにならないように、文で答える習慣をつけさせるために、解答例も文で書く。
- 英文の内容に関して賛否を問う質問を与えて意見交換させれば、より深い読解ができるようになるだろう。
 - ・列ごとに賛成、反対を指定してそれぞれの意見をペアで発表させる。相手の意見を想像しながら考えるように指示する。著者が意図していたものが何かをしっかりと把握しながら意見を考える。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・第2回授業改善アンケート（11月実施 / 回答者数38）

生徒の英語学習への意識、英語への興味をあらためてアンケートで調べてみた。

1. あなたは英語の学習が好きですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
6 (15.8%)	13 (34.2%)	12 (31.6%)	7 (18.4%)

2. 英語で自分の考えを伝えることがどれくらいできていると思いますか。（文法、語彙の正確さは問わないこととします。）

ほぼできている	何とかできている	あまりできていない	ほとんどできていない
0 (0.0%)	14 (36.8%)	19 (50.0%)	5 (13.2%)

3. 英語の質問を考える活動を英文の内容のより深い理解に役立っていると思いますか。

役立っている	どちらかといえば役立っている	どちらかといえば役立っていない	役立っていない
11 (28.9%)	22 (57.9%)	5 (13.2%)	0 (0.0%)

<分析と考察>

1の項目で、英語が「好き」と答えた生徒は60.0%から50.0%に減少してしまった。パートごとのQ&Aシートに毎回意見を求める質問を追加したので、難しさを感じる生徒が増えたのではないかと考えられる。2の項目で、「できていると思う」という生徒が30.0%から36.8%に増えていた。新たな課題で困難に感じた生徒もいたと推測されるものの、意見を求める質問を与えたことで、考えを伝えられる達成感がある程度高めることができたと考えられる。生徒より「英文中に答えが明示された表面的な質問ではなく、批判的に読解しないと答えられない課題なのでよいと思う。」という感想があった。3の項目で、「役立っていると思う」と答えた生徒が42.5%から28.9%に減ってしまった。1学期はこの活動を試行として1レッスンに1回だけ実施したが、2学期は1レッスンにつき3回に増やした。ペアワークを設定したために複数の質問を考えさせたことで、難しすぎると感じた生徒が増えてしまったのかもしれない。ただ、「自分で文を組み立てる力がついて、英文に対する意識や関心も深くなると思った。」という感想もあったので、難しいが力にはなっていると感じている生徒もいると考えられる。「どちらかというと役立っている」という生徒を含めると86.8%であった(第1回では87.5%)。

・英検準2級の長文問題テストの正答者数の推移

	1回目(6月) 受験者40	2回目(11月) 受験者37
① 1段落目の具体的な内容を読む力	22人(55.0%)	14人(37.8%)
② 2段落目の具体的な内容を読む力	25人(62.5%)	21人(56.8%)
③ 3段落目の具体的な内容を読む力	26人(65.0%)	18人(48.6%)
④ 文章の流れを追って結論を見抜く力	16人(40.0%)	12人(32.4%)
⑤ 内容に関する意見文(賛成・反対:理由つき)	11人(27.5%) 無回答29人(72.5%)	18人(48.6%) 無回答11人(29.7%)

<分析と考察>

「段落ごとに把握する力」「結論を見抜く力」を測る問題の正答者数はすべて下がっている。これは、1回目は「時給がもらえる新しい学校の補習」、2回目は「食品で作られた新しいラップ」というトピックの違いに起因するものと考えられる。1回目のほうが、あまり背景的な知識を必要としなかったため読みやすかったのではないかとと思われる。特筆すべきは、⑤の表現する力で、改善の目安には至らなかったが、適切な文を書けた人数が大幅に増えたこと、適切さには欠けるがとりあえず書いている生徒が8名もいたことである。したがって無回答は約30%と大幅に減少した。約70%の生徒は自分の意見を英文で書いたのである。間違っても意見を書こうとする姿勢が育っているのは今回の授業改善の大きな成果である。

・ペア活動後の発表形態の改善

ペア活動後に何組かを指名してクラス発表させるときには、生徒の心的負担を考慮するあまり、練習

時と同じ相手同士ですでにやったことを再生させていたが、ランダムに指名した生徒で新しいペアを作ってさせてみたところ、適度な緊張感のある本来的なコミュニケーション活動にすることができた。また、あえて席の離れた生徒をペアにすると、十分な声量と明瞭な発音で話させることができた。

教師の変化

- ・もっとも変わったことは、生徒の答えをよく聞き、分析するようになったことである。これまでは、生徒の回答は正解か不正解かであったため、迷わずにフィードバックもできた。しかし、生徒が考えた英問や意見などは、予想外のものもあるので、適切な指導ができるようにしっかりと受け止める必要がある。こんなふうに言いたいけれどどう言ったらいいかという質問は教師にとってもよい刺激となった。
- ・教材はすべて教師が与えるべきものではなく、生徒の発話が他の生徒の学びの材料になるということを確認した。生徒が考えた英文のほうが教師の考えたモデルよりも高い学習動機を生み出すこともある。参考となる生徒の作品を教材として取り扱うことで、容易に複数のモデルを示せるようになった。生徒にとって教師のモデルは到達困難なレベルに感じられるかもしれないが、生徒の考えた英文は手の届く目標となりえるのである。

今後の課題（次の改善点など）

- ・ペア活動を中心にやってきたが、活性化する発表方法を学び、目的に応じてグループ活動も取り入れてみたい。
- ・賛否両論があるテーマでどちらかの立場が有利になってしまわないような質問を設定し、やり取りを深めたい。
- ・初見の英文の理解度の向上ははっきりとした数字には現れなかった。これからも継続的に初見の英文読解に取り組ませてみたい。またこちらの質問も段落ごとのものばかりではなく本文の概要を問うものを加えていきたい。

まとめ・感想

今までの自分の授業は一定のパターンができあがっていて、ペアワークも多く取り入れ、生徒主体で、生徒もそれに慣れ、ついてきているのでよしとしてきた。今回あらためてこれまでの実践を振り返り、表面的な読解と文法等のドリル的な演習が中心の授業をしていて、自己表現活動をさせてこなかったことに気づいた。空所補充による教科書英文の再生活動に重点をおいていて、生徒が自分の英語で質問したり、意見を述べたりする活動の場を与えてこなかった。スポーツに例えると、筋トレなどの基礎トレーニングに終始して、練習試合を組んでいなかった。この授業改善で基礎と応用練習のバランスがよくなったと思う。また、「意見を書くときに自分の言いたい単語がわからなくて迷うことが多々あったので、やはり単語の勉強は重要だと思った。」という感想にも表れているように、英語を使わせることで、生徒が学習の必要性を実感するようになった。実質 5 か月あまりの今回の取組では十分な成果が上がったとはいえないが、継続することで、筆者の意図や行間まで深く理解したいという気持ちにさせ、さらに自己表現への意欲を高めることができるのではないかと考える。

日本語訳に依存しないリーディングの指導

科目名	コミュニケーション英語 I	学年	1	形態	HR・習熟度・小集団
-----	---------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は4クラス，合計104名（男子52名，女子52名）の生徒である。英語を苦手としている生徒が多いものの，英語の力を伸ばしたいと希望している者も多く，授業にしっかり取り組もうという雰囲気がある。進路希望については，進学が約4割，就職が約1割，その他・未定が約5割である。

解決すべき課題

教科書の本文の内容を理解するのに，日本語訳を参照してしまうため，自分の力で必要な情報を読み取らせたり，英文を意味のまとまりでとらえさせたりすることができていない。日本語訳を介さずに，英文の概要や要点を読み取る力を育てられるような指導が必要である。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・英文読解力テスト（7月：受験者101名）

英検3級の読解問題を出題し，その正答率を調べた。

平均正答数：2.3問/5問

設問	Q 1	Q 2	Q 3	Q 4	Q 5
正答率	66%	52%	42%	44%	20%

Q 1～Q 4は約4～6割程度の正答率であったが，Q 5の全体のテーマを問う問題は約2割の正答率であった。問題文や選択肢をヒントに，英文から答えの中心となる部分を探すことはある程度できて，英文全体の大意やメッセージを読み取る力が身につけていないことがあらためてわかった。

- ・英語授業に関わるアンケート(7月：回答者101名)

英語の学習，英語の授業，身につけたい力，進路希望についてのアンケート調査を行った。

Q 1 あなたは英語の学習が好きですか。	
(A) はい 48人(48%)	(B) いいえ 53人(52%)
Q 2 あなたは英語の授業でどのような力を伸ばしたいですか（複数回答可）。	
(A) 聞く力 32人(32%)	(B) 読む力 22人(22%)
(C) 話す力 59人(58%)	(D) 書く力 23人(23%)

Q 3 学校以外での一週間の英語の勉強時間はどれくらいですか。	
(A) ほとんどしない 71人(70%)	(B) 30分以内 15人(15%)
(C) 1時間以内 7人(7%)	(D) 2時間以内 5人(5%)
(E) 3時間以内 1人(1%)	
Q 4 英語の力で自信のあるものは何ですか(複数回答可)。	
(A) 聞く力 31人(31%)	(B) 読む力 31人(31%)
(C) 話す力 10人(10%)	(D) 書く力 18人(18%)
(E) 無回答 12人(12%)	
Q 5 英語の文を読むうえで特に必要だと思うものは何ですか (3つまで選択可)。	
(A) 語彙力 81人(80%)	(B) 文法の知識 64人(63%)
(C) 指示語が指すものの理解 42人(42%)	(D) 各パラグラフの要旨の理解 16人(16%)
(E) 文章全体のテーマの理解 31人(31%)	

項目Q 1, 3, 4の結果から、英語学習に対して前向きでなく自信もないという生徒が多いことが推察された。「読むこと」に特化してたずねたQ 5「英語の文を読むうえで特に必要だと思うものは何ですか」については、「各パラグラフの要旨の理解」「文章全体のテーマの理解」と回答するものが少なかった。「語彙力」「文法の知識」「指示語が指すものの理解」については授業で指導しているが、これら2つについては指導できていないことがその原因で、それが「読解力テスト」の結果に反映されていると思われた。教科書の英文について、まとまりでとらえながら読み進め、全体の概要を把握するような読解タスクを与えることが必要である。また、Q 2「あなたは英語の授業でどのような力を伸ばしたいですか」については、「話す力」と答えた生徒が多かったので、ポストリーディングの活動として、話す活動を取り入れることを考えた。

リサーチ・クエスチョン

日本語訳を介さずに英文の概要や要点を読み取れるようにするにはどのような指導をすればよいか。
改善の目安：英検3級レベルの英文読解力テストで、概要理解を問う設問の正答率が7割を超える。

改善のための手だて

- 英文内容を図示したグラフィックオーガナイザーで要点を整理させれば、日本語訳を介さずに話の流れを理解するようになるだろう。
 - ・理解しないまま英文から語句を抜き出してしまうのを避けるために、自分のことば（日本語）で記入させる。
 - ・英語バージョンのオーガナイザーシートを配布し、自分の理解を確認させたあと、シートを見ないでペアで発表し合わせる。
- テキスト全体の概要を問う読解タスクを与えれば、英文をまとまりとしてとらえながら読むようになるだろう。
 - ・読解前にワークシートで英文全体のテーマやメッセージを問うタスクを与えておき、それを意識しながら読ませる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・英文読解力テスト（12月：受験者100名）

再度、英検3級の読解問題を出題し、その正答率を調べた。

平均正答数：2.7問/5問

設問	Q 1	Q 2	Q 3	Q 4	Q 5
正答率	69%	72%	52%	52%	38%

Q1～Q4の正答率が、7月の調査では約4～6割だったのが、12月の調査では約5～7割に伸びた。Q5の全体のテーマを問う問題の正答率は、7月の調査では約2割であったが、12月の調査では約4割にまで伸びたものの、目標の7割には届かなかった。正答率増加の背景には、単語・文法等の知識が増えたことに加え、「単語が難しかったけど、段落ごとに文章を読んで理解した」、「文章全体のテーマを理解するところが難しい」という生徒の感想から推察されるように、本文全体や段落ごとのテーマを理解しようと意識する生徒が多くなったことがあると思われる。

- ・英語授業に関わるアンケート(12月：回答者100名)

7月と同じ項目でアンケート調査を行った。

Q 1 あなたは英語の学習が好きですか。
(A) はい 61人(61%) (B) いいえ 39人(39%)
Q 2 あなたは英語の授業でどのような力を伸ばしたいですか（複数回答可）。
(A) 聞く力 41人(41%) (B) 読む力 21人(21%)
(C) 話す力 69人(69%) (D) 書く力 29人(29%)
Q 3 学校以外での一週間の英語の勉強時間はどれくらいですか。
(A) ほとんどしない 70人(70%) (B) 30分以内 15人(15%)
(C) 1時間以内 12人(12%) (D) 2時間以内 2人(2%)
(E) 3時間以内 1人(1%)
Q 4 英語の力で自信のあるものは何ですか（複数回答可）。
(A) 聞く力 19人(19%) (B) 読む力 40人(40%)
(C) 話す力 11人(11%) (D) 書く力 15人(15%)
(E) 無回答 16人(16%)
Q 5 英語の文を読むうえで特に必要だと思うものは何ですか（3つまで選択可）。
(A) 語彙力 72人(72%) (B) 文法の知識 62人(62%)
(C) 指示語が指すものの理解 41人(41%) (D) 段落ごとのテーマの理解 16人(16%)
(E) 文章全体のテーマの理解 35人(35%)

Q5「英語の文を読むうえで特に必要だと思うものは何ですか」については、7月と比べ生徒の意識に大きな変化は見られなかった。Q3「学校以外での一週間の英語の勉強時間はどれくらいですか」、Q4「英語の力で自信のあるものは何ですか」の回答からは、英語の力に自信がなく、学習意欲が低いという傾向はあまり変わっていないことがわかった。しかし、Q1「あなたは英語の学習が好きですか」については、「はい」が7月と比べて13%増えた。1文1文の英文解釈より全体的な理解に焦点を当て

たことや、ペアでのスピーキング活動を取り入れたことによって、より多くの生徒が英語学習のおもしろさを感じられるようになったと考えられる。

教師の変化

- ・文法訳読が中心の授業から、英文の概要、パラグラフの要旨、要点を読み取る活動を中心にした授業にしたことで、英語を使用する場面が明確になり、以前よりも英語で授業をすることに対して抵抗がなくなった。
- ・教科書の本文からグラフィックオーガナイザーを作ることで、パラグラフの構成やつながりについてより注意しながら教材研究をするようになった。

今後の課題（次の改善点など）

- ・プレリーディングの活動を工夫し、生徒がより興味・関心を持って英文読解に臨めるようにする。
- ・生徒のリーディングスキルを高めるのにより効果的で、適切な難易度のグラフィックオーガナイザーを工夫して作成する。
- ・内容整理と概要を問うタスクだけでなく、行間（筆者の主張や登場人物の心情など）を読み取るタスクを準備する。
- ・英語バージョンのオーガナイザーを使った発表について、より論理的に話させる工夫や評価法などを考え、スピーキング活動として発展させる。
- ・読解や表現活動に必要な語彙および文法項目の選択と指導のタイミングを考える。

まとめ・感想

この授業改善プロジェクトによって、訳読中心の授業から、概要・要点理解の読解タスクを中心にした授業に転換することにより、生徒の興味・関心が高まるとともに、ポストリーディングとしてスピーキング活動を位置づけることもでき、授業を改善するための道筋が見えた。生徒が生き生きと活動に取り組む姿を見ることで、自信にもなった。しかし、授業改善の前後で、英語学習への取組状況に変化がないと感じている生徒も依然としているので、彼らの意識を変えられるような工夫を考えていきたい。また、今回はリーディングに焦点を当てたが、他の技能を伸ばす指導にも挑戦したい。

予習に基づく訳読授業からのパラダイムシフト

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は男子 11 名，女子 18 名の習熟度別発展クラスである。素直で意欲的な生徒が多く，落ち着いた雰囲気の中で授業に取り組むことができるが，学習態度は全体的に受け身的で，応用的な言語活動やテストに弱い傾向がある。

解決すべき課題

指示されている予習，復習はしっかりできるが，単語の意味を一つひとつ確認しながら 1 文ずつ訳していく文法訳読方式の意味理解を授業前に準備させているので，限られた時間で初見の英文を読んで大意をつかむ練習ができていない。初見の英文を読ませると，わからない単語でつまずいてしまい，文脈から意味を推測しながら読み進める力が身につけていない。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・アンケート①（6月：回答者数 29）

1. 英語の学習は好きですか。

好きである	どちらかといえば好きである	どちらかといえば好きではない	好きではない
3人(10%)	15人(52%)	8人(28%)	3人(10%)

2. 1の理由は何ですか。

「(どちらかといえば) 好き」な理由	「(どちらかといえば) 好きではない」理由
<ul style="list-style-type: none"> ・わかるとうれしいから ・単語や文法を覚えれば問題が解けるから ・学びがいて将来に役立つから ・外国語や異文化を学ぶ楽しさを感じるから など 	<ul style="list-style-type: none"> ・英文が難しいから ・長文を訳するのが難しいから ・単語が多くて覚えられないから ・得意な科目ではないから など

3. 現在の授業で英語を読む力が身についていると思いますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
5人(17%)	22人(76%)	2人(7%)	0人(0%)

4割近い生徒が英語の学習が「好きではない」と答えた。その理由にはばらつきがあるものの「単語が覚えられない」という回答が複数あった。単語をすべて覚えなければ英語は理解できないと思ってい

る生徒が多いのかもしれない。一方で、現在の授業で英語を読む力が身につけていると回答した生徒が9割を超えているのは、教師への気遣いもあるだろうが、訳読＝読解だと認識している生徒が多いからだと考えられる。実際、授業中の活動についてたずねた質問項目では、文構造・文法説明の精読の時間が「役立っている」と回答した生徒が90%にのぼり、そのなかでも「とても役立っている」とした生徒は35%であった。

・英検2級長文問題テスト①（6月：受験者数28）※一部の語彙について、意味を示して実施

	Q 1	Q 2	Q 3	Q 4	Q 5	平均
正答率 (%)	79	32	32	16	50	42
正答人数 (人)	22	9	9	5	14	

正答率の高いQ1やQ5は、正答となる選択肢と似た表現がパッセージの中に示されている問題であった。また、Q2～Q4の正答率が低いのは、正答となる選択肢が別の表現で言い換えられていたからであると考えられる。またテストの直後に「どのようなことに難しさを感じたか」をアンケートでたずねたところ、「単語の意味がわからない」と回答した生徒が19人(68%)おり、多くの生徒が「読めないのは語彙不足が原因」ととらえていることが推察された。語彙はもちろん重要であるが、多少の未知語があっても読み進めて必要な情報をつかむスキルの育成が必要であると感じた。

リサーチ・クエスチョン

初見の英文を自分の力で的確に理解できるようにするには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：・未習の語句の意味をある程度与えた条件下で、英検2級長文問題の正答率平均が6割以上になる。

・「初見の英文を読んで概要・要旨をとらえる力がついた」と実感する生徒が8割を超える。

改善のための手だて

- 授業で初見の教科書の英文を読ませ、概要やパラグラフの要旨をつかんだり、重要な情報を読み取ったりするタスクを与えれば、自分の力で英文を読めるようになるだろう。
 - ・読解タスクに取り組むための授業用ハンドアウトを工夫する。
- 意味を与える語を厳選して、読む練習をさせれば、文脈から単語の意味を推測する力が身につくだろう。
 - ・レッスンの最初に配付している単語のリストを廃止し、ハンドアウトに載せる語彙の量も必要最低限にする。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・英検2級長文問題テスト②（12月：受験者数29）※一部の語彙について、意味を示して実施

	Q 1	Q 2	Q 3	Q 4	Q 5	平均
正答率 (%)	52	21	97	59	48	55
正答人数 (人)	15	6	28	17	14	

正答率の高いQ3は、文章の骨子ともなるもっとも重要な情報を読み取る問題であった。また、Q2の正答率が低いのは、正答が英文のなかで直接示されず、行間を読み取る問題であったためと考えられる。全体の平均正答率について、目標値の60%を超えることはできなかったが、6月と比較すると42%から55%と、向上が見られた。

・アンケート②（12月：回答者数29）

1. 英語の学習は好きですか。

好きである	どちらかといえば好きである	どちらかといえば好きではない	好きではない
5人(17%)	14人(48%)	8人(28%)	2人(7%)

2. 1の理由は何ですか。

「(どちらかといえば)好き」な理由	「(どちらかといえば)好きではない」理由
<ul style="list-style-type: none"> ・最近だいたい読めるようになってきたから ・わかって読めたとき楽しさを感じるから ・将来必要であり、学習していて楽しいから ・将来英語で会話できるようになりたいから <p style="text-align: right;">など</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・苦手だから／得意ではないから ・単語や文法を覚えるのが大変だから ・英文などの内容が頭に入ってくるのから ・理解できないと追いつくのが大変だから <p style="text-align: right;">など</p>

3. この授業で英語を読む力が身についたと思いますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
7人(24%)	20人(69%)	0人(0%)	2人(7%)

4. この授業で、英語を読んで概要・要旨をとらえる力は身についたと思いますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
8人(28%)	17人(59%)	3人(10%)	1人(3%)

5. この授業で、未知語の意味を推測する力は身についたと思いますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
1人(3%)	17人(59%)	11人(38%)	0人(0%)

6. この授業で、英文中の重要な情報を検索する力は身についたと思いますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
6人(21%)	15人(52%)	8人(27%)	0人(0%)

6月と比べると「英語の学習が好き」という生徒が若干名増え、その程度もわずかに向上したが、大きな変化は見られなかった。好きでない理由として、6月同様「単語を覚えるのが大変」という回答は見られたが、それ以上に「苦手だから」という回答が増えた。それまでとは異なり、未知語の意味を推測しながら日本語に訳さずに読解する練習をした結果、漠然と「難しい」「苦手」と感じる生徒が一時的に増えたのかもしれない。また、「この授業で英語を読む力がついたか」という質問に対する回答にもほとんど変化は見られなかったが、わずかな違いに注目すると、「力がついた」と感じた生徒と「つかなかった」と感じた生徒との差が開いたといえる。授業で初見の英文を読むという実践を通して、達

成感を得られた生徒と、苦手を痛感した生徒との差であろうか。

「英語を読んで概要・要旨をとらえる力がついた」と実感している生徒は 87%となり、目標値 80%を超えることができた。ただ、「未知語の意味を推測する力がついた」と実感している生徒は 62%にとどまり、引き続き訓練が必要であると感じた。

また、「以前と比べて、英文に向き合うときの自分の気持ちや読み方に変化があったか」という自由記述の質問に対する多くの回答に、「集中して英文を読むようになった」「全体的な内容を理解しようとするようになった」「以前は読む前から半ばあきらめていたけれど、今はがんばって自分の力で理解しようという気持ちが強くなった」など、英文読解に前向きに取り組むようになったことがうかがえた。

教師の変化

予習によって授業の前に英文の意味理解を済ませていた以前と違って、生徒が授業内で初見の形で読解に取り組み、自分の準備したタスクにしたがって内容を理解していく様子を見られるようになったことに、指導者として大きなよろこびを感じた。読解タスクの作業中に机間指導をすることで、個別に、より効果的な支援ができるようになったとも感じている。また、以前は「教科書が難しすぎる」という思いから、過剰な日本語を事前に与えすぎていたが、必要最低限の語句の意味を与えて読ませてみると、難しいことに取り組むことに生徒がやりがいを感じている様子が見られ、生徒が自力で初見の英文に挑戦する機会を自分自身が奪っていたことに気づかされた。

今後の課題（次の改善点など）

- ・教科書の内容を自分のことばで言い換えたり、行間を読んだりするタスクを引き続き工夫して作っていく必要がある。
- ・家庭学習として何をさせるかを工夫する必要がある。
- ・読んだことにもとづいたスピーキング活動やライティング活動を工夫することで、より深い読解を促す指導を目指したい。
- ・研修内容を他の教師と共有し、授業内容や定期試験の出題方法について統一化を図る必要がある。

まとめ・感想

今回の研修に参加し、「やらせてみれば、生徒には思っている以上にできることがある」ということがわかった。授業中に自分のスキルを試させ、それを支援することが大切であると思うようになった。また、研修のなかでさまざまな指導法を学び、1つの科目で4技能を扱うことの意義を理解し、その方法をイメージすることができるようになった。また、英語教育のあり方が急速に変化していることを実感し、自分自身がつねにアンテナを高くして自分を更新し続けることが大切であると、身の引き締まる思いもした。特に今後は、「自分で考え、意見を表現する力」を身につけさせるための指導力を向上させたいと感じている。

主体的な読解を促すリーディング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅲ	学年	3	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3クラス，合計112名（男子62名，女子50名）の生徒である。どのクラスも明るく活発で，積極的に発言をしようとする生徒がいる一方，集中すべきときに集中しきれない生徒も多々いる。また，英語に対する苦手意識を持つ生徒が多く，自ら進んで学習しようという意欲はあまり見られない。各種上級学校への進学希望者が8割ほどいるが，そのほとんどが推薦やAO入試で進学しようと考えている。

解決すべき課題

自発的に英文を読み，重要なポイントを把握できるようになってほしいが，長文を見たときとたんにあきらめてしまい，投げ出してしまう生徒が多い。また，一つひとつの単語や文に集中してしまいがちで，理解できない箇所があるとそこで読みが止まってしまい，全体を把握することができない生徒も多くいる。今までに自発的に英文を読み，概要を把握するリーディング指導を行ってこなかったことが原因であると思われる。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・第1回英語に関する意識調査（7月実施：回答者数112）

1. 英語の勉強は好きですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
23名 (21%)	37名 (33%)	33名 (29%)	19名 (17%)

2. 将来，英語が必要だと思いますか。

必要だ	どちらかといえば必要だ	どちらかといえば必要でない	必要でない
56名 (50%)	39名 (35%)	11名 (10%)	6名 (5%)

3. もっと英語を勉強したいと思いますか。

したい	どちらかといえばしたい	どちらかといえばしたくない	したくない
23名 (21%)	37名 (33%)	37名 (33%)	15名 (13%)

4. 教科書の英文を読むことは楽しいですか。

楽しい	どちらかといえば楽しい	どちらかといえば楽しくない	楽しくない
12名 (11%)	27名 (24%)	51名 (46%)	22名 (20%)

<分析と考察>

- * 将来、英語が必要だと感じている生徒が 85%いる一方、もっと英語を勉強したいと答えた生徒は 54%にとどまった。また、英語の勉強が好きだと答えた生徒も 54%となり、意欲的でない生徒も多くいるのだとわかった。まずは、学習に対する意識改革が必要ではないかと感じた。
- * 教科書の英文を読むのが楽しくないと答えた生徒が 66%もいた。これは、学年が進むにしたがって、文構造、内容とも難しくなったのが原因ではないかと考えられる。

・第 1 回英検問題にチャレンジ！（7 月実施：対象者数 112）

英検 3 級の長文を読ませ、独自の追加問題を含む 6 問の読解問題を与えた。

最低点	最高点	平均点	6 割以上正解
0 点	6 点	2.47 点	28 名 (25%)

<分析と考察>

- * 多くの生徒が早い段階で読むことをあきらめてしまっている様子が見られた。まず、がんばって読んでみようという気持ちにさせることが必要であると感じた。
- * 1 文 1 文にこだわるあまり、なかなか先に読み進められない生徒も見られた。日本語に訳しながら理解していかないと不安になってしまうようである。英文の読み方をあらためて指導する必要があると考えた。
- * 想像していた以上に自力で読むことのできない生徒が多い。定期試験では高得点を取る生徒も、既読の英文を暗記しているに過ぎないということだろう。本来身につけさせるべき英文読解のスキルを授業で身につけさせることができているということを再確認した。

リサーチ・クエスチョン

英文に興味を持ち、自分の力で内容を理解する力を身につけさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：英検 3 級の読解問題を 6 割正解できる生徒が、全体の半数以上になる。

改善のための手だて

- ICT などを活用したプレリーディング活動をすれば、生徒が英文の内容に興味を持つようになるだろう。
 - ・教科書英文のトピックに関連する画像を提示する
 - ・トピックにつながるような身近な話題を使ってやり取りをする
- パラグラフの要旨やパッセージの概要をつかむ読解タスクを与えれば、生徒が自分の力で内容を理解できるようになるだろう。
 - ・全体把握ができるようにワークシートの形式を変更する
 - ・キーワード、キーセンテンスに着目するリーディング指導を行う
- 定期的に初見の英文を自力で読む練習をさせれば、自信が高まって、読む前にあきらめてしまうことなく読解できるようになるだろう。
 - ・教科書よりもやさしめの英文を選んで定期的に読ませる。
 - ・設問にもやさしいものを意図的に含めて達成感を味わえるようにする。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・ICTを活用した授業への生徒の反応

- * はじめのうちは新鮮さから食いついてくる生徒が多かったが、テンポが速くなってしまいがちでついていくのが大変だという声もあった。
- * 動画や音声などはあまり使わなかったが、生徒からはそれらを要望する声があった。ICTをさらに発展的に活用すれば、さらに生徒の興味関心を引きつけることができるのだと感じた。

・長文読解トレーニングへの生徒の取組状況

- * はじめのうちは英文を十分読まないまま答えを選んだり、なかなか先に読み進められなかったりする生徒が多かったが、次第に読むことに慣れ、取組状況がよくなった。また、比較的容易な英文を選んだことで、読解の達成感を感じている生徒もいた。
- * このトレーニングを楽しみにしている生徒もいた。

・第2回英語に関する意識調査（12月実施：回答者数112）

1. 英語の勉強は好きですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
19名（17%）	36名（32%）	40名（36%）	17名（15%）

2. 将来、英語が必要だと思いますか。

必要だ	どちらかといえば必要だ	どちらかといえば必要でない	必要でない
52名（46%）	49名（44%）	6名（5%）	5名（4%）

3. もっと英語を勉強したいと思いますか。

したい	どちらかといえばしたい	どちらかといえばしたくない	したくない
23名（21%）	37名（33%）	41名（37%）	11名（10%）

4. 教科書の英文を読むことは楽しいですか。

楽しい	どちらかといえば楽しい	どちらかといえば楽しくない	楽しくない
8名（7%）	23名（21%）	55名（49%）	26名（23%）

<分析と考察>

- * 「将来英語が必要」と答えた生徒が前回より5%増えた。これは、卒業が近づき、英語の必要性を感じる生徒が増えたことが大きな要因だと考えられる。しかし、「英語が好き」「英語をもっと勉強したい」と回答した生徒の割合は前回と比べあまり変化がなかった。この理由の一つとして、間に実施された定期試験が難しく、思うような点数が取れなかったことで学習動機が低下してしまったことが考えられる。授業内での生徒の反応はよくなっていたため、もう少し改善が見られるのではないかと考えていただけに、少し残念であった。
- * 教科書の英文を読むことが楽しいと回答した生徒が減ってしまった。教科書の内容がより難しくなり、内容理解が困難になったことが原因ではないかと考えられる。長文読解トレーニングでの生徒の反応はよくなっていたので、単純に「英文を読むことが楽しいか」という質問であればもう少しよい数値になっていたかもしれない。

- ・第2回英検問題にチャレンジ！（12月実施：対象者数 112）＊問題形式は第1回と同様

最低点	最高点	平均点	6割以上正解
0点	6点	3.06点	47名（42%）

<分析と考察>

- ＊改善の目安であった6割以上正解できる生徒を半数にするには至らなかったが、一定の成果はあったのではないかと感じている。5割以上正解している生徒の割合も、前回の44%から71%まで上がっていたので、全体的には自力で読める力は向上しているといえるだろう。
- ＊前回は読み始めてすぐにあきらめてしまっていた生徒も、投げ出さずに読み続ける様子が見ええた。まだあきらめてしまう生徒もいたが、その割合は前回よりも減少した。取組状況は徐々に改善してきていることから、英文を読むことに抵抗感がなくなってきた生徒が増えたと思われる。
- ＊今回は要旨や概要を読み取ることに重点を置いたが、より正確な情報検索読みなど、他のリーディングスキルも引き続き身につけさせていく必要があるだろう。

教師の変化

- ・英文理解を促すグラフィックオーガナイザーをワークシートに取り入れたことで、概要や要点を整理する必要から、より深く教材研究をするようになった。
- ・プレゼンテーションスライドの準備など、今まで行っていなかったことを取り入れたため、教材研究に時間がかかったが、生徒の反応が以前よりもよくなり、かつ生徒の活動時間を増やすことができた。
- ・グループワークなどの活動で全員が貢献できるように役割を与えたところ、以前より活発に取り組むようになったことから、生徒一人ひとりの学習プロセスを大事に考えるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

初見英文でのトレーニングでは、時間の関係から設問の答え合わせしかできなかった。そちらでもスキルの明示的な指導ができれば、より成果が上がっていたかもしれない。また、比較的やさしい物語文を中心に読ませていたので、説明文など異なるテキストタイプの英文でいろいろなリーディングスキルを試させる必要があるだろう。また、読ませた英文の要約をさせたり、自分の意見や考えを書かせたりすれば、さらに深い読みを促しながら、表現の能力も高められる授業にすることができると思う。

まとめ・感想

今回の研修を受講するにあたって、はじめは不安などから積極的な気持ちになれなかったが、次第に有意義なものにしたいと感じるようになった。アカデミアで行われる研修では、毎回新たなことに気づかされ、自分の未熟さを実感するとともに、仲間から大きな刺激を受けることができた。チームとして取り組む授業改善の効果を肌で感じることもできた。また、学校訪問でいただいたアドバイスは、自分に足りないものを明らかにし、かつ成長するための道筋を示してくれるものであった。心から感謝を申し上げたい。今回は、授業改善の対象が3年生であり、進路が決定している生徒が多いなかでの取組であったためか、思うような結果がでなかったが、計画的に授業を行うことで、一定の成果を上げることができるとわかった。今後は、4技能すべてに関してどのような力を身につけさせたいのかを考え、授業改善に努めるとともに、高校3年間の長いスパンでのより具体的な指導計画を考えたい。つねにチャレンジ精神を持ち、生徒とともに成長し続けられる教師でありたい。

生徒主体の質疑応答を通じた英文理解

科目名	コミュニケーション英語 I	学年	1	形態	HR ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	---------------	----	---	----	----------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象生徒は1学年2クラス計68名（男子33名，女子35名）である。ほとんどの生徒が大学進学を希望しており，基礎学力は高い。学習には前向きに取り組むが，部活動を優先する傾向がある。一つのクラスは積極的に授業に取り組み，声もよく出す。もう一つは落ち着いて授業を受けるクラスではあるが，声を出すことに対してはやや消極的である。

解決すべき課題

英文を理解する際に，日本語訳に依存する生徒が多い。読解前のオーラルイントロダクションでも，その目的・趣旨を十分理解せず，英文の日本語訳に取りかかる者が多い。英文を即座に日本語にすることが目的化し，自分の力で概要をとらえたり，要点を探し出したりする読解のスキルが身につけていないと思われる。1年生の段階からできるだけ日本語訳に頼らず，英文を読んでいく意識づけをさせていくことが必要であると感じている。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・ 授業観察（生徒の英文読解への取組状況）

生徒が正しい日本語訳にこだわる様子から，英文を日本語に訳せることが読解の力であると思っ
ている者が多いと推察される。1文1文を日本語にできても，概要や要点を自分のことばで理解していな
いため，内容に関する英語での質問を，教科書本文と違ったことばでされると，即座に応答が
できないことが多い。このことから，自分の力で能動的に読解し，自問しながら内容をかみ砕いて理解する習慣
を身につけさせる必要があると考えた。

・ 事前アンケート（7月実施：回答数68）

アンケート項目（抜粋）	人数（%）
英語の必要性を感じている（Yes）	64人（94%）
オーラルイントロダクションを概ね理解している（Yes）	35人（51%）
自分で英文内容について質問を作ることができる（Yes）	28人（41%）
ペアでなら英文内容について質問を作ることができる（Yes）	45人（66%）

ほとんどの生徒が英語の必要性を感じているが，英語を聞いたり英語でやり取りしたりするオーラ
ルイントロダクションを理解しているのはほぼ半数であった。また，英文の的確な内容理解に基づく質

問の作成については、独力でできるという生徒は4割にとどまり、ペアで行ったとしても3分の1の生徒が「できない」と感じていることがわかった。

・英検準2級読解テスト（7月実施：受験者数68）

概要や要点を読解する力を調べるために、英検準2級レベルの初見の英文（説明文）を読ませた。設問8問（1点×8）の平均点は4.7であった。やはり概要・要点を的確にとらえる力が不十分であることを再認識した。

リサーチ・クエスチョン

初見の英文(説明的な文章)を自分の力で的確に理解する力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：説明文を読んで、的確な理解にもとづいた内容に関する質問を作成できると実感する生徒が全体の7割を超える。

改善のための手だて

- 英文の内容に関する質問を作らせれば、自分の力で必要な情報を探しながら、よりの確に理解するようになるだろう。
 - ・ WH-疑問文の作り方を復習する。
 - ・ 簡単な英語による10分間のオーラルイントロダクションによりパッセージの流れを確認し、質問に取り上げるべき箇所（要点）を考えさせる。
- 英文の談話構造を明示的に指導すれば、パラグラフの要旨をとらえながら、全体の概要を読み取れるようになるだろう。
 - ・ 英文パラグラフの構造（主題文、支持文、結論文）を指導する。
 - ・ ディスコースマーカーを指導し、論理の流れを把握させる。
- 未知語の意味を推測する練習をさせれば、逐語訳にこだわらずに自分の力で英文を読み進めるようになるだろう。
 - ・ Word cloud を使って内容を予測させたあと、その文脈をもとに未知語の意味を推測させる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・事後アンケート（11月実施：回答数68）

アンケート項目（抜粋）	人数（%）
英語の必要性を感じている（Yes）	65人（96%）
オーラルイントロダクションを概ね理解している（Yes）	43人（63%）
自分で英文内容について質問を作ることができる（Yes）	33人（49%）
ペアでなら英文内容について質問を作ることができる（Yes）	48人（71%）

ほとんどの生徒が、7月のアンケートの結果と同様に英語の必要性を感じているが、文の的確な内容

理解に基づく質問の作成については、独力でできるという生徒は 5 割弱にとどまり、改善の効果が出ているとはいいがたい状況であった。ペアでなら質問が作れると感じている生徒は 7 割に達しているが、これはクラス内の人間関係の構築によりペアワークがしやすくなったためであるとも考えられ、本当に力の向上を実感できているかどうかは疑問である。自力で読ませるための支援としてのオーラルイントロダクションの理解度についてはやや向上が見られたが、さらに工夫が必要であろう。

・生徒が作る質問文の向上

パートごとに生徒が作成する質問文の分類 (1 1 月 : 1 クラス 34 人のサンプリング)

- ① Yes/No-Q 能動態 (0)
- ② Yes/No-Q 受動態 (0)
- ③ Wh-能動態 (10) : what (1) when (2) where (1) why (4) who (2)
- ④ Wh-受動態 (6) : what (1) when (2) where (1) why (1) who (1)
- ⑤ Wh-能動態+副詞節 (2) : what (2) when (0) where (0) why (0) who (0)

改善前と比べ、回数を重ねるごとに疑問文の種類が増え、文法上の誤りも少なくなった。プレリーディング活動として、オーラルイントロダクションや Word cloud による未知語の推測などを工夫したことで、さまざまな視点から質問のもとになる要点を探せるようになったのではないかと推察する。

・英検準 2 級読解テスト (1 1 月実施 : 受験者数 68)

	8 点満点の平均点 (正答率)	標準偏差
7 月	4.7 (58.8%)	1.74
1 1 月	5.3 (66.3%)	1.64

平均点は少し向上し、合格正答率といわれる 60%台に達した。個々の生徒の伸びを見るために *t* 検定を実施したところ有意差が確認された ($p < .05$)。

教師の変化

テキストタイプに応じた、内容理解のためのよりよいワークシートを作成するために、より深く教材研究をするようになった。また、生徒の読解を促すオーラルイントロダクションについて、その構成を工夫するようになった。

今後の課題 (次の改善点など)

- ・英文の情報検索スキルの向上は見られたが、パッセージの概要やパラグラフの要旨をとらえるスキルについても、パラグラフの内容を自分のことばで簡潔に説明させたり、サマリーを書かせたりするなどの指導によって、高めていく必要がある。
- ・英文の談話構造の理解に不可欠なディスコースマーカ―のなかで、特に接続詞の理解がまだ不十分であると感じた。学習した接続詞をまとめて指導するなど、知識を整理させることが必要であろう。

- ・未知語を推測させる指導として、画像や対義語等を提示してきたが、生徒たちが自発的に推測できるような学習方法を考えていきたい。

まとめ・感想

今回のアドヴァンスト研修では 4 技能に関する指導例や言語活動のヒントを与えてもらった。また、リーディング指導の改善に、長期的に集中して取り組む機会を得ることができた。引き続き、オーラルイントロダクションなどのプレリーディング活動の効果を高め、読解後の活動なども工夫していきたいと思う。また、アクション・リサーチを通して、アンケート調査や統計学的なデータ分析が、指導の効果や生徒の成長を判断・評価することができる重要なものであるという認識を持つことができた。成果を客観的に確認しながら、説得力のある指導を進めていけるよう、統計学に関する知識もさらに深めていきたいと思う。

授業改善にあたって参考にした資料等

- 卯城祐司(編著). (2009). 『英語リーディングの科学―「読めたつもり」の謎を解く』 研究社
三浦省五(監修). (2004). 『英語教師のための教育データ分析入門』 大修館書店
岡 秀夫(編著). (2011). 『グローバル時代の英語教育―新しい英語科教育法―』 成美堂

英語で進める Pre-While-Post のリーディング授業

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3クラス120名（男子47名、女子73名）の生徒である。8割以上が大学進学を希望している。クラスにより多少の差はあるが、学習意欲が比較的高く、ペア活動やグループ活動に積極的に参加する生徒が多い。また、音読の際の音量も大きく、発音などに注意しながら、意欲を持って取り組んでいる。

解決すべき課題

日本語訳や日本語での説明を介さないで授業を進めることで、多くの生徒が授業における読解に不安を抱いている。一つのレッスンが終わった後でも、英文の概要や要点をはっきりと把握できていないと感じる生徒もいる。多くの生徒が、自信を持ってまとまった英文を読めるという実感を得ていない。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・英文読解力テスト（7月実施：受験者数118名）

実用英語技能検定準2級の長文問題（Eメール3問、説明文問題4問）を使って、正答率と自信の度合いを調べた。問1,2,4,5,6は必要な情報を検索するスキルを問う問題であり、問3,7は全体の概要把握のスキルを問う真偽問題であった。解答時間は12分に設定した。

Eメール	問1	問2	問3	説明文	問4	問5	問6	問7
正答率	86.4%	39.0%	30.5%	正答率	44.1%	66.1%	28.0%	59.3%
自信あり (正答者のうち)	73.5%	71.7%	44.4%	自信あり (正答者のうち)	48.1%	62.8%	48.5%	55.7%

情報検索問題	平均
正答率	52.7%
自信あり (正答者のうち)	60.9%

概要真偽問題	平均
正答率	44.9%
自信あり (正答者のうち)	50.1%

- ・アンケート調査（7月実施：回答者数118名）

1. 英語の学習が好きか

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い	*無回答
26名(22.0%)	40名(33.9%)	39名(33.1%)	12名(10.2%)	1名

2. ワークシートを使った授業についてどう思うか

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い	*無回答
35名(29.7%)	70名(59.3%)	11名(9.3%)	1名(0.8%)	1名

3. 先生の話す英語（指示や質問など）はどれくらい理解できていると思うか

ほぼ全部 理解できている	まあまあ 理解できている	あまり 理解できていない	ほとんど 理解できていない
16名(13.6%)	72名(61.0%)	25名(21.2%)	5名(4.2%)

4. 日本語訳の必要性についてどう思うか

必要である	どちらかといえば必要である	どちらかといえば必要ではない	必要ではない	*無回答
68名(57.6%)	41名(34.7%)	6名(5.1%)	2名(1.7%)	1名

5. 日本語訳や日本語での説明なしに英文を読むことについてどう思うか

不安である	どちらかといえば不安である	どちらかといえば不安ではない	不安ではない	*無回答
56名(47.5%)	50名(42.4%)	9名(7.6%)	2名(1.7%)	1名

<考察>

タスクや設問によって正答率にばらつきがあるものの、生徒は全体として、どちらかといえば情報検索問題の方が得意であると思われる。正答率が一番高い問1において、正答でかつ自信があると答えた生徒の割合は正答者のうちの73.5%であり、正答率が一番低い問6においては48.5%であった。自信の度合いが80%を超えた問いはなく、全体的に自信を持って正答した生徒は多いとはいえない。

教師による授業中の英語の指示や質問が「理解できている」と答えた生徒は74.6%であったが、日本語訳や日本語での説明を介さない英文読解に対して不安であるという生徒は全体の89.9%、日本語訳が必要であると答えた生徒は全体の92.3%に達している。このことから、授業中に話される英語を理解できている生徒が多くいるにもかかわらず、英語だけの授業ではその理解に自信がないと考える生徒がほとんどである。一方で、およそ9割の生徒がワークシートの使用については肯定的にとらえている。

リサーチ・クエスチョン

日本語に頼らず、まとまった英文を能動的に読み、自信を持ってその内容を理解できるようになるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：・実用英語技能検定準2級の長文問題で、情報検索問題と概要真偽問題の両方の正答率の平均が向上する。

・自信を持って正答する生徒の割合が正答者の80%を超える。

改善のための手だて

- 日本語を最小限かつ効果的に使用すれば、英語で進められる授業の理解の確認ができ、より自信を持って内容を理解できた実感ができるようになるだろう。
 - ・ワークシートに日本語での真偽問題 (True or False Questions) を取り入れる。
- Pre-reading 活動としてスキーマを活性化させるペア活動を行えば、より興味を持って英文を読み進め、能動的な読みを促すことができるだろう。
 - ・ワークシートの最初の活動に Pair Warm-up を取り入れる。
- Post-reading 活動として自己表現活動を行えば、能動的な読みを促すことができるだろう。
 - ・ワークシートに本文の内容に関連した自己表現活動としての英作文課題を取り入れる。
- Post-reading 活動として再話 (Retelling) 活動を行えば、読解内容の理解を再確認でき、その理解に自信を持つことができるだろう。
 - ・ワークシートに本文の要約をまとめる Retelling のペア活動を取り入れる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

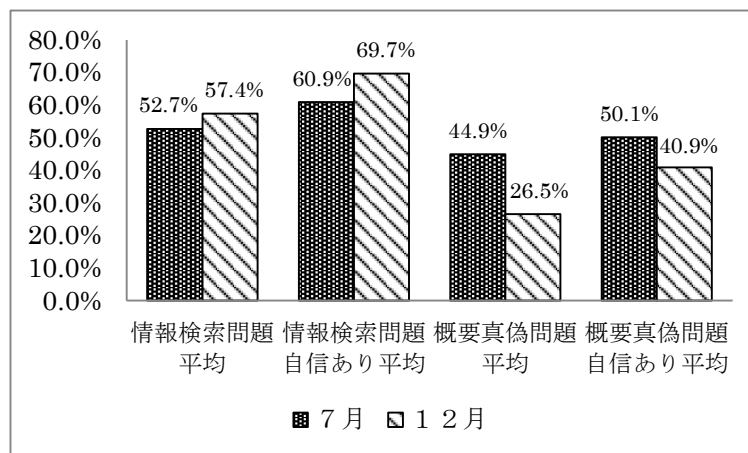
・英文読解力テスト（12月実施：受験者数 117 名）

7月と同じ条件で、異なる文章を使ってテストを実施した。

Eメール	問 1	問 2	問 3	説明文	問 4	問 5	問 6	問 7
正答率	75.2%	84.6%	30.8%	正答率	42.7%	30.8%	53.8%	22.2%
自信あり (正答者のうち)	76.1%	87.9%	47.2%	自信あり (正答者のうち)	80.0%	44.4%	60.3%	34.6%

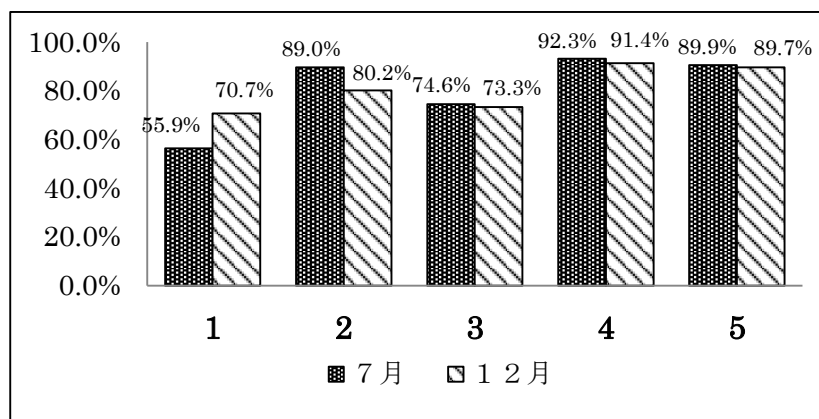
情報検索問題	平均
正答率	57.4%
自信あり (正答者のうち)	69.7%

概要真偽問題	平均
正答率	26.5%
自信あり (正答者のうち)	40.9%



・アンケート調査（12月実施：回答者数 117 名）

7月と同様に、1. 英語の学習が好きか、2. ワークシートを使った授業についてどう思うか、3. 先生の話す英語（指示や質問など）はどれくらい理解できていると思うか、4. 日本語訳の必要性についてどう思うか、5. 日本語訳や日本語での説明なしに英文を読むことについてどう思うかについてたずねた。下のグラフはそれぞれの肯定的な回答を比較したものである。



<考察>

読解力テストの結果から、正答でかつ自信があると答えた生徒の割合が正答者のうちの 80%を超えた問いが 2 問あることがわかる。7月のテストでは、その割合が 80%を超えた問いは 1 つもなかったこと

から、自信を持って正しく読み取ることができた生徒が増えたといえる。問題の種類別の変化を見てみると、情報検索問題の正答率と自信の度合いは増えたが、概要真偽問題におけるそれらの値は減っている。このことから、今回の授業改善は、英文の細かな部分を読み取る力は多少なりとも強化できたが、英文全体の概要をつかむ力の強化には課題が残っていることが考えられる。

また、アンケートの結果から、7月からの減少が多少は見られたものの、いまだにおよそ90%の生徒が日本語訳を必要と考え、また日本語訳や日本語での詳細な説明なしに英文を読むことについて不安を抱いており、改善の目標が達成されたとはいえない。しかし、英語の学習が好きであると答えた生徒が56.4%から70.7%に増えていることから、Pair Warm-up や Retelling などのペア活動を通して、英語を使う機会が増え、その楽しさをより多くの生徒が感じるようになったのではないかと考えられる。また、この積極性が英文を能動的に読むという姿勢に今後つながっていくのではないかと期待している。

教師の変化

これまでは授業をすべて英語で行うことに関して強い義務感のような思いがあり、その思いにとらわれ過ぎていたように思う。今回、日本語での真偽問題をワークシートに導入し、生徒が自分で読み取った内容を日本語で確認できることで、少しずつではあるが、自分の読解力に自信をつけているように感じられた。日本語使用を無理に避けるのではなく、最小限に効果的に活用することで、生徒に不安を感じさせることなく英語による授業の利点も生かすことができるのだと、自分の考え方が大きく変わった。

また、生徒の反応や単元の内容に応じてワークシートを改良していくことの大切さをあらためて実感した。一つひとつの単元の目標に合わせて、生徒に何を身につけさせたいのかという意識をつねに持って、より洗練されたワークシートを作っていきたいと思うようになった。

今後の課題（次の改善点など）

さまざまなテキストタイプに対応した読解のスキルを身につけさせるため、より効果的な読解指導のしかたや言語活動の研究をする必要がある。また、いまだに日本語訳や日本語での説明が必要だと考える生徒の割合が非常に高いことから、より効果的な日本語の使い方について、さらに考えていかなければならないだろう。より多くの生徒が不安を抱くことなく、英語で進める授業を通して能動的に読解に取り組み、スキルを高めていけるための工夫をこれからも続けていきたい。

まとめ・感想

アドヴァンスト研修に参加して、多くの先生方から刺激を受け、授業で実践できる多くのアイデアを学ぶことができ、感謝の気持ちでいっぱいである。忙しさを言い訳にして、現状に甘んじては、目の前にいる生徒の力を伸ばすことはできないのだとあらためて痛感した。これからもつねに問題意識を持つことを忘れず、小さな変化によって大きな効果を生み出すことができることを信じて、自己研さんに励んでいきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

門田修平・野呂忠司・氏木道人(編著). (2010). 『英語リーディング指導ハンドブック』 大修館書店

卯城祐司(編著). (2011). 『英語で英語を読む授業』 研究社

田中武夫・田中知聡. (2009). 『英語教師のための発問テクニックー英語授業を活性化するリーディング指導』 大修館書店

自立した読み手を育てる英語授業

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・ 小集団
-----	--------------	----	---	----	--------------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3クラス、合計78名（男子33名、女子45名）の生徒である。1クラス26名前後の小集団で授業を実施しているため、生徒との距離が近く一人ひとりとコミュニケーションが取りやすい。3クラスともにペア活動・グループ活動を積極的に行い、多くの生徒が熱心に学習する様子が見受けられる。一般受験をする生徒は少なく、およそ7割が推薦などを利用して4年制大学や短期大学、専門学校に進学する。

解決すべき課題

本授業では、文法解説や演習を交えて教科書の読解を行っている。教師主導で授業が展開されるため、生徒はつねに受け身となり教師の指導に頼っているのが現状である。また、スラッシュリーディングのワークシート（日本語訳つき）を使用しているため、生徒が自らの力で教科書の英文を読み内容を理解しているとはいえない。次年度は3学年となり、授業で扱う英文の分量が増えて難易度が上がるため、ますます生徒が自力で読解するのは困難になってしまうだろうと思われる。進学先で困らない程度の英文読解能力を身につけるためにも、授業の改善と訓練が必要である。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・英文読解力テスト（7月：受験者数77）

英検3級の長文読解問題（設問5問）を制限時間15分で実施した。

設問別正答率	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
人数 (%)	58人 (75%)	76人 (99%)	75人 (97%)	64人 (83%)	33人 (43%)

設問(1)~(4)は英文のなかの要点を問う問題であり、(5)は文章の概要を答える問題である。表が示しているとおおり、多くの生徒はピンポイントの情報検索はできるが、英文全体のメインアイデアを把握することができていないと推察される。5点満点（1点×5問）の平均は3.97点であった。

テスト実施直後に次のようなアンケートを実施した。

Q1. 問題を解いて、どう感じたか。

簡単	どちらかといえば簡単	どちらかといえば難しい	難しい
6人 (8%)	39人 (51%)	22人 (29%)	10人 (13%)

Q2. 読解問題に自信があるか。

自信がある	どちらかといえば 自信がある	どちらかといえば 自信がない	自信がない
4人 (5%)	19人 (25%)	40人 (52%)	14人 (18%)

英検3級の問題ではあるが、少しでも難しいと感じた生徒が全体の42%いる。そう思う理由（自由記述）として「わからない(難しい・知らない)単語があった」(10人)、「意味がわからない文、理解できない箇所がある」(8人)、「長文が苦手」(6人)、「設問の文が理解できない」(4人)などの回答があった。また、問題は簡単だと感じて自信には結びつかないようで70%の生徒は読解問題に自信がないと答えた。

テストとアンケートの結果から、生徒の読解に対する自信を高めながら、一つひとつの単語の意味にこだわらずに英文全体の大意を理解するスキルを育てることが必要であると考えた。

リサーチ・クエスチョン

英文のまとまりを意識しながら、的確に概要を読み取る力を身につけさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：英検3級の長文読解の概要に関する問題に正解する生徒が全体の70%を超える。

改善のための手だて

- 授業で初見の教科書英文の読解に取り組ませれば、能動的に読むことで読解力が高まるだろう。
 - ・内容を図示したグラフィックオーガナイザーの枠内に、自分のことば（日本語）で必要な情報を記入させ、パラグラフの要旨と関係性、英文の全体像をとらえられるようにする（個人活動）。
 - ・ワークシートをもとにグループで意見交換、発表を行い、クラス全体で内容理解を確認する。
- 英文を読む前に必要な語彙を厳選して指導すれば、1語1語の意味にこだわらず類推しながら自力で読み進められるようになるだろう。
 - ・高頻度の語句や内容理解のうえで重要な新出語を選んで語彙教材を作成する。
 - ・発音確認、ペアワークでの「英語－日本語」の変換練習によって、読解前に重要語句の意味を記憶にとどめさせる。
- テスト形式の英文読解タスクを与えれば、自分の読解力を確認することができるため、達成感や意欲が高まるだろう。
 - ・3～4レッスンごとに教科書以外の読解問題を実施する。
 - ・英文全体の概要理解を問う設問が必ず入るようにする。

生徒の変化（事後の検証結果）

・授業での活動状況

はじめは自分の力で教科書を読み進めてまとめていく作業に戸惑いを感じていたようであった。しかし、グラフィックオーガナイザーを用いた文章のまとめや重要語句の練習をくり返し行っていくうちに、その形式が定着していった。また、グループ活動を中心とした授業展開にも徐々に慣れ、役割分担をしながら助け合い学び合う姿も見られるようになった

・英文読解力テスト（12月：受験者数 76）

7月の英検3級テストと同等の問題を2種類用意し、それぞれ制限時間10分で実施した。

〈テスト①： Ray Charles 〉

*平均点（5点満点）：3.75

設問別正答率	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
人数 (%)	67人 (88%)	57人 (75%)	56人 (74%)	58人 (76%)	47人 (62%)

〈テスト②： Festival of Radishes 〉

*平均点（5点満点）：4.37

設問別正答率	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
人数 (%)	74人 (97%)	75人 (99%)	73人 (96%)	62人 (82%)	48人 (63%)

テスト②の要点を問う設問(1)～(4)の平均正答率は93.5%で7月の88.5%を上回ったが、テスト①では78.3%に下がっている。これは英文のトピックが生徒にとってなじみがあるかないかの違いによる結果かもしれない。

概要を問う設問(5)については、7月のテストでは43%の正答率であったが、12月のテストでは両方とも60%を超えた。残念ながら目標である70%を超える正答率には届かなかったが、授業での読解活動によって、細かい部分を推測しながら読み飛ばし、英文を大きなまとまりでとらえられるようになってきたのではないかと考える。

テスト②の直後に7月と同様のアンケート調査を行った。

Q1. 問題を解いて、どう感じたか。

簡単	どちらかといえば簡単	どちらかといえば難しい	難しい
10人 (13%)	45人 (59%)	18人 (24%)	3人 (4%)

Q2. 読解問題に自信があるか。

自信がある	どちらかといえば自信がある	どちらかといえば自信がない	自信がない
3人 (4%)	21人 (28%)	34人 (45%)	18人 (24%)

7月と12月のアンケート結果を比較すると英検3級の問題を少しでも難しいと感じた生徒は42%から28%に減った。しかし、読解問題への自信を問うと69%はいまだ自信がないと答え、前回とほぼ同じ結果となった。これは教科書以外の英文読解に取り組みせる機会を十分に与えられなかったことが原因であると考えられる。

高校卒業後もさまざまな場面で使える読解スキルを身につけさせるためには、自力で必要な情報やメッセージを読み取る訓練が必須である。読解の手がかりとなる語彙知識の増強も図りながら、引き続き、多様な英文に触れさせてスキルを試させる機会を授業で提供する必要があるだろう。

教師の変化

研修期間中、生徒と真剣に向き合い、英語教育について深く考えることができた。毎回学ぶ新しいスキルや指導法を授業に取り入れて、課題解決のために意欲を持って授業改善をした。さらに、教室で見られる生徒の取組状況を記録するだけでなく、アンケートやテストのデータを分析・比較することで自身の授業を客観的に分析することができた。目先の定期テストに向けての勉強をさせるだけでなく、生徒の将来を想像してどのような英語力を養い伸ばしていくかということにもとづいて授業をデザインすることの必要性を学んだ。

今後の課題（次の改善点など）

今回は読む力に特化して授業改善を図ったが、他の能力においても自分なりに研究し、変化を恐れず日々の授業で新しいことに挑戦してよりよい英語指導を実践していきたい。研修を終えても、専門家の意見に耳を傾け、専門書を手に取り勉強して、絶えず自己研さんに励みたい。他校の先生方との情報交換なども積極的に行い自身の意識を高く持ち続けたいと思う。一つひとつの授業が積み重なり、生徒の大切な高校生活の一部となっていく。自信を持って3年間の英語学習を終えることができるよう、これからも生徒を支援していきたい。

まとめ・感想

「アクション・リサーチにはハートがある。」この研修初日にアカデミアの先生がおっしゃったことばである。ひと通りやり終えた今の私には、そのことばの意味が理解できる。この研修、そしてアクション・リサーチを通して学んだことは私の英語教師としての人生に大きな影響をもたらし、成長するきっかけをくれた。このような充実した1年を過ごせたのは、アカデミアの先生方をはじめ、ともに励まし合い、英語教育に対する意識を高め合えた仲間のおかげである。心から感謝申し上げたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

JACET（大学英語教育学会）教育問題研究会. (2005). 『新英語科教育の基礎と実践—授業力のさらなる向上を目指して』 三修社

Larsen-Freeman, D. (2000). *Techniques and Principles in Language Teaching second edition.* Oxford University Press.

Pre-While-Post の読解活動による主体的な読み手の育成

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	--------------	----	---	----	----------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は2学年3クラス（116名：男子56名，女子60名）である。3クラスのうち1クラスは全体的におとなしいが，活動には熱心に取り組む。あとの2クラスは活発で積極的な生徒が多いが，グループ活動をさせると活動に集中できないことがある。ほとんどの生徒が大学進学を希望している。

解決すべき課題

- ・語彙力や文法理解が不足しているためか，自分の力で英文の内容を理解することができず，授業態度も受け身になってしまう生徒が多い。
- ・すべての英文を日本語に訳さないと不安を感じる生徒が多い。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・第1回授業改善アンケート（7月実施：回答人数116名）

A：そう思う B：どちらかといえばそう思う C：どちらかといえばそう思わない

D：そう思わない

<英語学習について>

1. あなたは英語の授業が好きですか。
2. 本文の内容を理解できていると思いますか。
3. 英語の授業に積極的に参加できていると思いますか。
4. 文章全体の概要やパラグラフのトピックセンテンスを意識しながら読んでいますか。
5. わからない語句があっても，全体の内容を理解しようとしていますか。
6. ペア活動やグループ活動には積極的に取り組んでいると思いますか。

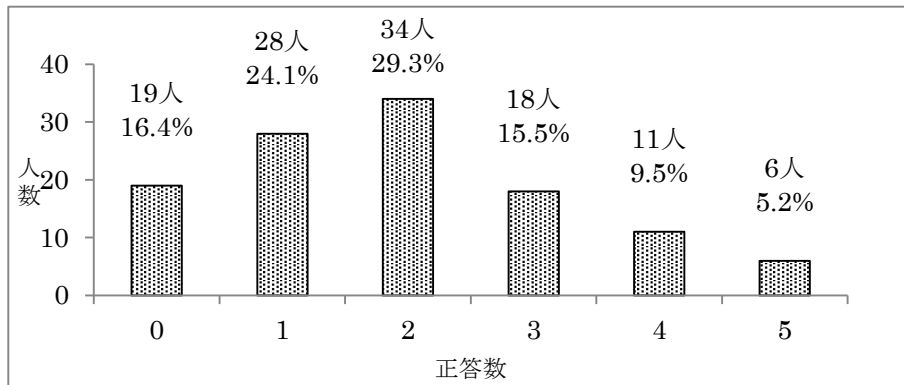
<英検準2級読解問題について>

7. 語彙は難しかったですか。
8. キーワードやトピックセンテンスを意識して読むことができましたか。
9. 内容を理解できたと思いますか。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
A	8人 6.9%	10人 8.6%	7人 6.0%	9人 7.8%	25人 21.6%	28人 24.1%	53人 45.7%	9人 7.8%	11人 9.5%
B	30人 25.9%	51人 44.0%	52人 44.8%	39人 33.6%	55人 47.4%	62人 53.4%	35人 30.2%	42人 36.2%	30人 25.9%
C	52人 44.8%	40人 34.5%	49人 42.2%	53人 45.7%	29人 25.0%	24人 20.7%	22人 19.0%	59人 50.9%	54人 46.6%
D	26人 22.4%	15人 12.9%	8人 6.9%	15人 12.9%	7人 6.0%	2人 1.7%	6人 5.2%	6人 5.2%	21人 18.1%

内容の理解度（質問2）と授業への積極性（質問3）の回答分布が似ていることから、理解できないと積極的に取り組めないという傾向が予想される。また、質問4の結果より、英文の構造を意識しながら読むことができていない生徒が6割近くいることがわかった。英検準2級読解問題については、語彙が難しいと感じている生徒が7割以上おり、語彙力の強化が必要であると感じた。

・英検準2級読解問題（5問：受験者数116名）



英検合格の目安となる5問中3問の正解に達している生徒は30.2%である。アンケート結果からわかるように、英文の読み方の指導や語彙力の強化が必要であると感じた。

リサーチ・クエスチョン

意欲的に授業に取り組むと同時に、未知の語彙や文法にとらわれずに英文を的確に理解できるようにするためにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：英検準2級の長文読解問題を5問中3問以上正解する生徒の割合が6割以上になる。

改善のための手だて

○ 背景知識を活性化させながら、読解に必要な汎用性の高い言語知識を厳選して指導すれば、自分の力で読解に取り組めるようになるだろう。

- ・ オーラルインタラクションを取り入れ、これから読む内容を推測させ、必要最低限の構文や文法の知識を与える。
- ・ 汎用性の高い構文や文法事項の定着のために、それらを含む教科書英文を暗唱させ、さらに自分で文を作らせる。

○ 内容理解において授業の進め方やワークシートを改善すれば、内容理解が深まり英文への抵抗が減るだろう。

・ Pre-reading

教科書英文の内容にかかわることについて生徒の興味や経験で答えられる質問をしたり、関連する身近な話題から導入したりして、背景知識を与えておく。

・ While-reading

- * 独力でテキストを読む時間を設け、未知の語句の意味を推測しながら概要をつかませる。
- * 内容の流れをグラフィックオーガナイザーで整理させる。
- * トピックセンテンスやディスコースマーカに注意して読むように指導する。

・ Post-reading

- * 英文を暗唱，音読させ，使用されている構文や文法を使った自由作文を書かせる。
- * サマリーライティングをさせる。
- * チャンクごとの音読活動をさせる。
- * 内容に関するクエスチョンを作らせる。

(留意点)

- * 予習しなくても取り組めるようなタスクにする。
- * 個人で取り組んだあと，ペアで確認し，グループで情報交換するという，Think-Pair-Share の活動形態を取り入れる。
- * 学んだ内容についてフレームを用いて口頭発表させることで，毎回の授業の振り返りをさせるようにする。口頭発表させることで，毎回の授業の振り返りをさせるようにする。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・ 第2回授業改善アンケート（12月実施：回答人数 116名） * 質問内容は7月アンケートと同じ

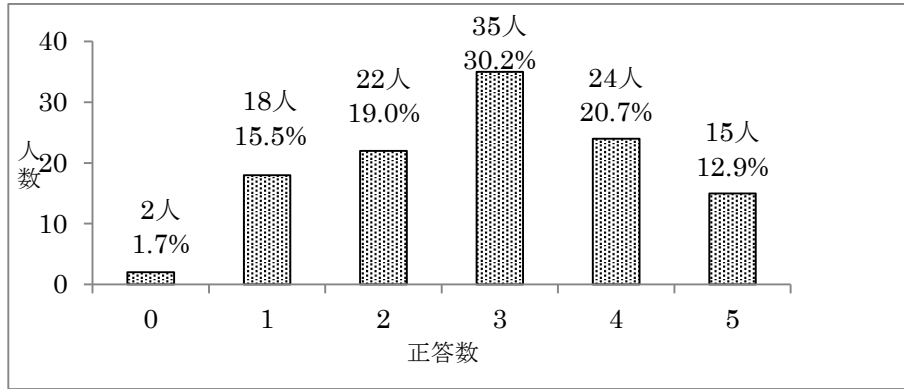
	1	2	3	4	5	6	7	8	9
A	28人 24.1%	12人 10.3%	27人 23.3%	13人 11.2%	39人 33.6%	45人 38.8%	42人 36.2%	23人 19.8%	32人 27.6%
B	50人 43.1%	73人 62.9%	60人 51.7%	72人 62.1%	58人 50.0%	58人 50.0%	35人 30.2%	59人 50.9%	41人 35.3%
C	30人 25.9%	19人 16.4%	27人 23.3%	26人 22.4%	14人 12.1%	9人 7.8%	28人 24.1%	29人 25.0%	28人 24.1%
D	8人 6.9%	12人 10.3%	2人 1.7%	5人 4.3%	5人 4.3%	4人 3.4%	11人 9.5%	5人 4.3%	15人 12.9%

7月のアンケートと比べ，全体的に改善された。内容理解（質問2）はA，Bと回答した生徒が52.6%から73.2%，授業への積極性（質問3）は50.8%から75.0%，概要やトピックセンテンスをつかもうとする意欲（質問4）は41.4%から73.3%，未知語があっても理解しようとする態度（質問5）は69.0%から83.6%に，いずれも大きく増加した。

・ 生徒の取組状況

- * これまでは，内容理解のワークシートについては，英語で記入させる方式にしていたが，十分理解していない教科書英文をそのまま抜き出す生徒や，英文での要約が難しく意欲をなくしてしまう生徒が見られたため，研修で使われたワークシートを参考にして，本当に内容を理解しているかどうかを教師も生徒も確認できるように，日本語を効果的に使ったタスクも取り入れた。この結果，以前よりも積極的に取り組む様子が見られるようになった。
- * 内容理解において，Think-Pair-Shareを取り入れた結果，限られた時間のなかで集中して英文を読み，理解しようとする姿が見られた。
- * グループ活動では，個々の生徒の役割を明確にしたことで，全員が協働し主体的に取り組むことができるようになった。
- * トピックセンテンスやディスコースマーカーを意識することで，より自分の力で読もうとする姿勢が見られた。
- * クリティカル・リーディングの活動として，読後に内容に関わる調べ学習をさせてみたところ，「またやってみよう」という感想が多かった。

・英検準2級読解問題（5問：受験者数116名）



7月と同じ「環境」に関する読解問題を課した。Top-down Processing を助ける情報として環境に関する一般知識を与え、Bottom-up Processing を促すために準2級で頻出する構文や環境に関する語句を与えた。生徒の積極性や意欲も加わり、英検合格の目安である5問中3問正解した生徒の割合は、7月時の30.2%から63.8%に倍増し、改善の目安に達した。平均点は1.9点から2.9点になり、*t*検定にかけたところ、有意な伸びであることが認められた ($p = 0.00 < 0.05$)。

教師の変化

- ・生徒のニーズを把握し、目標や目的を明確にして授業設計を行うようになった。
- ・同僚の教師に助言を求めたり、他校の研究授業を積極的に参観したり、文献にあたったりするなど授業改善への意識が向上した。
- ・研修で得た授業方法を、積極的に授業に取り入れた。

今後の課題（次の改善点など）

- ・プレゼンテーションソフト等のICTツールを活用し、内容理解を促す工夫をしていきたい。
- ・生徒の意欲や達成感を高めるために、調べ学習や発表など生徒中心の言語活動を増やしていきたい。

まとめ・感想

すばらしい先生方による研修は毎回非常に有意義であった。これほどまで自分の授業に対して厳しい指摘と的確な助言、励ましをされたことはない。この研修をきっかけとして自分の授業と向き合い、目標を明確にして授業を行うようになった。そして、もっと多くのことを学びたいと感じた。教師自身が生徒のニーズを把握し、目標と意欲を持って授業に臨めば、生徒の学習意欲の向上につながるということを実感した。Comfort Zoneにとどまるのは気楽であるが、それでは教師も生徒も成長はない。英語教師としてのさらなる授業力向上と生徒の英語力向上のため研修を積み重ね、努力していきたい。

授業改善にあたって参考にした資料など

- 門田修平・野呂忠司・氏木道人（編著）. (2010)『英語リーディング指導ハンドブック』大修館書店
金谷憲（編著）・高山芳樹・臼倉美里・大田悦子. (2014)『高校英語授業を変える！訳読オンリーから抜け出す3つのモデル』アルク
卯城祐司. (2011)『英語で英語を読む授業』研究社

読む力と書く力を育むサマリーライティングの指導

科目名	コミュニケーション英語 I	学年	1	形態	HR ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	---------------	----	---	----	----------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象クラスは1年生の1クラス40名（男子20名，女子20名）である。進路については，ほぼ全員が大学への進学を希望している。英語で行われる授業のなかでも，積極的・自発的に発言する雰囲気がある。

解決すべき課題

読んだ内容の要約や自分の考えなどを，情報が整理されたまとまった英文で，ある程度正確に書けるようになってほしいが，品詞を的確に理解できていないため，文として成り立たない英文を書く生徒が多い。また，20～30語前後の英文を書かせると単文の集まりのようになってしまい，文章としてのまとまりや一貫性が感じられない。自分の考えが日本語ではまとまっても，英文では思ったとおりに表現できない生徒が多い。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・アンケート調査（7月実施：回答者数40）

英語に関する興味・関心をはじめ，どのような力を伸ばしていきたいと考えているかについてアンケート調査を行った。その結果，4技能のうち「書くこと」だけが「嫌い」「どちらかといえば嫌い」という生徒が半数を超え60.0%だった。この生徒たちの書くことへの抵抗感を小さくし，自信を持たせることが必要であると感じた。

＜英語の授業でそれぞれの活動はどのくらい好きか＞

	聞く活動	読む活動	話す活動	書く活動
好き	27.5%(11人)	22.5%(9人)	15.0%(6人)	15.0%(6人)
どちらかといえば好き	52.5%(21人)	52.5%(21人)	42.5%(17人)	25.0%(10人)
どちらかといえば嫌い	17.5%(7人)	22.5%(9人)	30.0%(12人)	37.5%(15人)
嫌い	2.5%(1人)	2.5%(1人)	12.5%(5人)	22.5%(9人)

・第1回ライティングテスト（7月実施：受験者数40）

単元終了後に，レッスンサマリーの英作文を書かせた。まとまりのある文を書くことに慣れておらず，また，主語や動詞を適切に用いることができない生徒が多くいた。英文の内容を深く理解していないために，要約として必要な情報が書けていない生徒が多かった。

リサーチ・クエスチョン

英文を深く理解し、意見や感想を述べながら内容を自らのことばで書いてまとめる力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：ループリックの各項目で B 以上の評価となる生徒がそれぞれ全体の 70%を超える。

項目	評価	評価内容
分量	A	「主語＋動詞」がある文が 6 文以上書かれている。
	B	「主語＋動詞」がある文が 5 文以上書かれている。
	C	「主語＋動詞」がある文が 4 文以下である。
内容	A	要約として必要十分な情報が含まれているとともに、意見・感想が書かれている。
	B	要約として必要十分な情報が含まれている。
	C	要約として必要十分な情報が含まれていない。
正確さ	A	内容伝達に支障をきたす誤りがない。
	B	内容伝達に支障をきたす誤りが 1 つある。
	C	内容伝達に支障をきたす誤りが 2 つ以上ある。

※A…5点 B…3点 C…1点 計 15 点満点で評価するものとする。

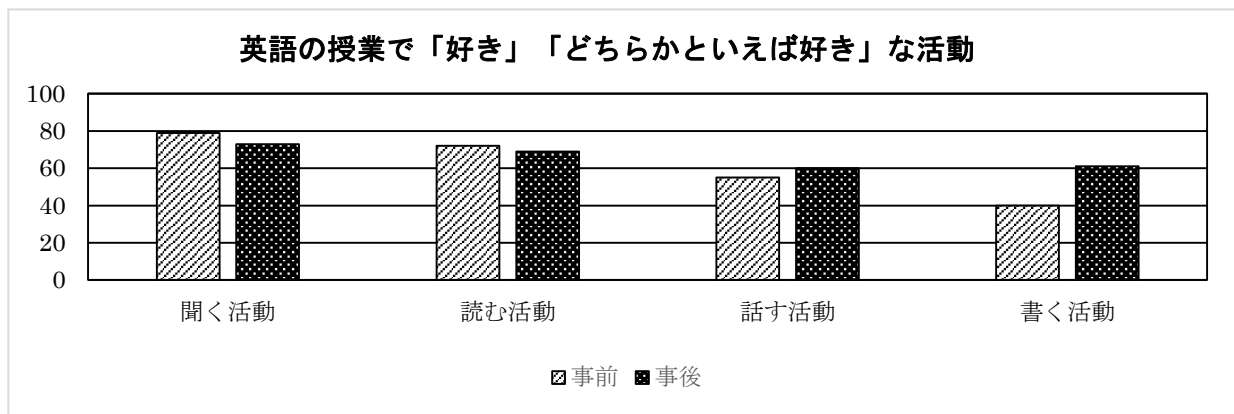
改善のための手だて

- 推論発問を積極的に取り入れた内容理解活動に取り組めば、生徒は英文から答えの手がかりを意欲的に探し出すようになり、内容を深く理解できるようになるだろう。
 - ・教科書本文に答えとなる部分が明示されているような質問だけでなく、内容から生徒が答えを推測しなければならないような問いも与える。
- グラフィックオーガナイザーを用いてパッセージの内容をまとめる活動に取り組めば、生徒は要約文に役立つ確かな要点の理解ができるようになるだろう。
 - ・内容を図式化してまとめるワークシートを作成・配布する。確実な理解を促し、あとのサマリー活動に反映させられるように自分なりの日本語を使って完成させる。
- 日常的に自分の考えを表現する言語活動に取り組めば、自己開示への抵抗が少なくなり、意見や感想を積極的に述べるようになるだろう。
 - ・授業内容と生徒の生活に関連した質問を導入活動として投げかけることで、自分の考えや気持ちを表現することに慣れさせる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・アンケート調査（12月実施：回答者数 40）

事後アンケートを実施し、事前に実施したものとの比較を行った。その結果、書く活動を「好き」「どちらかといえば好き」と答えた生徒の割合が 40.0%（16 人）から 60.0%（24 人）となり、2 割の増加が見られた。その増加率も 4 技能中でもっとも高かった。



また、話す活動においても「好き」「どちらかといえば好き」と答えた生徒の割合が増加した。日常的に自己開示する環境を授業内に取り入れていったことで、自分のことについて話す抵抗感が少なくなったと考えられる。

さらに、年間を通じて英語の力の伸びがどのくらい実感できているかを聞いたところ、4技能すべてにおいて多くの生徒が英語の力が伸びたと実感していることがわかった。特に今回の授業改善の焦点である読む活動と書く活動においては、8割を超える生徒が力の伸びを実感していた。

＜英語の授業で力が伸びたと実感している活動＞

聞く活動	読む活動	話す活動	書く活動
72.5%(29人)	85.0%(34人)	67.5%(27人)	87.5%(35人)

・授業中の生徒の取組状況の変化

授業内での推論発問や導入活動により、生徒の発話量が多くなっていった。自己表現をすることに対して抵抗が少なくなり、積極的な姿勢が見られるようになった。

・第2回ライティングテスト（12月実施：受験者数40）

再び単元終了後にレッスンサマリーの英作文を書かせ、事前のものと比較を行った。その結果、ほとんど全員の生徒が主語と動詞のある文を6文以上書いており、書く量に大きな向上が見られた。また、1回目では半数以上の生徒が書き上げるために40分ほどかかっていたが、2回目には20分ほどで書き終える生徒がほとんどであった。授業では1レッスンが4つのパートに分かれた教科書を使用しており、各パートの読解後にパートサマリーを書く活動を取り入れていた。最初はパートの要点を読み取ることに苦労していたが、次第にグラフィックオーガナイザーを活用しながら短い時間内にサマリーを書けるようになっていった。段階を踏んでレッスンサマリーの活動へつなげたことで、文をまとめる力が身につけていることがうかがえた。

ルーブリック評価では、「分量」「内容」「正確さ」すべての項目で有意な点数の上昇が見られた。「内容」の項目においては改善の目安には達しなかったが、「分量」と「正確さ」の項目においては改善の目安としていた7割以上の生徒がB評価となった。

	事前		事後	
	得点平均	B評価以上の生徒	得点平均	B評価以上の生徒
分量	3.35	65.0%(26人)	5.0	100%(40人)
内容	1.6	20.0%(8人)	2.5	50.0%(20人)
正確さ	1.6	25.0%(10人)	2.85	72.5%(29人)

教師の変化

- ・授業改善への意欲

授業改善を通して、これまで以上に自身の授業をよりよいものにしていくための自己研さんを積み重ねることができた。

- ・到達目標にもとづいた授業づくり

1時間の授業だけでなく、単元全体を通して「生徒にどのような力を身につけさせたいか」ということをつねに考えながら授業づくりに取り組むことができた。

- ・ルーブリック評価

今回の授業改善でルーブリック評価を取り入れたことで、以前は積極的に実施できなかった書く活動を多く取り入れることができた。評価項目を決めることで、その向上を目指した整合性のある指導を進めることができた。

今後の課題（次の改善点など）

アンケート結果を授業改善前後で比較すると、年間の授業を通じて4技能の伸びを実感している一方、以前よりも英語を「好き」と答えた生徒の割合が減り、「嫌い」と答えた生徒の割合が少し増加していた。課題や活動のレベルが生徒にとって適切なものであるかを、よく検討していく必要があると感じた。

まとめ・感想

1年間にわたる研修や授業改善を通して、自身の授業を客観的視点から見つめ直すよい機会を得ることができたとともに、他の受講者の先生方から多くのことを学ぶことができた。今後もさらに自己研さんを重ねて、生涯学び続ける教師でありたいとあらためて感じた。

授業改善にあたって参考にした資料など

門田修平・野呂忠司・氏木道人(編著). (2010). 『英語リーディング指導ハンドブック』 大修館書店

佐野正之(編著). (2000). 『アクション・リサーチのすすめ』 大修館書店

田中武夫・島田勝正・紺渡弘幸(編著). (2011). 『推論発問を取り入れた英語リーディング指導』 三省堂

協同学習を使った効果的ライティング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

38名（男子11名、女子17名）の美術コースのクラスで、全体の仲がよい。生徒は、英語力向上の必要性は感じているが、自分の英語力に自信を持っていない。卒業後は、主に美術系の上級学校進学や就職を希望している。

解決すべき課題

英語を使って表現することの楽しさを経験した生徒が非常に少ない。また、基礎力不足、特に英語で文章を書くことに対する自信の欠如が課題としてあげられる。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

5月に事前調査として英語学習および協同学習等に関する5件法のアンケートを実施した。約13%の生徒が英語検定試験の資格を所有していたが、準2級や3級所持者は、38名中3名のみだった。また、学校外での学習については、約84%の生徒がほとんどしていないと回答していた。英作文に関する自己評価については、約65%が低い自己評価をし、約81%が英語で作文を書くことについて自信がないと答えている。一方、ペア学習やグループ学習については、約60%の生徒が肯定的な評価を示した。

表1 (38名対象調査)

1) 学校外での1週間内の英語学習時間

7時間以上	4-6時間	2-3時間	30分-1時間	0時間	無回答
0 (0.0%)	1 (2.6%)	0 (0.0%)	5 (13.2%)	32 (84.2%)	0 (0.0%)

2) 英語ライティングの自己評価

大変よい	よい	まあまあ	あまりよくない	悪い	無回答
1 (2.6%)	0 (0.0%)	10 (26.3%)	8 (21.1%)	17 (44.7%)	2 (5.3%)

3) 英語ライティングに対する自信

非常にある	ある	まあまあ	あまりない	ない	無回答
2 (5.3%)	1 (2.6%)	3 (7.9%)	19 (50.0%)	12 (31.6%)	1 (2.6%)

4) 英語学習におけるペアワークの効果度

大変有効	有効だ	まあまあ	あまり有効でない	全然有効ではない	無回答
6 (15.8%)	6 (15.8%)	11 (28.9%)	9 (23.7%)	5 (13.2%)	1 (2.6%)

5) 英語学習におけるグループ学習の効果度

大変有効	有効だ	まあまあ	あまり有効でない	全然有効ではない	無回答
5 (13.2%)	6 (15.8%)	11 (28.9%)	6 (15.8%)	4 (10.5%)	6 (15.8%)

リサーチ・クエスチョン

学習した文法項目や枠組みを利用して、自信を持ってまとまりのある英文を書けるようになるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：まとまりのある英作文を、自信を持って書く生徒が 7 割以上になる。

改善のための手だて

- 学習した文法項目や枠組みを利用すれば、基礎力が身につく、自信を持って英作文ができるようになるだろう。
 - ・教科書既習の文法項目や表現を利用して英文を書くことによって、その知識の定着を促し、自信をつけさせる。
 - ・英作文の目標語数を提示し、毎回の英作文の記録をとらせることで達成感と自信をつけさせる。
- ペアまたは、3～4 人の少人数のグループ内で英作文の口頭発表をし、感想を共有し合えば、表現活動が活発化し、まとまりのある英文を書けるようになるだろう。
 - ・読み手（聞き手）を意識することで、ひとりよがりにならない、まとまりのある英文を書かせる。
 - ・口頭発表後により点と改善点をコメントさせ、それをもとに英作文の校正をさせることで、協同的学習をより有益な活動にする。
- 英作文のテーマを身近で現実的なものにすれば、英作文を書く意欲が高まり、英語を書く力が伸びるだろう（Ellis, 2001; Nunan, 1989）。
 - ・英作文の文集を作成し、輪読会を行うことで、英語で書くことへの動機づけを行う。
 - ・プレゼンテーションスライド等で代表的な英作文を紹介し、学び合いをより活発化させる。
 - ・Thank-you-letter を英語で書いて交換し合うことで、英文を書くことを現実世界のものと認識させ、動機づけを強める。
- 教師による focus on form のフィードバックを行えば、生徒による協同学習の不足点を補い、英語を書く力が伸びるだろう。
 - ・生徒の記憶が新しいうちに、英作文の評価や訂正の指摘をすることが言語知識の定着に有効と考え、フィードバックは迅速に行う。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

協同学習を使った英作文指導の生徒の事前・事後の変化を分析するために、以下の方法を使い、結果が得られた（なお、本研究の事前・事後の生徒の変化を見るために、教師による 5 件法の英作文評価も行った。この際、英語母語話者の教師と日本語母語話者の教師間の評価の信頼度を計るために評価者間信頼度を見たが、 $r = .843$ $**p < .01$ と高い結果が出た）。

第一に、①教師評価、②語数、③文の数、④T-unit の数、⑤error-free T-units/全 T-units について t-test を使い、ライティングの評価と fluency（流暢さ）、統語論的複雑さの変化の分析をした（表 2 参照）。fluency（流暢さ）は、同一時間内に書いた語数を基準に、また、complexity（複雑さ）については、文中における誤りの少ない T-unit の割合を指標に分析を行った。それによると、教師による総合評価に変化は見られなかったが、語数、T-unit の数、T-unit の割合が増加したことがわかった。これは、ライティングの総合力が上がったことは意味しないが、英文を書く fluency（流暢さ）が伸び、また、誤りの少ない

T-unit の割合の増加が示すように、統語論的に複雑な英文が書けるようになった可能性を意味すると考えられる。なお、*Hunt (1965)* によれば、T-unit は、‘a main clause with all subordinate clauses attached to it’ と定義されている。教師評価のなかでも、accuracy(正確さ)や organization (まとまり) における評価に伸びは見られなかった。

表2 協同学習前と後の英語ライティングの変化

	<i>N</i>	<i>Mean</i> (平均)	<i>s</i> (分散)	<i>p</i>
教師評価(20点満点)	38	1.7368	1.5996	.285
語数	38	9.0303	22.308	.027*
文の数	38	.697	3.1373	.211
T-unit の数	38	1.8788	.6392	.006**
Error-free T-units/英作文中の全 T-units	38	.18855	.28834	.001**

* $p < .05$ ** $p < .01$

第二に、協同学習後の生徒の英作文活動に関する自信や協同学習が英作文に及ぼす効果についての分析を事前・事後のアンケート結果をもとに行った。事前調査においては、「英語ライティングに対する自信」がある割合は、15.6%だったが、事後においては、42%に増加した。このように、協同学習後、それ以前と比較して生徒は英作文に対する自信を高め、協同学習のなかでもグループ活動が特に英語力を伸ばすのに影響があったということを示すものだった(表3参照)。

表3 協同学習後の英作文活動に対する生徒の意識

1) 英語ライティングに対する自信

非常にある	ある	まあまあ	あまりない	ない	無回答
0 (0.0%)	1 (2.6%)	15 (39.5%)	5 (13.2%)	17 (44.7%)	0 (0.0%)

2) 英語ライティングにおけるペアワークの効果度

大変有効	有効だ	まあまあ	あまり有効でない	全然有効ではない	無回答
10 (26.3%)	3 (7.9%)	13 (34.2%)	6 (15.8%)	0 (0.0%)	6 (15.8%)

3) 英語ライティングにおけるグループ学習の効果度

大変有効	有効だ	まあまあ	あまり有効でない	全然有効ではない	無回答
2 (5.3%)	13 (34.2%)	15 (39.5%)	2 (5.3%)	0 (0.0%)	6 (15.8%)

第三に、生徒の事前と事後のアンケート調査の記述回答に関する質的分析を行った。本研究実施前が示した生徒の協同学習に関する意識は、肯定的な回答を示すものが約半分を超える程度だったが、事後においては、8割を超える生徒が協同学習について肯定的な回答を示した。また、自由筆記における回答においても、協同学習に対する具体的で細かな意識の変化が観察された。例えば、英作文について口頭発表をすることが、「経験の共有につながり、より深い活動ができて楽しい」や「作文のみならず、発表や英語読解の練習になる」などがそれである。一方、友だちによる点数評価については、やや消極的な意見も見られたが、半数以上は肯定的な回答を示した(表4参照)。また、友達に対する文法や語彙の使用に関するコメントについては自信を持ってできないことがわかった。多くの生徒は、友達による英作文内容のコメントを期待し、それが英語で書くことへの意欲と流暢さへと変化していった。

表4 友達に点数評価されることによる学習の効果度

大変有効	有効だ	まあまあ	あまり有効でない	全然有効ではない	無回答
1 (2.6%)	6 (15.8%)	20 (52.6%)	3 (7.9%)	1 (2.6%)	7 (18.4%)

教師の変化

長期的展望のなかで、ライティング学習をリーディングやスピーキング、リスニングといかに統合していくかということを考えることができた。また、生徒の得意分野を積極的に授業に生かす（本研究では、他教科の「美術」との統合）ことも経験することができた。

今後の課題（次の改善点など）

英作文に対する生徒の自信を向上させることを優先したため、本研究では、accuracy(正確さ)についての指導や分析が不足していた。しかし、外国語学習者にとって、書いた量が増えるほど誤りが増加するというのもまた事実である。今後は、accuracy(正確さ)と fluency(流暢さ)の関係を軸に、そのバランスを追求したい。

まとめ・感想

協同学習を授業に取り入れることによって、生徒が英語で書くことについての抵抗感を減じることができた。また、英作文の fluency(流暢さ)の上昇が、本研究のもう一つの成果である。協同学習が英作文活動を単なるライティング技能習得の場にするのではなく、スピーキング、リスニング、そして、リーディングとともに4技能の有機的・統合的言語活動の促進につながると考える。日本の高校におけるライティング授業は、ややもすれば、日英翻訳や穴埋め等を使った文法・語彙指導になりやすい。しかし、学習指導要領が示すとおり、今後の英語教育では、授業を英語を使ったコミュニケーションの場にしていかなければならない。また、これらの4技能を積極的に統合し、実際に言語が使われている real-world に授業を近づける努力が教師に求められているのだと主張したい。最後に、研修の機会を与えていただいたことについての謝意を記したい。

授業改善にあたって参考にした資料等

- Ellis, R. (2001). Non-reciprocal tasks, comprehension and second language acquisition. In M. Bygate, P. Skehan & M. Swain (ed.), *Researching pedagogic tasks: Second language learning, teaching, and testing* (pp. 49-74). Harlow: Longman.
- Hunt, K. (1965). *Grammatical structures written at three grade levels*. Champaign, Ill: National Council of Teachers of English.
- The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (2011). Designated for Course of Study for Senior High Schools. Retrieved January 3rd, 2016, from http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/eiyaku/1298353.htm
- Nunan, D. (1989). *Designing tasks for the communicative classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Oi, S. Y. (2012). A Study of Student Evaluation and Teacher Evaluation (Master's Thesis). Waseda University.

読み手に伝わるパラグラフィティングの指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は2学年2クラス79名（男子38人，女子40人）である。うち一つは理系クラスで，英語が嫌いではないが苦手であるという生徒が多い。もう一つは文系クラスで，全体的に明るく元気で活動的な生徒が多い。両クラスとも積極的に学習活動に取り組むことができている。

解決すべき課題

教科書本文の内容理解ができる生徒は多いが，自分の意見を問う質問に対し，答えを英文で表現できるところまでは達していない。情報検索のための読解スキルだけでなく，内容を批判的に読み，感想や意見を英語で表現できる力を身につけさせたい。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・これまでの授業の振り返り

今まで課していた英作文は文法定着を図るための活動であり，教科書本文の内容に対する意見・感想を書く指導はしていなかった。そのため，表面的な内容理解と使われている文構造の説明が授業の中心になっていた。英文の内容を深く理解し，考えたことを英語で書かせることで，生徒の読解力と表現力を高めたいと考えた。

・自由英作文テスト（7月実施：受験者数78）

現時点での生徒のライティング能力を知るために，「ドレスコードは必要か不要か。またその理由は何か」というトピックで英作文を書かせた。これまでまとまった英文を書く機会がほとんどなかったためか，箇条書きでまとまりのない作文を書いた生徒が全体の90%あった。また，主題文＋支持文＋結論文の構造が確立していないものが90%で，文構造に着目すると，従属節としてのbecauseが使えている生徒はわずか3%，主語＋動詞の構造が使えていないものが53%あった。

また，このテスト後に，英作文の困難点についてアンケートでたずねたところ，次のような回答を得た。

設問：英作文で何が難しいと感じましたか？

書きかた	書く内容	単語	文法	特になし
24人(31%)	15人(19%)	18人(23%)	20人(26%)	1人(1%)

（自由記述）*考えていることはあるのにどう書きはじめていいのかわからない

*どのように文と文をつなげて作文すればいいのかわからない

*英語の作文の書きかたは今まで考えたことがなかった

<考察>

同じアンケートで「英語を書く力は必要である」と回答した生徒は 84%いたが、実際に書かせてみると、現時点ではまとまった英文を書くスキルはほとんど身につけていないことがわかった。生徒が実感している困難点を考慮しながら、明示的にライティング指導を行う必要があることを再認識した。

リサーチ・クエスチョン

読み手に伝わるまとまりのある英文パラグラフを書く力を身につけさせるためにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：評価ルーブリックの各観点で B 以上の評価がそれぞれ全体の 80%以上になる。

	①内容	②構造	③正確さ
A (5点)	内容に一貫性があり、支持文が例・理由などによって深められている。	主題文・支持文・結論文が確立しており、結論文に工夫が見られる。	内容伝達に支障をきたす誤りがない。
B (3点)	内容に一貫性がある。	主題文・支持文・結論文が確立している。	内容伝達に支障をきたす誤りが1か所でもある。
C (1点)	内容に一貫性がない。	主題文・支持文・結論文の構造が確立していない。	内容伝達に支障をきたす誤りが2か所以上ある。
運用 付帯 事項	与えられたトピックに関して関連のない文が入っていないか、支持文に付加情報があるかなどで判断する。	主題文・支持文に続く結論文が、主題文と（ほぼ）同じなら B、言い換えや感想などの形で書かれていれば A とする。	語順の誤り、時制の誤りを含むものなどに加えて、意味が通じないものも含む。

改善のための手だて

- パラグラフの枠組みを使って作文練習をさせれば、英文らしい構造や内容の一貫性を持った英文が書けるようになるだろう。
 - ・教科書本文読解後に枠組みを用いた1パラグラフサマリーの活動をさせる。
 - ・テスト形式のパラグラフライティング活動を行い、応用力を確認する。
- 1文英作文を使った会話活動をさせれば、コミュニケーションのための基礎的文法の正確さを意識できるようになるだろう。
 - ・枠組みを使った会話活動のなかで、重要語句や文法事項を使った1文を書かせ、S+V構造や接続詞の用法の定着を図る。

*評価ルーブリックを提示・説明し、授業での活動の目的とライティングの到達目標を理解させる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・ルーブリックを用いた中間測定（10月実施，人数：78人）

「あなたがもし一生同じ食べ物を続けなければならないとしたら何を選ぶか。またその理由は何か」というトピックで1パラグラフの英作文を書かせ、あらたに設定したルーブリックを用いて評価した。直前に、「ハンバーガー構造」（主題文・支持文・結論文の3層構造）について実演しながら説明した。

- ・最終自由英作文テスト（1月実施，人数：79人）

教科書の1パートの英文を読んで、「ハンバーガー構造」の1パラグラフに要約するという練習を3回（3パート分）行ったあと、「あなたは手紙とメールどちらがよいと思うか。またその理由は何か。」というトピックで1パラグラフの英作文を書かせた。

《中間測定・最終自由英作文テストの結果比較》

	①内容			②構造			③正確さ		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C
中間測定 (N=78)	17人 (22%)	53人 (68%)	8人 (10%)	11人 (14%)	34人 (44%)	33人 (42%)	6人 (8%)	17人 (22%)	55人 (71%)
最終テスト (N=79)	24人 (30%)	45人 (57%)	10人 (13%)	38人 (48%)	18人 (23%)	23人 (29%)	25人 (32%)	39人 (49%)	15人 (19%)

「内容」についてはB以上が87%になり、改善の目標に達した。詳細に見てみると、7月時点では97%あったbecause節の誤用も中間測定では42%まで減少し、最終テストでは複数の支持文が書けている生徒も増えており、一貫性に加えて内容を深めることができてきたことが、A評価の増加につながっている。C評価も微増しているが、これはトピックの難易度によるものと考えられる。「構造」については、目標には届かなかったものかなり伸びている。半数近くの生徒が結論文に自分なりの工夫を加えられるようになった。「正確さ」については、中間測定でC評価が7割を超えていたが、最終テストでは19%まで減少し、改善の目標に達した。また、3分の1近くの生徒がA評価となった。1文英作文による会話活動を継続したことで、基本構造（S+V）が定着してきたと思われる。

最終英作文を終えてから行ったアンケートで「書く力が身についたと思うか」とたずねたところ、少しでも向上したと感じた生徒が76%であり、変わらないと感じた生徒は24%と実感できていない生徒も多数いたが、「ハンバーガー構造」を理解し、英語での作文の書き方・結論文の書き方がわかったという回答が多く見られた。

<参考：生徒の作品例>

- ① I think mails is better than letters. It is because mails is quicker than letters. Letters is more expensive than mails. so mails is better than letters.
- ② I think mails is better. We can send a message instantly by using mails. However, when we send letters, we have to go to post office. It wastes time. In conclusion, we can send messages by using mails faster than by using letters so I praise mails.

(いずれも原文のまま)

教師の変化

- ・すべての活動に明確な目標があるか、本当に必要かどうかを考えて授業を組み立てるようになった。
- ・一つひとつの活動のねらいを生徒に十分理解させてから取り組ませるようになった。
- ・同じ科目の担当者と教材を共有し、フィードバックをし合いながら連携して取り組んだ。

今後の課題（次の改善点など）

- ・ライティングテストは2回しか実施できなかった。各学期に実施し継続的指導をしたい。
- ・教師側が用意する題材がライティングテストに適切なものかどうか研究する必要がある。
- ・教科書英文の深い理解を促し、自己表現活動につなげられるような、リーディングタスクや発問を今後も工夫していきたい。
- ・ライティング後にグループ内で発表させることによって、相互のフィードバックや、やり取りを通した学び合いの機会を与えたい。

まとめ・感想

私は今まで、自己表現活動を含む、個々の言語活動のねらいや、活動のつながりを考えずに授業を構成していた。今回、アドヴァンスト研修に参加させていただき、第二言語習得理論の視点から言語活動の意味を深く考えるようになった。そして、さまざまなアプローチや方法論を適切な場面で導入し、継続的に実践していくことで効果が最大限に出せるのだと実感した。これからさらに知識を深め、「考えて学べる授業」を生徒とともに作っていきたい。最後に、今回の研修で出会ったアカデミアの先生方の的確なアドバイスを得て、また、同じ志を持って授業改善に取り組む24人の受講者の先生たちの姿を見ながら、これからもよりよい授業ができるよう努力していこうと思えたことを本当にうれしく思う。

授業改善にあたって参考にした資料等

リーパーすみ子・横川綾子. (2014). 『アメリカ人なら小学校で学ぶ英文ライティング入門』アルク

田畑光義・松井幸志. (2008). 『パラグラフ・ライティング指導入門』大修館書店

卯城祐司. (2009). 『英語リーディングの科学』研究社

Lightbown, P. M. and Spada, N. (2013). *How Languages Are Learned (Oxford Handbooks for Language Teachers)*. Oxford University Press.

生徒の日常を表現させるライティング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は2年生の2クラス，合計69名（男子33名，女子36名）の生徒である。英語に対して強い苦手意識を持つ生徒が多い。授業中は作業的な活動を好み，自分で考え判断するような活動が不得意である。ほとんどの生徒が専門学校，就職を進路に選択する。

解決すべき課題

生徒は簡単な英文であれば理解し表現する力を持っているが，英語を話したり，まとまった英語を書いたりするタスクに直面すると，英語を使うことに対して非常に消極的になり，受け身の姿勢になってしまう。英語を使用する機会を増やし，英語で表現することに慣れさせる必要がある。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・アンケート調査（7月：回答数62）

*あなたは英語の学習が好きですか，嫌いですか？

好き	12人（19.4%）	どちらかといえば嫌い	20人（32.3%）
どちらかといえば好き	19人（30.6%）	嫌い	9人（14.5%）

無回答：2人（3.2%）

*この授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか？3つ選んでください。

英語を聞く力	30人（48.4%）	英語を書く力	32人（51.6%）
英語を話す力	36人（58.1%）	単語や熟語の知識	22人（35.5%）
英語を読む力	36人（58.1%）	文法の知識	19人（30.6%）

この結果から半数の生徒が英語が好きであること，半数以上の生徒が，「読む力」に加えて，話したり書いたりする発表技能を伸ばしたいと思っていることがわかった。

- ・英語を書く力の調査（7月：回答数62）

トピック：「あなたが最近驚いたことについて，その理由も合わせて英語で書いてください。」

回答の状態	人数（割合）
白紙	29人（46.8%）
単語が書かれているが文章として成立しておらず意味が通じない	27人（43.5%）
文章として誤りがあるが，かろうじて意味が通じる	6人（9.7%）

*実施後のアンケート「英語を書くとき、何を難しいと感じていますか？」

単語・表現	35人 (56.5%)	綴りがわからない	3人 (4.8%)
語順	18人 (29.0%)	すべて	2人 (3.2%)

無回答：4人 (6.5%)

この調査から 9 割の生徒が意味の通るまとまった英文を書くことができていないということがわかった。また実施後のアンケートでは、作文をする際の困難点として多くの生徒が単語や表現、語順を挙げており、基礎力の指導と練習の必要性を感じた。

リサーチ・クエスチョン

自分の英語を使って日常の出来事についてまとまりのある英文を書けるようにするためにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：ルーブリックの各項目で B 評価以上を取得する生徒がそれぞれ全体の 70%を超える。

<ルーブリック>

分量	A 「主語+動詞」がある文が 4 文以上書かれている。 B 「主語+動詞」がある文が 3 文以上書かれている。 C 「主語+動詞」がある文が 2 文以下書かれている。
内容	A 内容に一貫性があり、例・理由などによって深められている。 B 内容に一貫性がある。 C 内容に一貫性がない。
正確さ	A 内容伝達に支障をきたす誤りがない。 B 内容伝達に支障をきたす誤りが 2 つ以内である。 C 内容伝達に支障をきたす誤りが 3 つ以上である。

改善のための手だて

- 英作文のトピックに合った必要な表現を明示的に指導すれば、十分に伝わる正確さを持った文が書けるようになるだろう。
 - ・「主語+動詞」の入った文を作ることを習慣づける。
 - ・英作文に役立つ動詞、表現を事前に指導する。
- 英文で日記を書かせれば、日常の出来事やそれに対する気持ちなど、まとまった内容を英語にすることに慣れるだろう。
 - ・冊子に日記を書いて提出させ、個別にフィードバックを与える。
 - ・ルーブリックを生徒に提示し、作文の際に注意することを意識づける。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- アンケート調査（11月：回答数65）

*あなたは英語の学習が好きですか、嫌いですか？

好き	12人（18.5%）	どちらかといえば嫌い	20人（30.8%）
どちらかといえば好き	18人（27.7%）	嫌い	15人（23.1%）

- 書く力の再分析－7月の作品のルーブリック評価（回答数62）

トピック：「あなたが最近驚いたことについて、その理由も合わせて英語で書いてください」

	A	B	C
分量	0人（0.0%）	0人（0.0%）	62人（100%）
内容	0人（0.0%）	0人（0.0%）	62人（100%）
正確さ	1人（1.6%）	5人（8.1%）	56人（90.3%）

- 書く力の調査（11月：回答数52）

トピック：「最近の出来事について英語で日記を書きなさい」

	A	B	C
分量	22人（42.3%）	15人（28.8%）	15人（28.8%）
内容	17人（32.7%）	24人（46.2%）	11人（21.2%）
正確さ	18人（34.6%）	27人（51.9%）	7人（13.5%）

7月と11月のアンケートを比べると、回答数の違いが少しあるものの、英語が好きであると答えた生徒の割合は若干少なくなっているが、これは2学期に扱った教科書の本文が難しかったこと、2学期の定期テストの平均点が低下したことが影響していると思われる。7月の作品を設定したルーブリックを使ってあらためて評価した結果を、11月のものと比べたところ、かなりの伸びが見られた。7月には全員、あるいはほとんどの生徒がすべての項目でC評価であったが、11月には各項目でB以上の生徒が70%を超え、改善の目標に達した。「正確さ」のC評価の少なさについては、冒険をせずに既習表現のみを使った生徒によるところも大きいと思われるが、全体として改善の成果はあったといっていだろう。取組中は、自分が思いついた書きたいことを英語でどう表現するかを質問してくる生徒が増え、書くことへの積極性も高まったことを感じた。また自分が使える英語でうまく言い換えながら作文できる生徒も増えてきた。

教師の変化

- 丁寧にアンケートを行うことで、生徒の興味をより授業に反映させるよう心がけるようになった。
- 自由度の高い課題は評価が難しいと思っていたが、ルーブリックを活用することで一貫した評価ができるようになり自信につながった
- 事前にルーブリックを生徒に提示することで生徒とともに同じ目標に向ってがんばることができた。

今後の課題（次の改善点など）

- ・生徒の出席が揃わず、すべての生徒に継続的な指導をすることが難しかった。
- ・授業中の15分程度の時間で活動を行ったが、時間が足りないと感じている生徒がいたため、段階的に難易度を高めていく必要があるかもしれない。
- ・今回は日記で自分のことを書かせたが、日本語であっても4文も書きたいことが思いつかない生徒がまだ多くいたため、プランニングの指導の必要を感じた。
- ・英作文では改善が見られたにもかかわらず、「英語が好き」という生徒の割合が伸びないことから、作文以外の活動でも達成感を感じさせられる改善が必要であろう。

まとめ・感想

ライティングの成果物を点検する作業は大変ではあったが、回数を重ねるにつれ生徒の文章が上達してくるととてもうれしく感じ、もっと力を伸ばしてあげたいという教師としての意欲にもつながった。生徒のなかには楽しんで日記を書いているものもいた。このような自己表現活動の評価やデータの活用法を学年・学校全体へと広げ生徒の英語学習に対する意欲を高めていきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

- 大井恭子(編著). (2008). 『パラグラフ・ライティング指導入門—中高での効果的なライティング指導のために—』 大修館書店
- 吉田研作. (2007). 『3分で書いてみよう！はじめての英語日記』 コスモピア

平成 27 年度 英語教育アドヴァンスト研修 担当講師 (50 音順)

江原 美明 (えはら よしあき)

クマザワ、ジョージ (KUMAZAWA, George)

パリセ、ピーター (PARISE, Peter)

村越 亮治 (むらこし りょうじ)

平成 27 年度 英語教育アドヴァンスト研修
授業改善プロジェクト 報告書
－アクション・リサーチによる高等学校英語授業の実践－

発行日 平成 28 年 3 月 31 日

編集 神奈川県立国際言語文化アカデミア
(担当) 村越 亮治 江原 美明

発行 神奈川県立国際言語文化アカデミア
横浜市栄区小菅ヶ谷 1 丁目 2-1
TEL 045(896)1091
